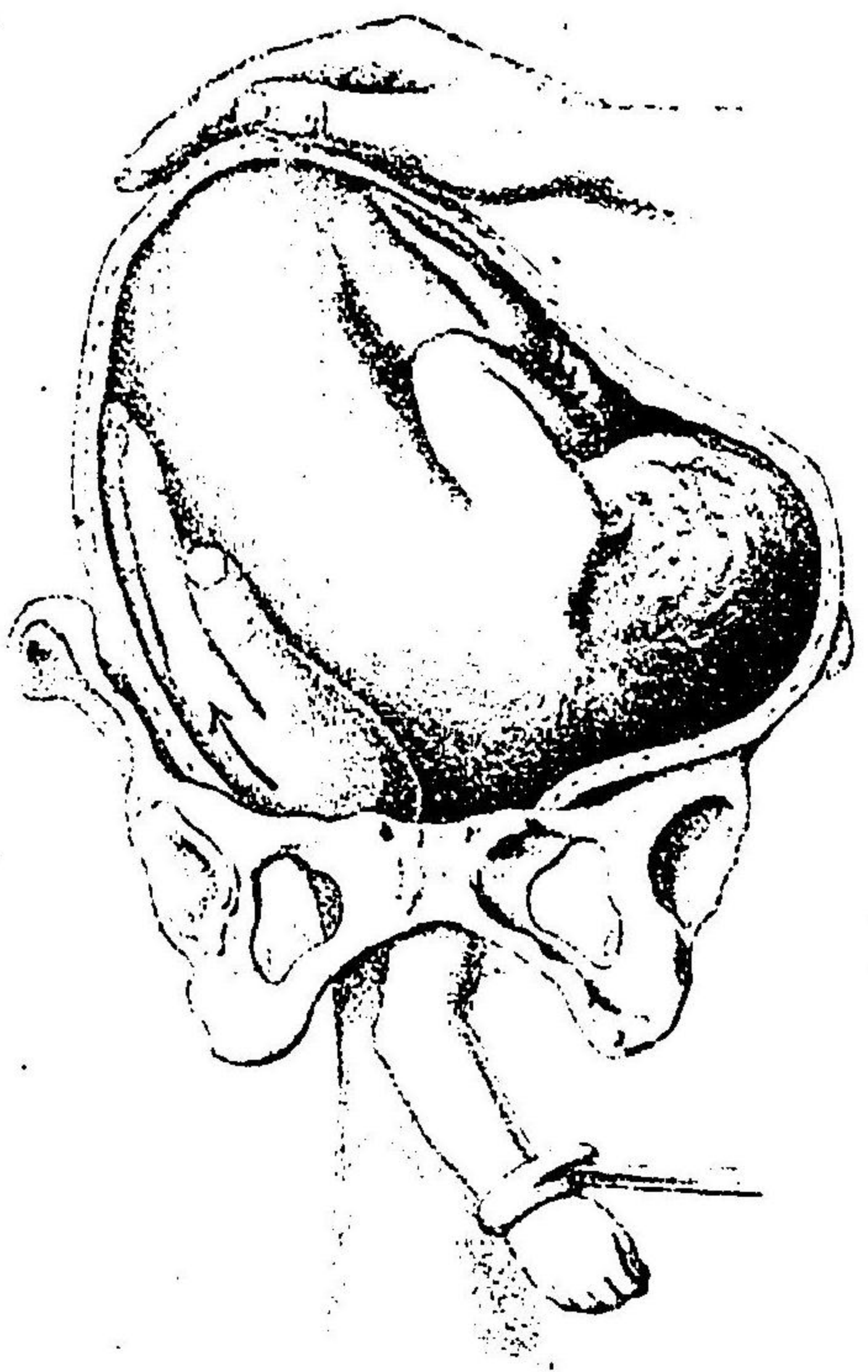


産婆は外回轉術に於て横位を頭位にのみ回轉すべし

め決して力を用ゆべからず而して陣痛發起時のみに於て此の如き方法をば反覆して試み兒頭遂に骨盤入口に達せば暫時之れを支持し次回の陣痛を待ちて手を放ち尙ほ移動するときは續いて此れを支持し兒頭の固定するを待ちて止む若し骨盤端位に回轉せしめんご欲せば以上の方法を反對に行ふべきのみ即ち一手を臀部の上方に貼じて骨盤入口に向はしめ他手を以て兒頭を壓上し子宮底に至らしむ此の如くして位置を整復したる後は横位を頭位させし場合にはもご兒頭の存したる側方横位を骨盤端位させし場合にはもご骨盤端位の存せし側方を下にし持續して側臥の位置を取らしむべし此の法は妊娠中或は分娩初期破水前に行ふべきものにして兒頭が骨盤内に固定せるか或は破水後なるときは行ふべからず

○産婆自ら回轉ナシ得べき場合ハ如何

第 二 百 二 十 一 圖

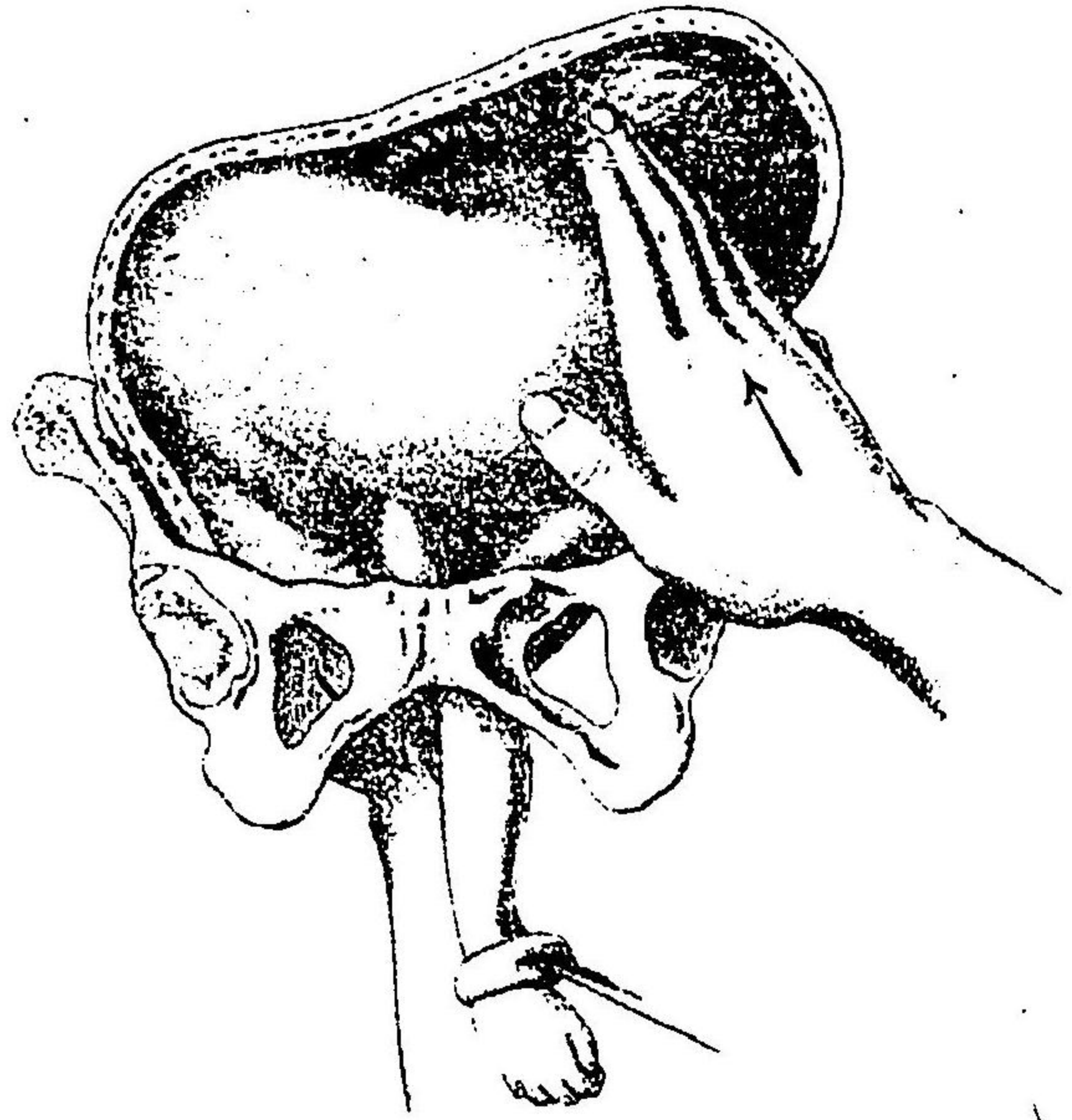


一手を子宮内に挿入して兒の一足に達せんす

以上の處置を施すも其效なく山寒僻地等に於て醫師を迎ふる事能はず或は醫師の來着遅き時に於て子宮口は既に全く開大し已に破水し陣痛益々強劇となり子宮部は非常に延長して菲薄となり子宮は將に破裂せんとし或は前置胎

第一横位に内回轉術を行へるもの (其一)

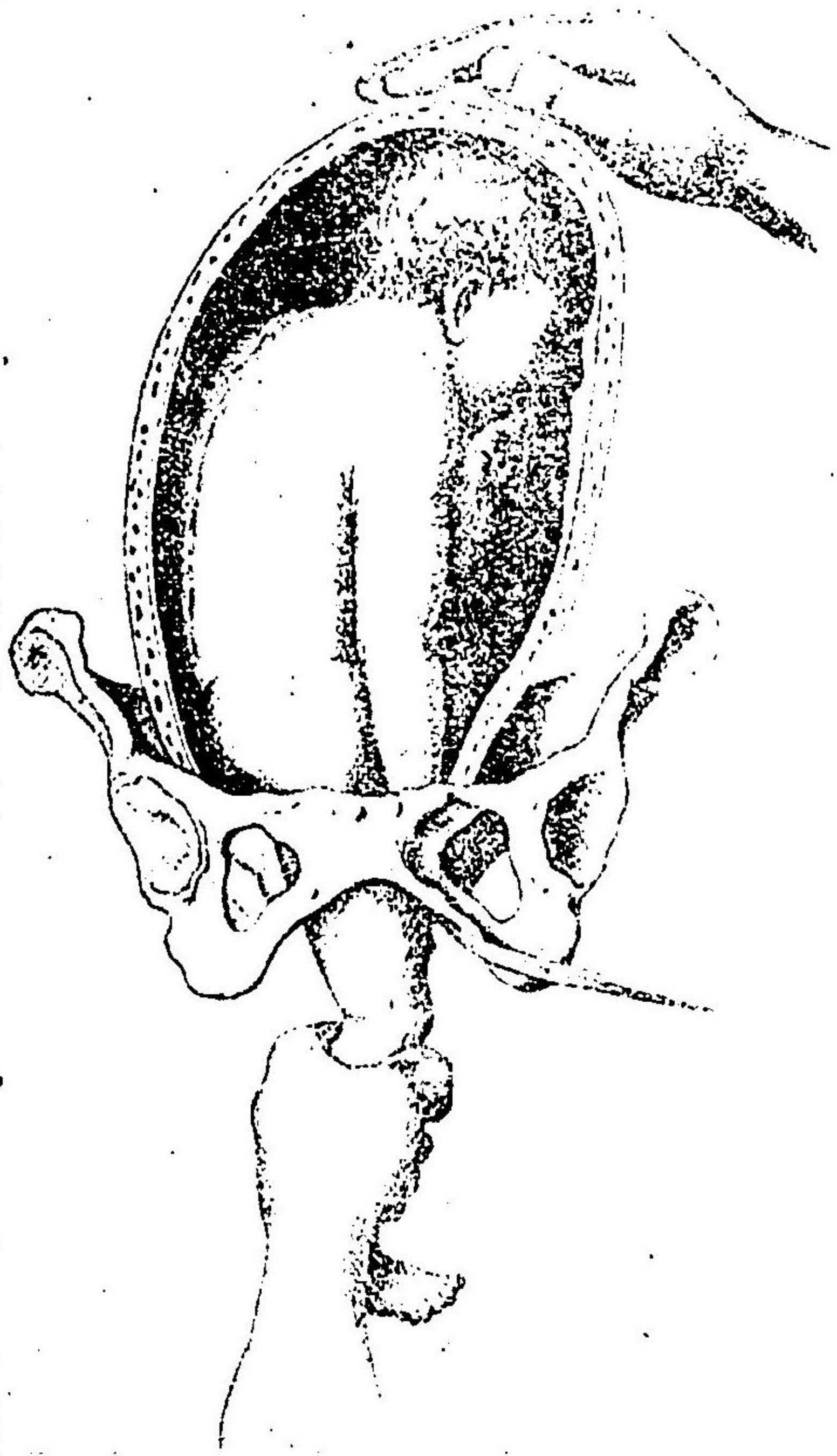
圖 二 十 二 百 二 第



兒の一足を取て来出さんす

盤にして子宮出血甚だしく爲に母は急性貧血に陥り腔栓塞其他の止血法も效
無きとき或は産婦突
然死亡し胎兒は未だ
生存し居る事明らか
にして子宮口は既に
充分開大せる等の場
合に於て醫師の來着
を待つときは兒は勿
論母の生命をも救ふ
事はざるに立至ら
ば産婆は如何の處置
を執らんか産科手術
は己れの許されざる
處として徒らに腕を

圖 三 十 二 百 二 第



兒の一足を取出し既に回轉術の目的を達せり

組み母兒の死を傍觀すべきか是れ恐らく産婆の本旨にあらざるべく又た法律
の本旨にもあらざるべし否な斯の如き場合に於ては假之自己の職務を抛ちて
同 (其三)

も母児の生命を救はざるべからざるに至るべし故に茲に斯の如き場合の爲め或は産科醫の助手となるに其方法を知り居らば甚だ便利ならんが故に此際行ふべき内回轉術の概要を附記して参考に供せんとす

内回轉術

内回轉術とは一手を腔及び子宮腔内に挿入して兒體を回轉するの際他手を腹壁上に抵て、其回轉を補助するの法にして此際單に指のみを子宮内に挿入するときは雙合回轉術と稱す産婆の行ふべき内回轉術は皆危険に迫りて已むを得ざるに行ふものなるが故に頭蓋位に回轉する事なく唯だ足位に回轉して後ち自然の産出を待つか或は引續き骨盤端位挽出術を行ふべきものなり内回轉術を行はんとするには先づ膀胱直腸を空虚ならしめ即ち浣腸を行ひ傍ら排尿せしめ手及び外陰部は嚴重なる消毒を行ひ殊に手は肘部を越へ上膊に至るまで嚴重に消毒し次で腔内は三十倍石炭酸水又は百倍ゾール水を以て精密なる洗滌を行ひ産婦を仰臥せしめ臀下に枕を挿入して腰部を高くし膝を

不完全なる手指の消毒は産婦を毒殺するに等し

○回轉術ノ準備ハ如何

外方の手を以て兒の足部を内手に近接せしむると甚だ肝要なり

屈せしめ産婆は胎兒の足部に對せる手に（第一横位には左手第二横位なるときは右手）三十倍石炭酸阿列布油を塗り其指を集めて圓錐狀（みんすい）となし陣痛間歇時に於て徐々に腔内に挿入し陣痛發作するときは暫く其進行を止め再び間歇するに及んで漸次深部に挿入し一指或は二指（雙合回轉術）或は全手（内回轉術）を子宮内に達せしむ此の際上肢の脱出あらば細き紐にて結び子宮内に退かざる様介者をして緩く保持せしめ置き子宮内に達せる手指を先づ兒の臀部より徐々に大腿に送り順次下腿足部に達せしめ骨盤端位挽出術の條下に於て述べし方注にて前方に存する足部を握み陣痛間歇時に之れを牽引し同時に他手を腹壁上よりして兒頭に貼し之れを子宮底に向つて押壓回轉せしめ一足を膝に至るまで陰唇外に牽出すべし若し兩足を把持するを得ば同時に牽出するも可なり即ち之にて回轉術は終りなれ共母體の危険或は死亡等に於ては引續き直ちに骨盤端位挽出術を行はざるべからず之れに反して前置胎盤に於ける出血に對して回轉術を行ひたる場合に在りては胎兒の兩足或は一足を牽出するときは通常臀部の壓迫により止血するを以て引續き挽出術を行ふの必要な

く自然の分娩を待も得べし

胎兒の數の異常

復胎分娩

分娩經過

普通分娩に均しく、先づ陣痛發作し子宮口開大し

共に第一兒の胎胞を現は

し破水の後通常分娩に於けるが如く第一兒産出し

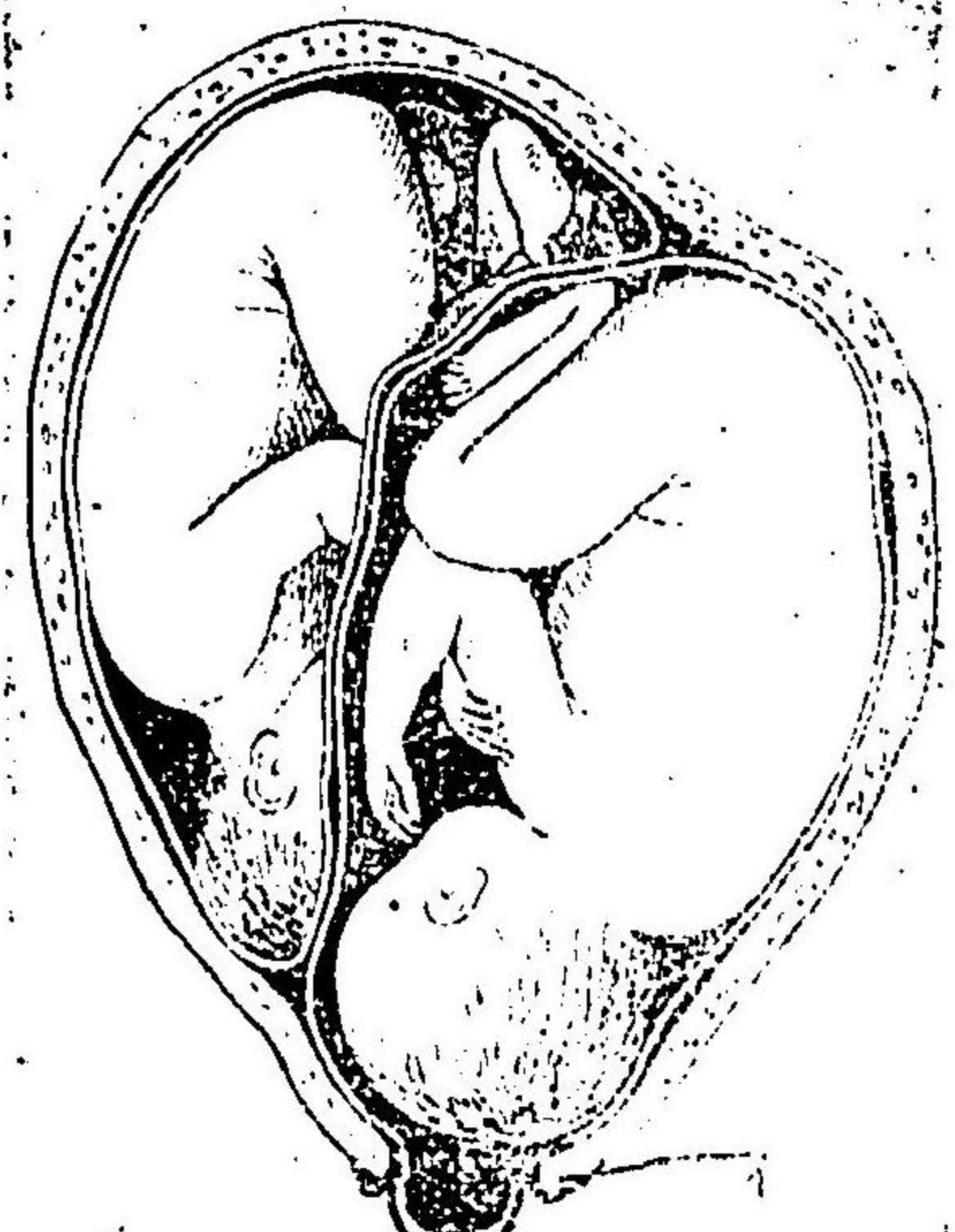
次で第二兒の胎胞を現は

し同じく分娩を終る胎盤

は稀れに第一兒産出後續

いて産出する事ありと雖

第二百二十四圖



○雙胎分娩ノ經過ハ如何

不妊症の人もあるに雙子を生める産婦は幸福なり耻しなど云ふは謂れなし

も通常第二兒の産出後に於て産出す而して第一、第二兒産出の間は通常十五分乃至一時間を費し、雖も時として非常に短く又た時としては數時間數日に亙ることあり

又た分娩に要する處の時間は胎兒の小なるが爲單體分娩より長からざるも開日期は陣痛微弱を發し易く屢々長時を要する事あり

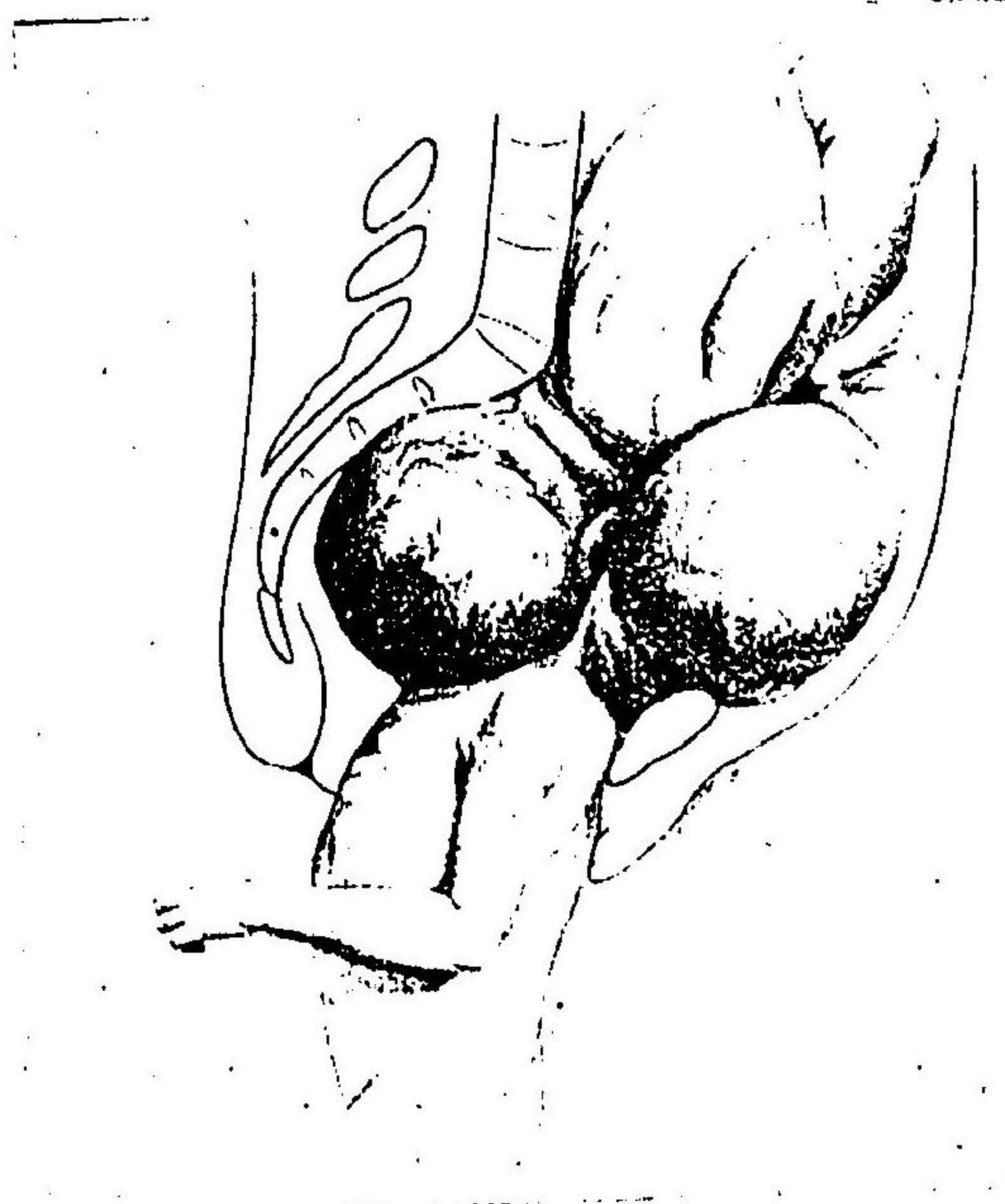
處置

單胎分娩に於けるに異る事なしと雖も注意すべきは

屢々異常の胎位をこる事第一兒産出の後第二兒の血液を失はざる様臍帶は必ず二ヶ所に結紮すべき事及産出せる兒は通常發育不良なるが爲めに身體を冷却せざる事及産出したる兒の順序を記憶し兄弟姉妹を誤らざる事等なり而して複胎分娩に在りては非常に膨大せる子宮の俄かに收縮するにより第二兒

○雙胎分娩ノ處置ハ如何

第 二 百 二 十 五 圖



雙胎分娩に於て兩兒頭の互に嵌頓せるものを示す

いて甚だしき分娩の困難を來す事あり即ち兩兒同時に分娩を始むる時にして第一兒の全く娩出せざるに第二兒は早や下降

の胎盤早期剝離を來し易し故に最も心音に注意するを要し胎兒の産出後は子宮の過度擴張の結果として子宮收縮不全を來し易きが故に殊に後出血に注意すべし

雙胎に在ては時

○畸形胎兒ノ分娩ハ如何

して第一兒に接着する場合はなり就中第一兒骨盤端位にして第二兒頭蓋位をこる時は圖に示すが如く兩兒互に嵌頓し頭部と胸部との周圍を以て産道を通過せざるべからざるが故に分娩は殊に困難なるものにして醫師を招きて其處置を乞はざる可らず

三胎四胎等の分娩は概して雙胎と異なる處なきも胎兒數の多きに從つて流産早産を來し妊娠末期に至る事少なく其取扱法も亦た雙胎分娩に異ならず

分娩を障害すべき其他の胎兒の異常

胎兒は疾病若しくは畸形により種々の變狀を來し爲めに分娩の障害を來す事少あからず例之は過大なる胎兒腦水腫さて兒

分娩を障害すべき其他の胎兒の異常

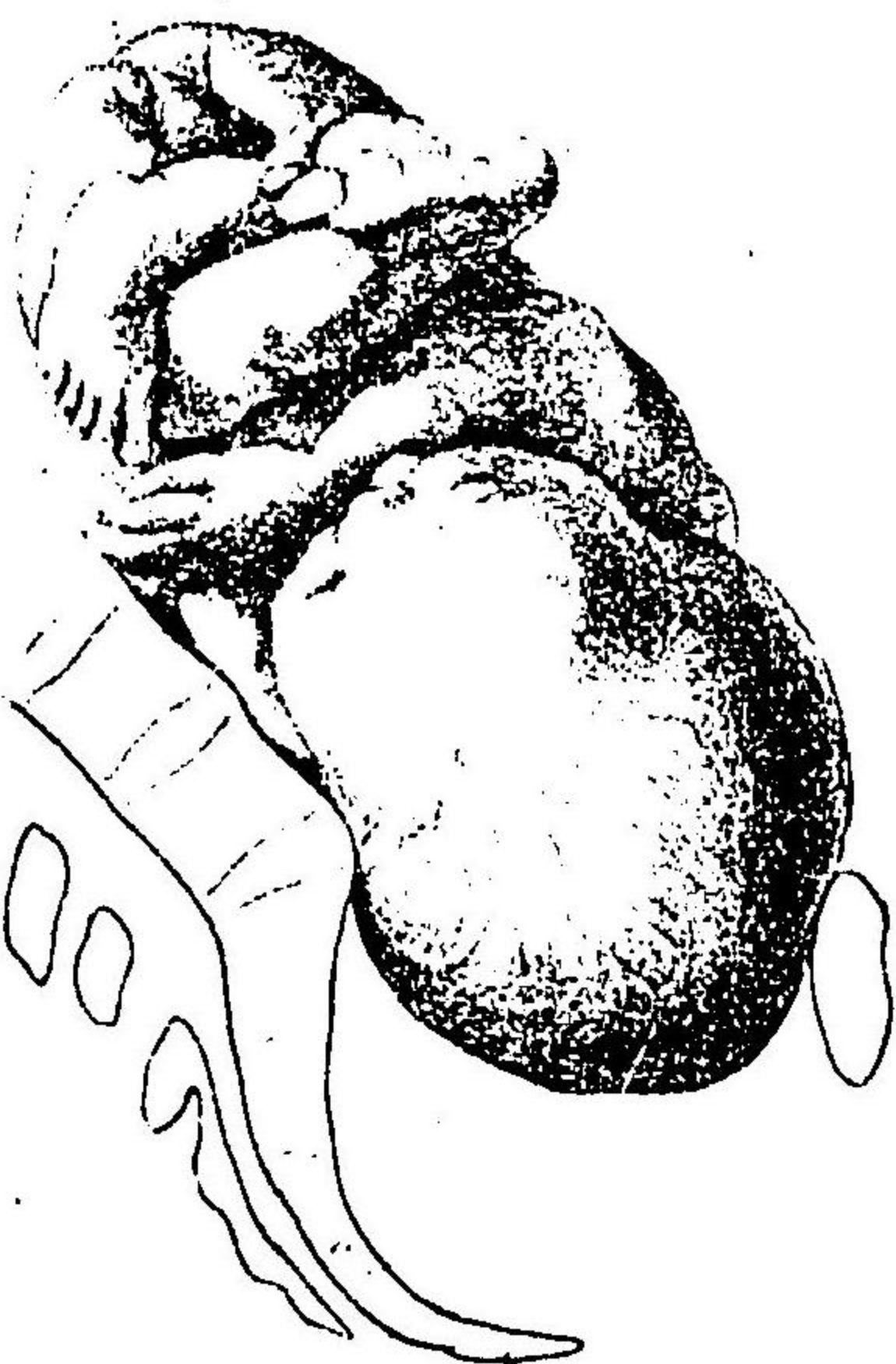
頭の非常に大なるもの其他胎兒の身體の外部に生ぜる腫瘤、重複畸形胎兒等は母體骨盤の通常なる場合と雖も狹窄骨盤と同様の障害を來すべし今之れ等のもの、中著しきものを舉ぐれば左の如し

腦水腫

○腦水腫ハ如何且ツ其分娩時ノ障害ヲ記セ

頭蓋腔内に水液の溜溜する處の疾病にして頭蓋は甚だしく大となりて顛門縫合等は大に離開し頭蓋の大きき時としては大人頭大に達する事あり外検査上兒頭は著しく大にして軟く内診を行ふに骨縫合顛門等は大に離開し時、して胎胞を誤る事あり此症にありては狹窄骨盤と等しく分娩の障害を來し母體骨盤普通にして産出力正規なるも兒頭は骨盤内に入りて固定す

腦水腫を示す



圖六十二百二第

て稀れには兒頭自ら破裂縮少して分娩を遂げ得る事あり

兒頭大なるが故に骨盤内に入らず

る事能はず陣痛は益々強劇となり子宮下部は大に延長せられ遂には子宮破裂を來すべし故に以上の症狀を認めば直ちに醫師の往診を乞はざるべからず然れ共極め

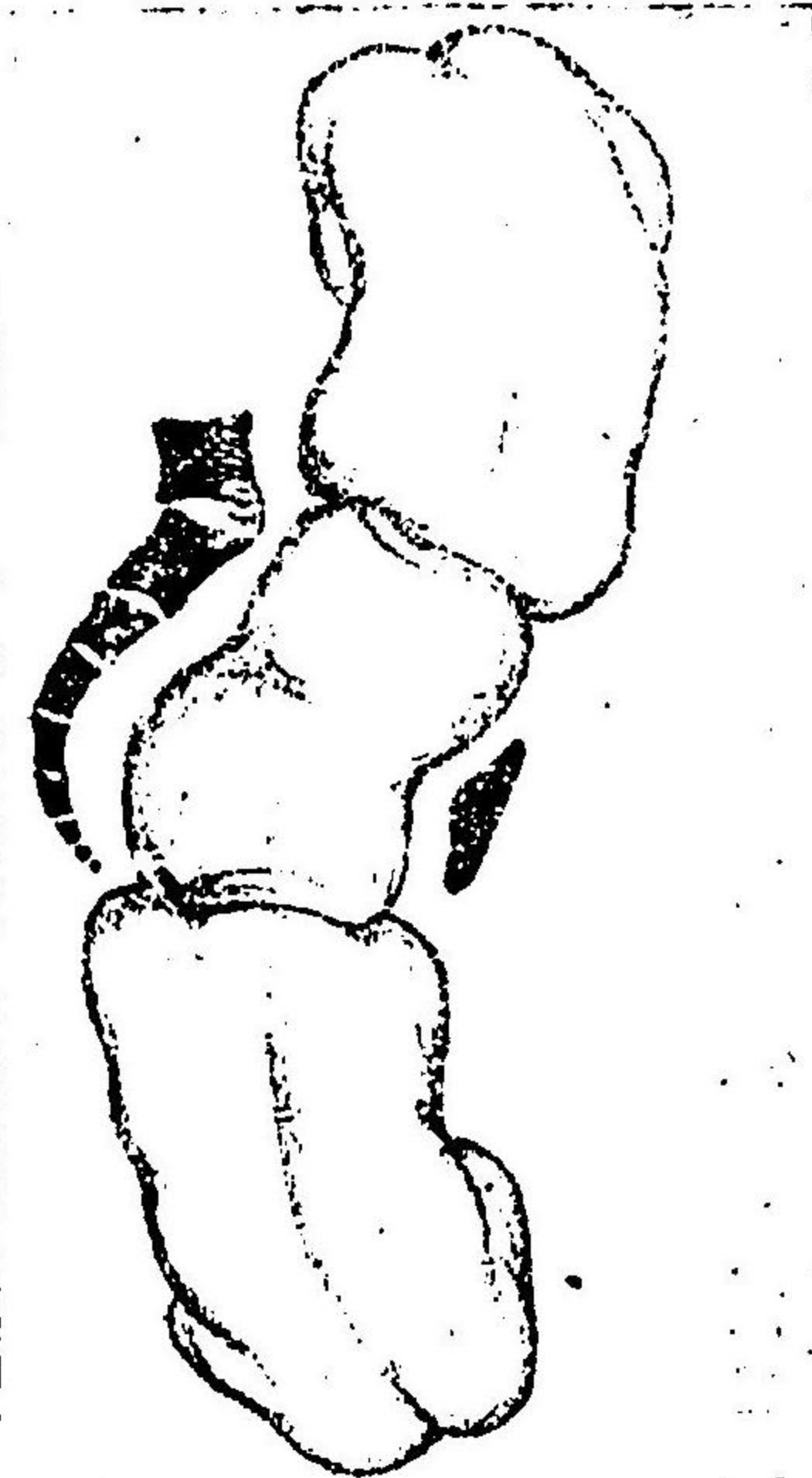
重複畸形胎兒

二胎兒相癒合せるものにして數種ありたごへば兩兒の頭部の

○畸形兒ノ種類及ビ助産婦ノ取扱法

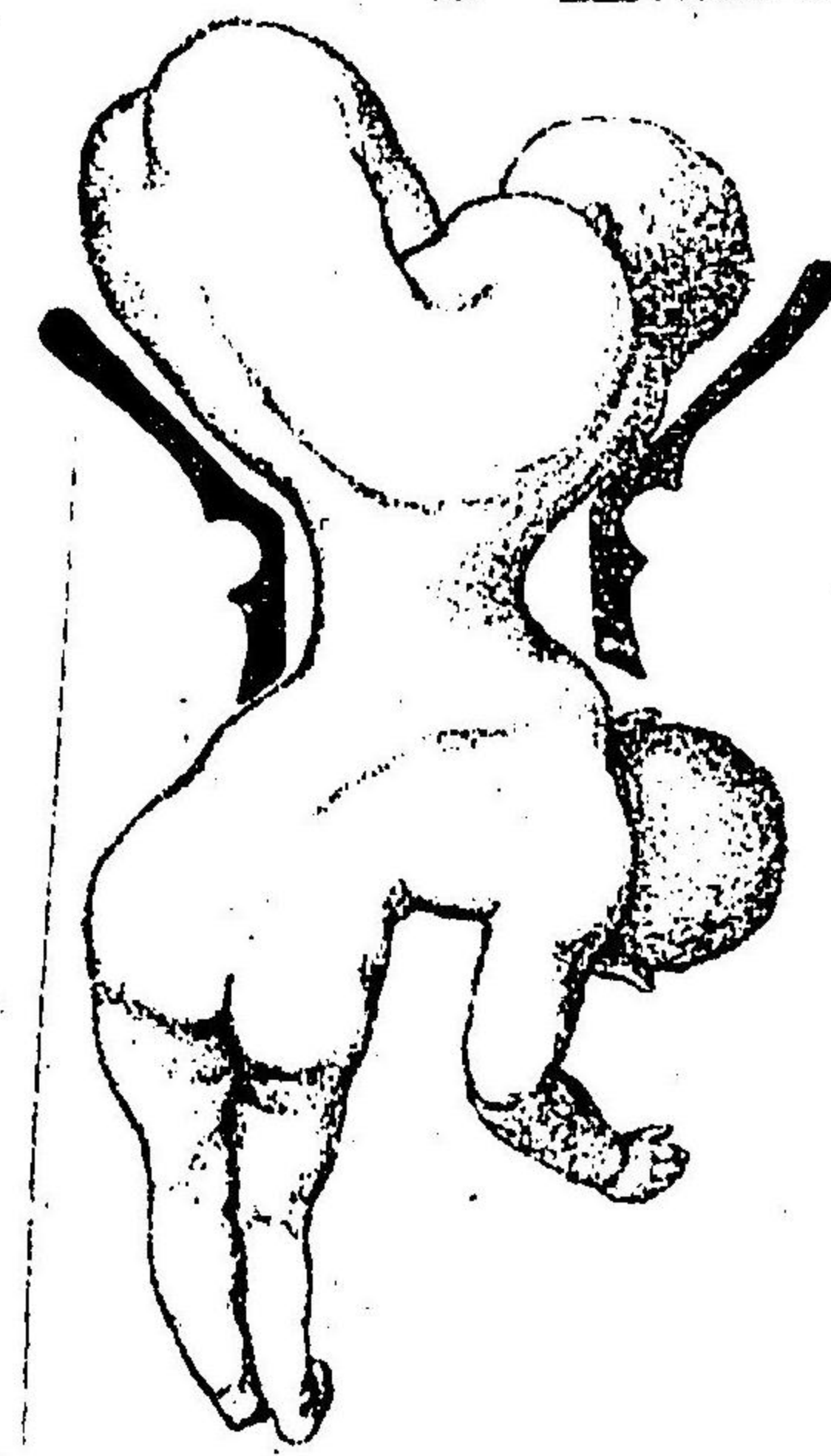
重複畸形胎兒

圖七十二百二第
(一其)



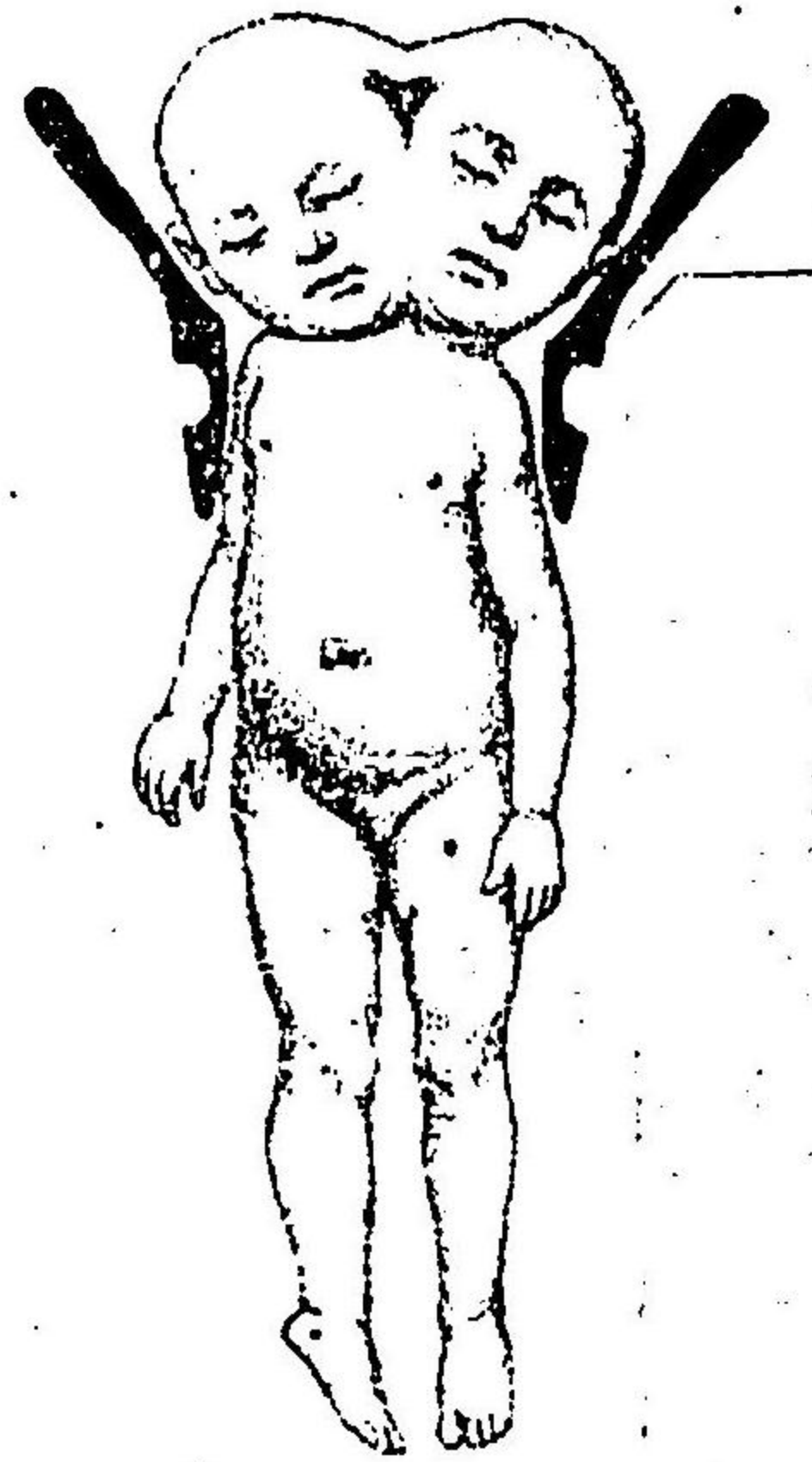
の兒胎るす碍障を婉分
す示を形畸
のもるせ着癒部頭の子二

圖七十二百二第
(二其)



同
のもるせ着癒部背の子二

圖七十二百二第
(三其)



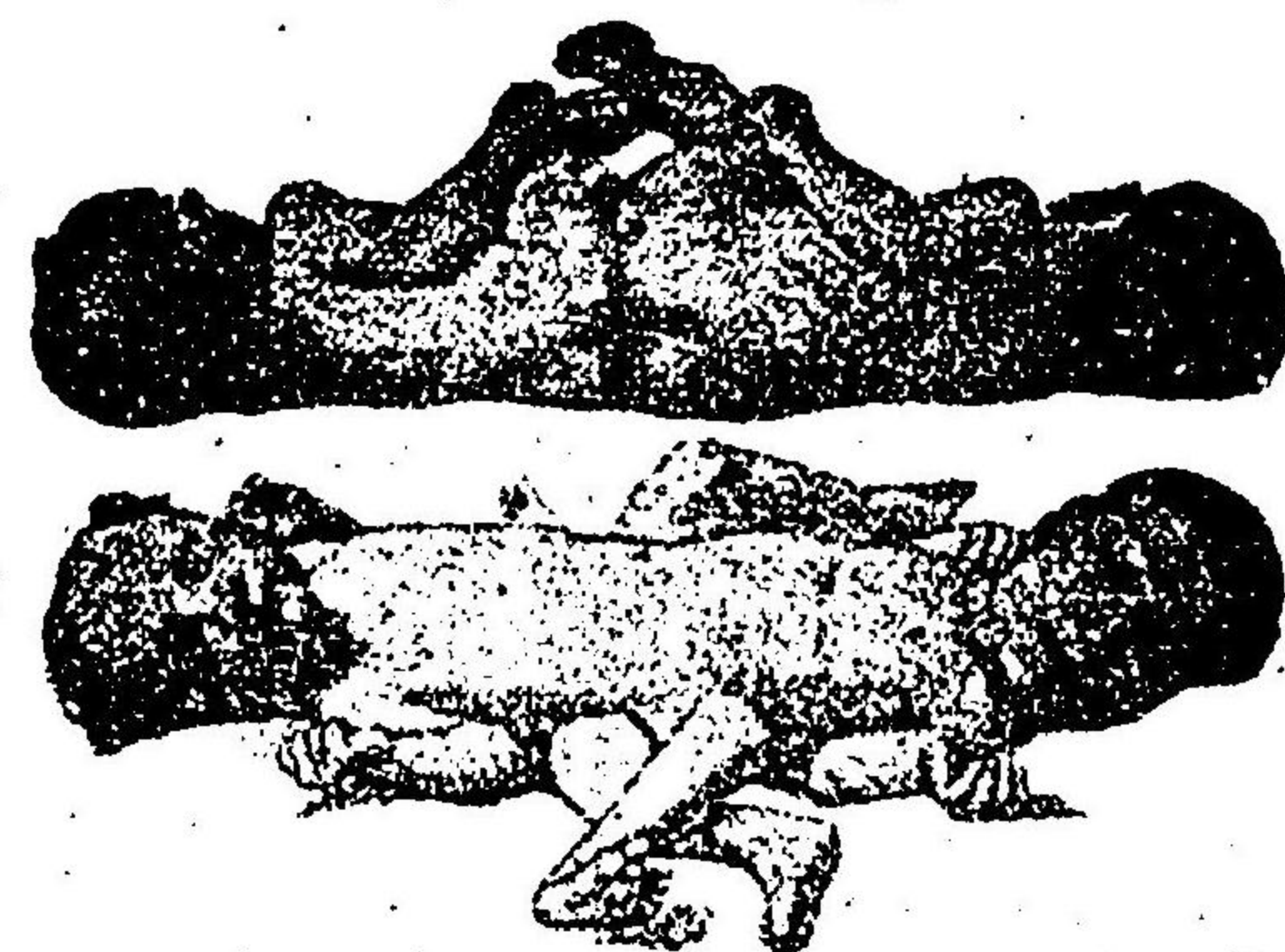
同
のしるす有を頭二體一

圖七十二百二第
(五其)



同
のしるせ着癒部腹の子兩

圖七十二百二第



兩兒の背癒部着せるもの

同
(其四)

○初生兒ノ畸形ヲ列記
セヨ

分娩を障碍せざる
胎兒の畸形は甚だ
種々あり尙ほ初生
兒の異常の條下を
参照すべし

み癒合せるもの兩兒の胸部若しくは腹部の癒合せるもの兩兒
の背部或は腰部の癒合せるもの兩兒の臂部癒合せるもの一個
の軀幹に二個の

同

(其六)



膀胱の擴大に依り腹部の膨大せるもの

の末期に至るも通常の胎兒に比すれば發育微弱あるを常とす
故に普通の骨盤にして産出力強きときは著しき障害なくして
分娩を遂げ得る事ありと雖も通常は然る能はず而して此畸形

頭部を有するも
の一頭にして二
個の軀幹を有す
るもの等是なり
何れも屢々流産
早産を來し妊娠

圖七十二百二第

同

(其七)



圖七十二百二第

脊椎の破裂せるものを示す

ひを置き直ちに醫師を迎ふべし

其他脊椎破裂して生まれつき脊椎骨の後側に裂隙ありて脊髓
液を有する腫瘍の膨出せるもの腹壁の缺損して内容の體外に

は妊娠中には診断
を確定する事困難
にして唯だ雙胎妊
娠に非ずやと疑診
し得るのみ故に雙
胎妊娠の疑ひある
ものにして産出甚
だ困難あるときは
此の畸形胎兒に疑

出であるもの高度の腹水等は皆を分娩の障害を來すべし

第九十二節 臍帶羊水卵膜胎盤の異常

臍帶脱出

胎胞破裂後臍帶は胎兒先進部に沿て脱出する事あり殊に早期破水の時は最も屢々此の脱出を來すべし若し破水前にして胎胞に胎兒先進部の間に臍帶を觸知するときは之を臍帶の下垂と稱す、是等は上肢の脱出と等しく胎兒の先進部が産道を全く閉鎖せざる場合に於て生ずるものにして横位に最も多く足位顔面位等にも起る事屢々にして頭蓋位にありては稀れなり其他狹窄骨盤、羊膜水腫、雙胎妊娠、早産、前置胎盤、臍帶の長きもの、等に來り又た産婦起立するの際胎胞破裂する

○臍帶脱出ノ原因及ビ
 處置ヲ記セ
 ○臍帶脱出ノ原因
 ○臍帶脱出ノ原因
 ○臍帶脱出ノ原因
 ○臍帶脱出ノ原因

徵候

ときは本症を發する事あり

内診を行ふに胎胞破裂前に在りては胎胞内に搏動せる索狀物を觸知し胎胞既に破裂せるときは子宮口腔及び外陰部等に於て索狀物即ち臍帶を觸知するものにして本症を發する

頭位に於ける臍帶ノ脱出を示す

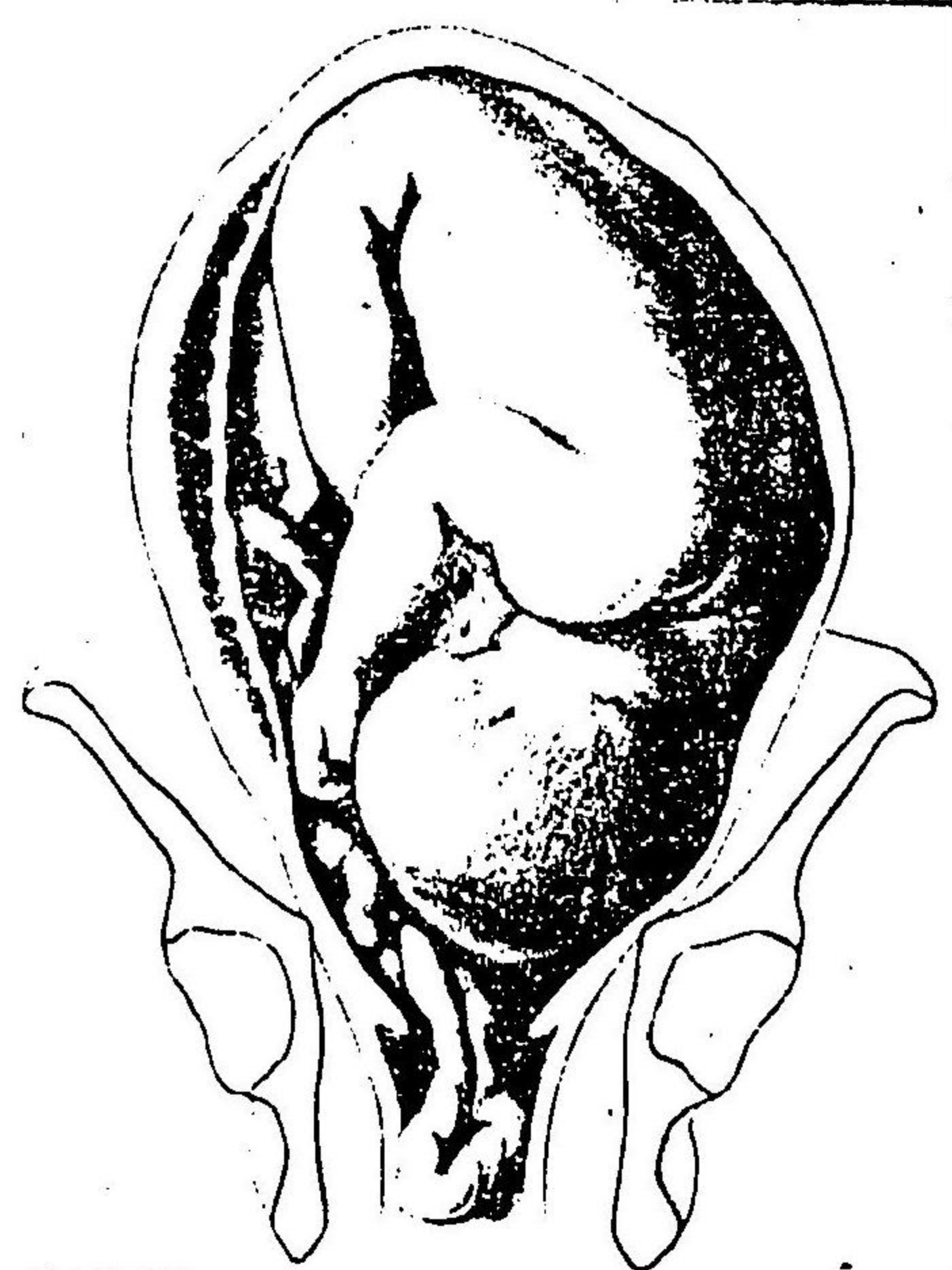


圖 八 十 二 百 二 第

は直ちに窒息死に陥るべし而して先進部硬固なるに従がひ壓

脱出せる臍帶を手にて無理に還納しても駄目なり

迫せらるゝ事強きが故に頭位に於ける臍帶脱出は豫後最も不良なり、又た耻骨縫際側に脱出せるものは薦骨側に脱出せるものより不良あり

處置　内診の際胎胞内に臍帶の下垂せるを發見するか若しくは已に破水後なるも臍帶の脱出輕度あるときは直ちに産科醫を招き醫師の來着するまで身體を安靜ならしめ努責を禁じて胎胞の破裂を防ぎ臍帶の下垂若しくは脱出せざる側方に臥せしむべし然るときは多くは整復し得るものとす而して胎胞已に破裂し脱出高度なるときは殊に心音に注意し醫師の來着するまでは努責を禁じ手指を以て先進部を壓上し以て臍帶の壓迫を防ぐべし此際胎兒の先進部が骨盤下口に來り既に産出せんとするときは直ちに子宮底を摩擦し陣痛を催進し強き

腹壓を命じ成る可く速かに分娩を終らしめ胎兒若し假死に陥るときは直ちに人工呼吸法を行ひ蘇生せしむべし然れ共陣痛間歇時に於て内診を試み臍帶を觸れ搏動全く止むときは胎兒全く已に死亡せるの徴候あるを以て殊更に醫師を招く必要なく自然の分娩を待ちて可ありと雖も陣痛發作時などに在りては往々生兒と雖も壓迫の爲めに搏動を觸知せざる事あるに より注意せざれば生兒を死胎兒と誤る事あり

臍帶の纏絡

多くの分娩中臍帶が一回若しくは數回頸部、或は四肢に纏絡する事ありかゝるときは分娩遅延せば臍帶壓迫の爲めに胎兒は早く窒息に陥るべし加之臍帶緊張の爲めに胎盤の早期剝離、

〇〇臍帶ノ纏絡ニ就テ
胎兒ノ臍帶ノ纏絡セ
ルトキハ如何ナル處
置ヲナスヤ

子宮繙轉、臍帶の斷裂を來す事あるべし

處置

頭蓋位分娩の條下に於て述べたるが如く兒の背側に

臍帶の纏絡を示す



イ臍帶の強き緊縛に依り骨の陷没せるもの

臍帶の過短及び過長

存する臍帶の一端を引きて之れを緩め兒の後頭若しくは肩胛或は下肢を越へて滑脱せしめ甚だしく緊張せるときは直ちに二重の結紮を施し其間を切斷すべし

圖九十二百二第

臍帶はほゞ兒の身長に等しく五十仙迷位なるか若しくは之れより少しく長きを常とすれども時としては非常に短かく二三十仙迷位より短かく又時としては非常に長く一迷に達する事あり而して過短なる時は胎兒の産出を妨ぐる事稀れなりと雖も胎兒娩出の際其牽引に依つて往々胎盤の早期剝離子宮繙轉、臍帶の斷裂を來す事あり之に反して長きものは最も屢々臍帶の纏絡脱出、眞結節等を生ずべし

臍帶の斷裂

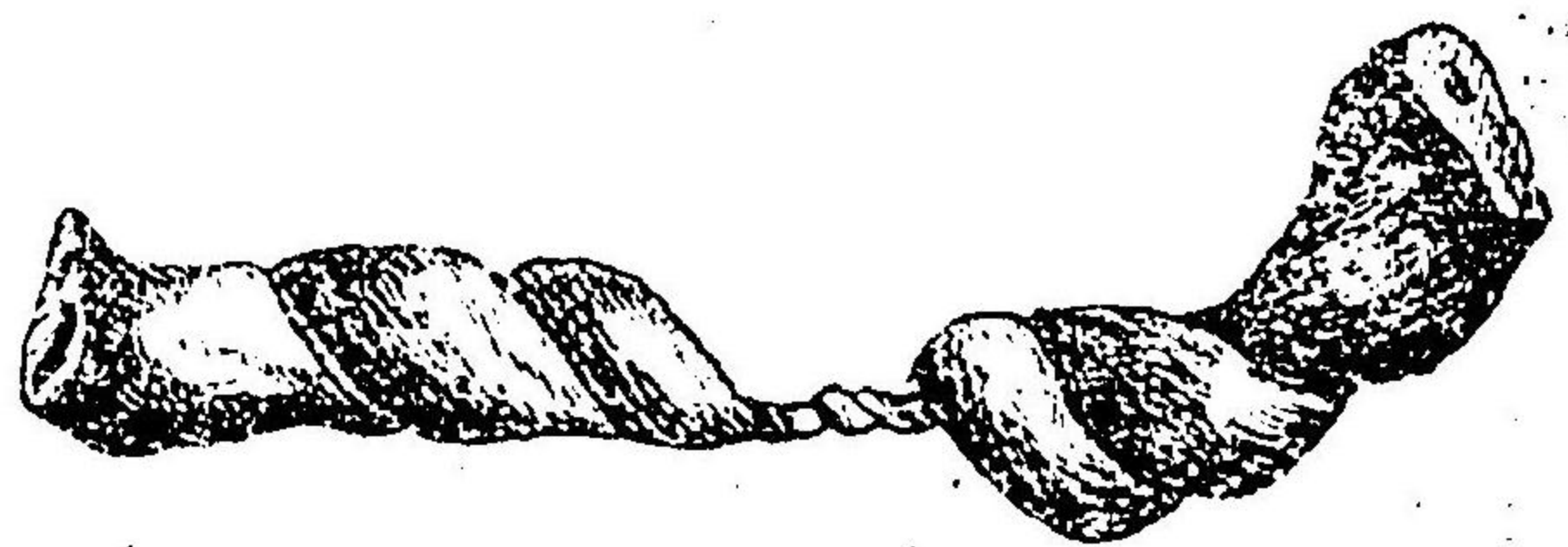
臍帶の著しき緊張に由りて來るものにして多くは臍帶の過短なるもの臍帶纏絡せる胎兒の急速なる産出母體起立位に於て分娩を遂げたる場合(墜落産)等に於て來る而して臍帶斷裂す

るも兒の呼吸さへ活潑なるときは斷端の出血甚だしからず之に反して兒の呼吸不活潑なるときは甚だしき出血を來し兒の死亡を招く事あるが故に斷裂の際は規則として速かに結紮を施こし單に胎兒に屬する部分のみならず胎盤に屬する斷端をも必らず結紮すべし若し臍部より離斷して結紮する事はざるべきは消毒せる綿花を以て強く臍部を壓抵し直ちに醫師の治療を乞ふべし

臍帯の捻轉

臍帯は通常捻轉するものあり、雖も（胎兒の方より見て右より左に）時として其捻轉の甚だしき爲めに臍帯は縮少して殆んど絲の如く遂には離斷を來す事あり、而て捻轉の度強きこ

第 二 百 三 十 三 圖



著しき臍帯の捻轉を示す

きは其捻轉部は互に癒着し之を縷り回す事はざるに至る本症は死亡胎兒に來る事多く又た生活兒にも見る事あり若し兒の生存中に斯く捻轉するときは血行障害の爲めに兒の死亡を招來するものこす

臍帯の異常附着

臍帯は胎盤の中央側部若しくは邊緣に附着する事普通なれども時として臍帯中の血管は各分離し臍帯は肉叉状をあして胎盤に附着する事あり斯かるときは之を臍帯の肉叉状附着と云ふ又た血管は直ちに胎盤の實質

○臍帶ノ卵膜附着トハ如何

中に至らずして卵膜中を走る事あり斯の如き時は之を臍帶の卵膜附着と稱す此の二種は墜落産の如きものにありては斷裂し易く又た卵膜附着の部が子宮口に當るときは破水の時其血管は斷裂し搏動性の出血を來し胎兒を危険を陥らしむべし

羊水の異常

羊水の變化

○羊膜液及ビ卵膜ノ異常ヲ記セ

羊水は透明類黄色殆んど水の如き液體あるも胎兒已に死亡せるか或は危険に迫るときは胎尿を漏すを以て羊水は暗綠色に變ずべし又た羊水が悪臭を放つときは其の腐敗を示すものにして分娩後産褥熱を發するの恐れあるを以て破水の際或は破水後此の如き羊水を漏出するときは猶豫なく産科醫を招かさ

るべからず

卵膜の異常

菲薄なる卵膜

○卵膜ノ異常ニ就テハ羊膜ノ薄キニ失スル事及ビ其處置ハ如何

菲薄なる卵膜は羊水早期漏出の原因となり従つて開口期の遅延及び陣痛の異常を來すべし而して早期破水の際卵膜の破裂は稀れに子宮口の部に於てせずして反つて高く子宮内腔に於てする事あり然るときは羊水は漸次漏出し胎胞形成不十分なるか或は全く之れを形成せずして兒頭は卵膜を以て被はれたる儘分娩するに至る事あり然るときは兒の氣道を杜絶して窒息死に陥らしむる事あるが故に産婆は直ちに之れを除かざるべからず

早期破水

○早期破水ノ原因及ビ
處置

早期破水とは子宮口の充分開大せざるに卵膜の破れて羊水を漏すを云ふ原因は卵膜菲薄なる時或は子宮内膜炎、子宮頸管加答兒、等卵膜に接せる部分に異状ありて卵膜の變化を來せる時又子宮口の開大せざる中に努責するか或は過激の運動をふりきあすか度々の内診に由りて卵膜を觸るゝとき等も同じく早期破水を來すべし、早期破水を來す時は上下肢臍帶の脱出を來し易く胎胞に比すれば圓滑ならざる先進部を以て子宮口を開大するが故に開口期遅延し陣痛微弱を起し易く従つて分娩は甚だしく遅延すべし故に産婆は豫防法に注意し早期破水の原因を來すべきものは豫じめ妊産婦に指示し置くべし已に早期破水を來したる場合には直ちに内診を施し脱出の有無に注

意し先進部分の何たるやを検し適當なる側臥位をこらしめ努責を禁じ大小便の通利を良くし安靜を守らしめ時々胎兒心音に注意し漏出する羊水の分量色臭氣に注意し母體の體温脈を檢し異状あらば直ちに醫師を招くべし

強硬なる卵膜

強硬なる卵膜は適當の時に胎胞の破裂を妨げ子宮口充分開大するも破水せざる事ありて爲に胎盤の早期剝離を來し屢々母兒を危険ならしむ又此の如き卵膜の一部は屢々子宮壁に癒着し爲めに子宮口の開大を妨ぐる事あり或は子宮口全く開大するも胎胞は破裂せずして兒頭は卵膜を被りたる儘産出する事あり斯かるときは兒頭は福帽かぶとを被むること云ふ此の如き場合

○人工胎胞破開法ヲ行
フ可キ場合ヲ記セ

強硬なる卵膜

人工胎胞破開法

○助産婦破水術ヲ行フ可キ場合及ビ其方法ヲ記セ

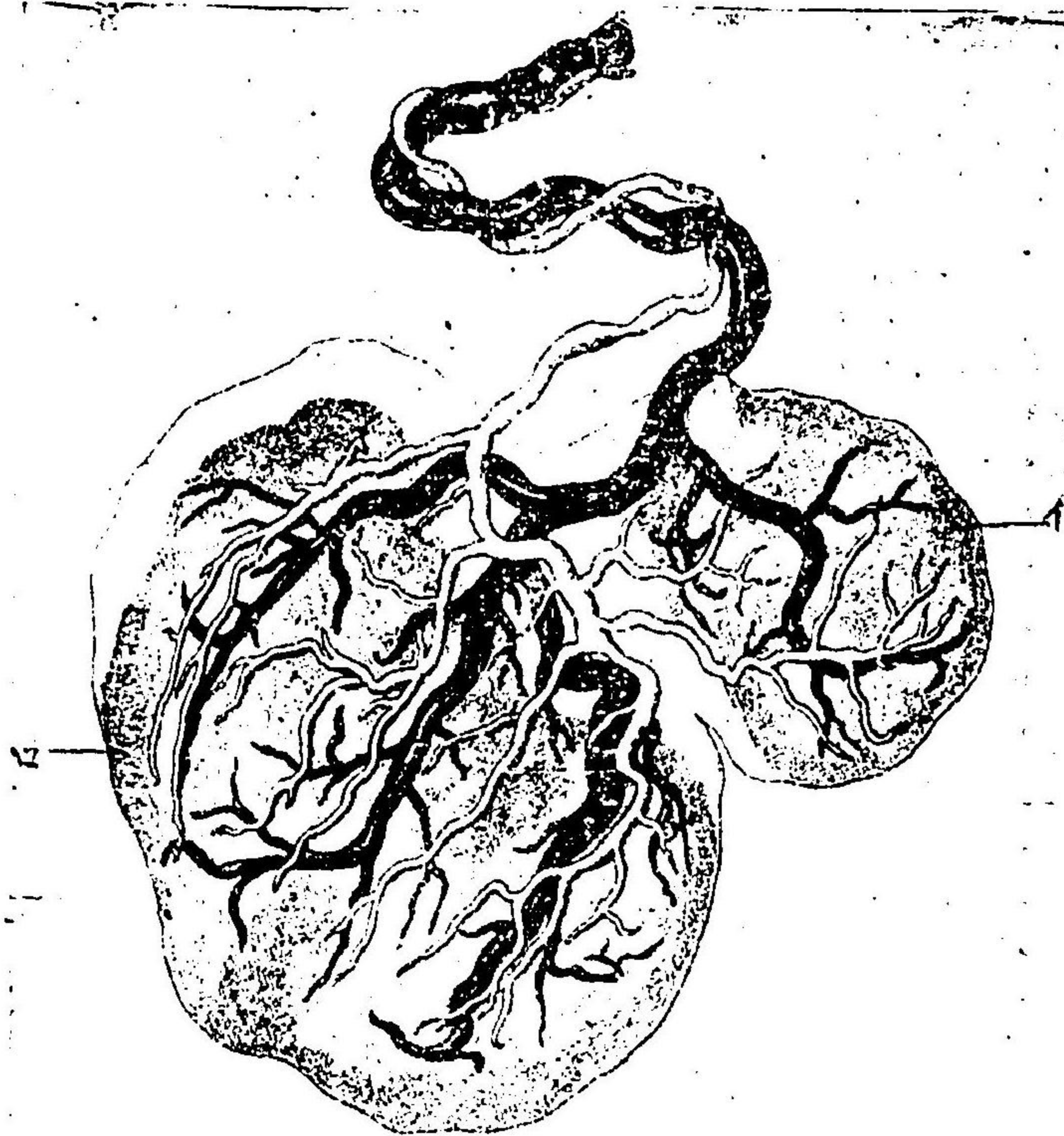
に於て胎胞の尖端已に骨盤狹部に達せば産婆は人工胎胞破開法を行はざるべからず即ち先づ内診して胎胞内に臍帶四肢等の存在せるや否やを検し陣痛時胎胞の緊張するを待つて指尖に少しく力を加へて之れを押壓すべし若し之れにて破れざるこきは金屬製カテーテル若しくは錘子の尖端を代用して可なり雖も先進部を傷つくるの恐れあるが故に成るべく指尖を以てするを良しす

胎盤の異常

○胎盤ノ異常ニ就テ記セ

胎盤の重さと胎児の重さは一に對する五、五の比例をみす。雖も時として甚だしく大なるものあり又甚だ小なるものあり時として是一個の胎盤に兼て二個或は數個の副胎盤を有す

第 二 百 三 十 一 圖



大なる胎盤を有する胎盤に臍帶の状附着を示す
胎盤イ 胎盤ロ

る事あり或は胎盤の胎兒面或は子宮面に於て囊腫。或は他の腫瘍を生ずる事あり又時として眞の胎盤は缺損して卵は全周圍を以て脱落膜と結合する事あり然るときは之れを膜様胎盤と云ふ其他胎盤の子宮壁に附着する事甚だ硬くして産出困難後産期出血等を來す事あり或は其附着緩くして早期に剝離し甚だしき出血を招來する事あり或は胎盤は不正の位置に附着して分娩時甚だしき出血を來す事あり是等の分娩時出血を來すものに就ては後章論述する處あるを以て茲に詳述せず

第九十三節 産婦の疾病

子 痲(急痲)

○産婦痲痺トハ如何及ヒ其處置ヲ記セ

子痲は恰かも癩痲の如く顔面四肢及び全身の痲痺を發する處

の疾病にして最も屢分娩時に來り次で妊娠中殊に其末期に發し産褥に發するものは最も少し、此の疾病は妊娠中より浮腫あるもの來り初産婦に多く複胎妊娠羊膜水腫等に發し易し本症は卒然發する事あり或は頭痛、眩暈、視力障害、惡心、嘔吐、不安、不眠、等の前徴あるか或は全身の浮腫數日間急速に其度を増す等の前徴ありて發生するものあり而して痲痺は多くは顔面より初まりてまづ眼球は直視し齒を喰ひ縛り産婦は頂部を反張して身體上半部を強く後方に伸展し(之れを角弓反張と云ふ)次で顔面上肢軀幹下肢の間代性の痲痺を起し眼瞼口角は交もく引き釣り上下肢の痲痺も亦た甚だ急劇なり而て此痲痺の際には顔面は藍赤色となり口より泡を出し屢舌を嚙みて血液を混じ意識は全く消失し痲痺甚だしきこ

發作中の事は何事をも知らず

きは一時呼吸を停止するに至る斯して一二分時の後痲痺は緩解し意識は恢復する事あるも痲痺發作中の事は何の知る處もあく或は其儘聲を發して暗眠状態に陥り後ち醒覺するか或は次の痲痺を起すに至る而して發作の回数は甚だ不正にして一晝夜數十回に達する事ありて發作斯く頻々あるときは全く醒覺する事なく發作全く止むも精神朦朧となり昏睡に陥るべし、子痲は病勢の猛烈なる程此の發作の回数多く分娩完結するときは發作は止むも時としては分娩後にも發する事あり此病は甚だ危険なる疾病にして産婦は多くは死亡し殊に初めより脈搏微細頻數あるものは甚だ危険にして死を免がるゝ事少なし若し幸に死を免がるゝも屢々精神異常を發するものとす殊に小兒は殆んど死を免がるゝ能はず

一時も早く胎兒を娩出せしめざれば母體が危ふし

腔洗も發作を引起すの原因となる事あり

處置

全身浮腫を來せる妊婦にして殊に尿量減少せるものは子痲を發するの虞れあるを以て豫かじめ醫師の診療を乞はしめ既に本病を發するときは一時も早く分娩を終らざれば母の危険を救ふ事能はざるが故に直ちに産科醫を迎へ發作中は勿論發作以後も雖も産婦は甚だしく狂ひ動くが故に外傷を來さざる様注意し舌の損傷を防ぐ爲め木片に布片を巻きて齒間に挿入し發作後は頭部に氷嚢を貼じカテーテルを以て排尿せしめ其尿は保存し置きて醫師の検査に供すべし而して凡て臭氣ある物品は室内より遠ざけ室内を清潔にし空氣の流通を能くし高聲の談話日光燈火の直射等痲痺發作を喚び起すものは悉く之れを遠ざくる様注意せざるべからず發作中は問々舌を引き込め窒息する事あるが故に若し發作中聲を發する事あり

昏睡中飲食物を與ふるは危険なり即ち飲食物が氣道に入るの恐れあり

らば手指を兩側の下顎角(下顎の兩側の曲り角)に抵て之れを前方に押し舌を以て喉頭を閉塞せしめざる様注意すべし尙ほ飲食物は凡て牛乳に限るべし
子痢の外妊婦の疾病條下に述べたる諸疾病は屢々分娩時に至る迄持續し甚だしき分娩障害を來すのみならず母兒の危険を伴ふべし殊に心臟病、脚氣、腎臟病、肺病等を患ふる産婦は分娩中突然死亡する事あり或は然らざるも分娩後病勢は益々増悪し終に回復し能はざるに至るべし故に此の如き産婦は必ず産科醫に託するを怠るべからず而して産婦が此の如き疾病に罹りあるときは努責を禁じ身體精神を安靜からしめ殊に脈搏に注意し呼吸困難あらば靜かに身體上半部を高く窓を開きて空氣の流通を良くし陣痛微弱を起し易きが故に大小便

の排泄をよくし其他油斷なく注意せざれば突然大危険に陥る事あるべし

第九十四節 分娩中胎兒の死亡及び死胎兒分娩

分娩中胎兒の死亡するは胎兒血液循環の障害を來したるに來るものにして過劇陣痛、痙攣性陣痛、子宮強直等に於ては子宮筋は著しく收縮するが故に子宮の血管は之れが爲めに壓迫せられ従つて母體より胎盤に流入する血液減少し胎兒の血液は酸素の缺乏を來し終に死に至るものす又た早期の胎盤剝離、臍帶の捻轉、結節、纏絡、脱出、或は前置胎盤に於ける高度の出血等に在りても亦同様の結果を來し又た他の原

- 分娩中胎兒ノ生命ニ危険ヲ來セシ時ノ徴候ヲ記セヨ
- 分娩中胎兒死亡ノ原因ヲ記セヨ
- 分娩中胎兒危險ニ瀕セシ時ノ徴候ヲ記セヨ
- 分娩中胎兒生死ノ鑑別ヲ記セヨ
- 胎兒ノ初メニ於テハ如何ナル恙異アルヤ

分娩中胎兒の死亡及び死胎兒分娩

肛門哆開して括約運動なし

因例之は異常の位置産道の異常等により分娩甚だしく遅延し
兒頭長く骨盤内に嵌入し強き壓迫を蒙るごきも亦た然りごす
又子癩の如き産婦の疾病も早く胎児の死亡を來すべし
以上の如く分娩時に於て胎児が危険に迫れるごきは胎児の心
音は甚だ不正且つ緩徐ごなり一分時間百以内ごなり或は甚だ
微細頻數ごなり一分時間百六十以上ごなるべし而して亡に死
亡せるごきは内診上骨盤端位のものに在ては肛門は哆開し頭
位なるごきは頭部の皮膚は弛緩し縫合頸門は緩く頭骨も緊張
せず胎糞を洩すが故に羊水は暗綠色を帶ぶるに至るべし且つ
破水後あるも産瘤は増大せず若しくは之れを生ずる事なし又
た臍帶脱出あるごき之れを觸るゝに初めは搏動甚だ幽微且つ
不正なれ共胎児已に死亡せば搏動全く止むべし但し骨盤端位

にありては生活せる兒ご雖も腹部壓迫の爲め胎糞を洩すが故
にかゝるごきは心音に注意せざるべからず

分娩中に於て胎児の死亡を來せる時は屢異常の位置を發し分
娩の障害を爲すべし而して死亡せる兒は稀れに卵膜内に於て
腐敗する事あるものにして殊に破水後度々の内診に由りて卵
内空氣の進入あるごきは其内容物は速かに腐敗し産婦は分娩
中に産褥熱を發し子宮は瓦斯の發生により膨張し惡臭を放つ
處の分泌物を漏出し産婦は惡寒戰慄高熱を發し産褥に至るま
で連續し生命を失ふに至る事あり

胎児の將に危険に陥らんとするごきは時を移さず醫師を招き
胎児の生命を救はん事を謀るべし若し骨盤端位にして子宮口
全く開大し醫師の來着なき時は娩出術を行ふべし其他頭位に

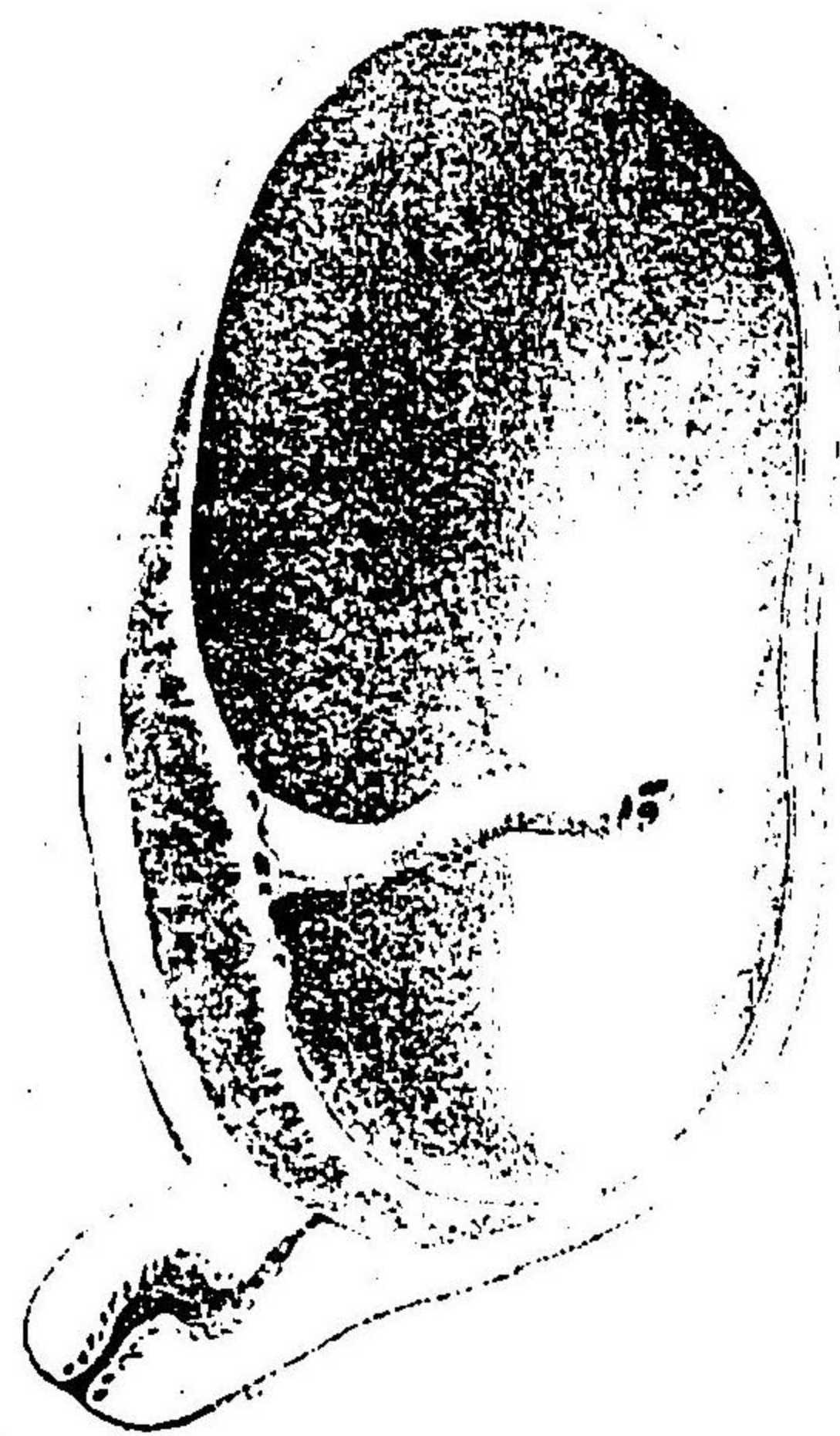
不平の軟かき海綿様物質として觸るゝのみにして卵膜を觸る事あり

(一) 側前置胎盤とは内子宮口の側方に附着し子宮口開大せるとき其一侧に於て

胎盤の大部分を觸知し他側に於て半月狀に卵膜を觸るべし

(二) 邊緣前置胎盤とは内子宮口の一部に胎盤の邊緣挺

圖三十三百二第



出せるものにして子宮口開大の際内診を行ふときは子宮口の

よは妊娠後半期の出血は前置胎盤と考へ

圖四十三百二第



邊緣前置胎盤を示す

の側縁に於て僅かに胎盤の邊緣を觸知し得べし

前置胎盤は主もに經産婦に來り其特有なる徴候は出血にして妊娠の後半

期或は分娩の始めに於て甚だしき出血を來し産婦を危険に陥らしむ即ち妊娠の末期に至るに隨ひ子宮内口部は漸次延長せらるゝも胎盤は之れに伴ふて延長する事能はざるが爲めに胎盤の一部剝離し胎盤附着部の血管破れて出血を來すべし而して中央前置胎盤に在りては危険最も甚だしく妊娠後半期に至

るや早く已に出血を來す事多く爲めに流産早産を來し易く側前置胎盤之際一足を牽出したるもの

胎盤の剝離面は兒の管部壓迫に依り止血す



イ胎盤

ロ胎盤の剝離面

邊緣若しくは側前置胎盤に在りては分娩に際し胎胞破裂後兒

前、置、胎、之、れ、に、次、ぎ
邊、緣、前、置、胎、盤、に、在、り
て、も、出、血、甚、だ、し、而、し
て、出、血、は、陣、痛、發、作、時
に、於、て、甚、だ、し、く、陣、痛
間、歇、す、る、こ、き、は、減、弱
す、加、之、子、宮、口、の、開、大
と、共、に、出、血、の、量、を、増
し、母、體、は、急、性、貧、血、の
爲、め、に、死、に、至、る、べ、し

圖 五 十 三 百 二 第

の先進部の壓迫により出血止む事あるも中央前置胎盤にありては分娩時胎兒に先ちて其一部或は全部子宮内より脱出し分娩を終るまで出血止む事をし此の如き場合に在りては兒の多くは死亡するものなり

妊娠の末期或は分娩時に於て突然出血するときは産婆は先づ前置胎盤に疑を置くべし而して前置胎盤あるときは子宮腔部及び子宮下部は殊に柔軟にして子宮口部に於ては直接胎兒先進部を觸知する事なく反つて海綿様の胎盤組織を觸るべし若し側前置胎盤又は邊緣前置胎盤にして子宮口未だ開かざるときは膈穹窿部より胎兒先進部の子宮壁との間に柔軟なる塊物即ち胎盤の存在するを觸れ得べし但し内診の際注意せざれば子宮口に於ける胎盤の不平面を凝血塊と誤る事ありて内診の

爲めに反つて出血を増す事あり而して前置胎盤殊に邊緣性のもの、卵膜は胎盤に近き部に於て破綻するを以て分娩後に至り後産を見て初めて診断を確かめ得る事あり

處置、出血の爲め産婦胎兒共に大危険に陥るが故に産婆若し本症の疑ひを生ずるときは直ちに産科醫を招き其來着前は産婦を安靜からしめ努責を禁じ出血益々増多するときには氷片を混じたる五十倍石炭酸水又は攝氏五十度位の熱石炭酸水干瓦乃至二千瓦位を腔内に澆注し然る後消毒したる綿花を以て固く腔内を栓塞し丁字帶を施し以て止血を謀るべし而して後屢々壓抵布を検し出血の多少を見母體の脈搏、體溫、胎兒の心音に注意すべし此の如くするも出血なほ止まず陣痛は微弱にして(前置胎盤にありては陣痛微弱を起し易し)内診を行

ふに子宮内口上に卵膜を觸れ其一例に胎盤の邊緣を觸れ醫師未だ來着せず産婦益々危険に陥るときは陣痛發作と共に消毒したる指頭を以て卵膜を破るべし然るときは胎兒の先進部は降つて胎盤の剝離部を壓し直ちに止血すべし

骨盤端位にして子宮口既に開き出血甚だしきとき若し兒の足部に達する事容易あるときは二指を子宮口内に挿入し一足を執りて外陰部に至るまで牽引すべし然るときは兒の臀部は強く胎盤を壓し出血を止むるものす若し出血甚だしく産婦急性貧血に陥るときは赤酒「ホフマン」氏液等の興奮藥を與へ頭部を低くし四肢を摩擦する等急性貧血の條下に述べたる處置を行ふべし後産期に於ては胎盤は其一部已に剝離せるが故に直ちに排出するものなれども胎盤産出後も子宮の收縮不充分

にして甚だしき出血を來す事あるが故に斯かる時は子宮底を摩擦し氷菴法を施こし以て止血を謀るべし

胎盤の早期剝離

通常的位置に附着せる胎盤も稀れに胎兒の未だ産出せざる以前に於て剝離し甚だしき出血を來し母兒共に危害を招く事あり之れを胎盤の早期剝離と云ふ本症は卵膜強靱にして容易に破水せず全卵同時に産出を初むるごき又は臍帶過短にして兒の先進に伴ひ胎盤の牽引せらるゝもの下腹部の打撲、衝突、身體の烈しき動搖、早期の努責、羊水の早期漏出、子宮内膜炎の爲めに胎盤附着の弛きもの、腎臓の疾患あるものに来り其の主なる徴候は出血なり此の出血は初め内出血にして外陰部

○胎盤早期剝離、前置胎盤、臍帶ノ卵膜附着トノ出血ノ鑑別ヲ記セ

外に流出せず子宮壁と剝離せる胎盤及び卵膜の内に滲溜し子宮は爲めに増大し母は急性貧血の症状を呈すべし而して卵膜破れ外方との連絡成るに至りて血液は外陰部に流出し外出血となり陣痛間歇時と雖も出血減弱せずして或は却つて多量となるべし而して子宮口開大するも此に胎盤組織を觸るゝ事なし

處置、出血に對しては前置胎盤に於けるが如き處置を行ひ直ちに産科醫を招かしむべし若し醫師の來着前出血強く産婦は急性貧血の症状を現はし兒頭は已に骨盤内に進入し子宮口殆んど充分開大せるごきは前置胎盤に於けるが如く胎胞を破るべし

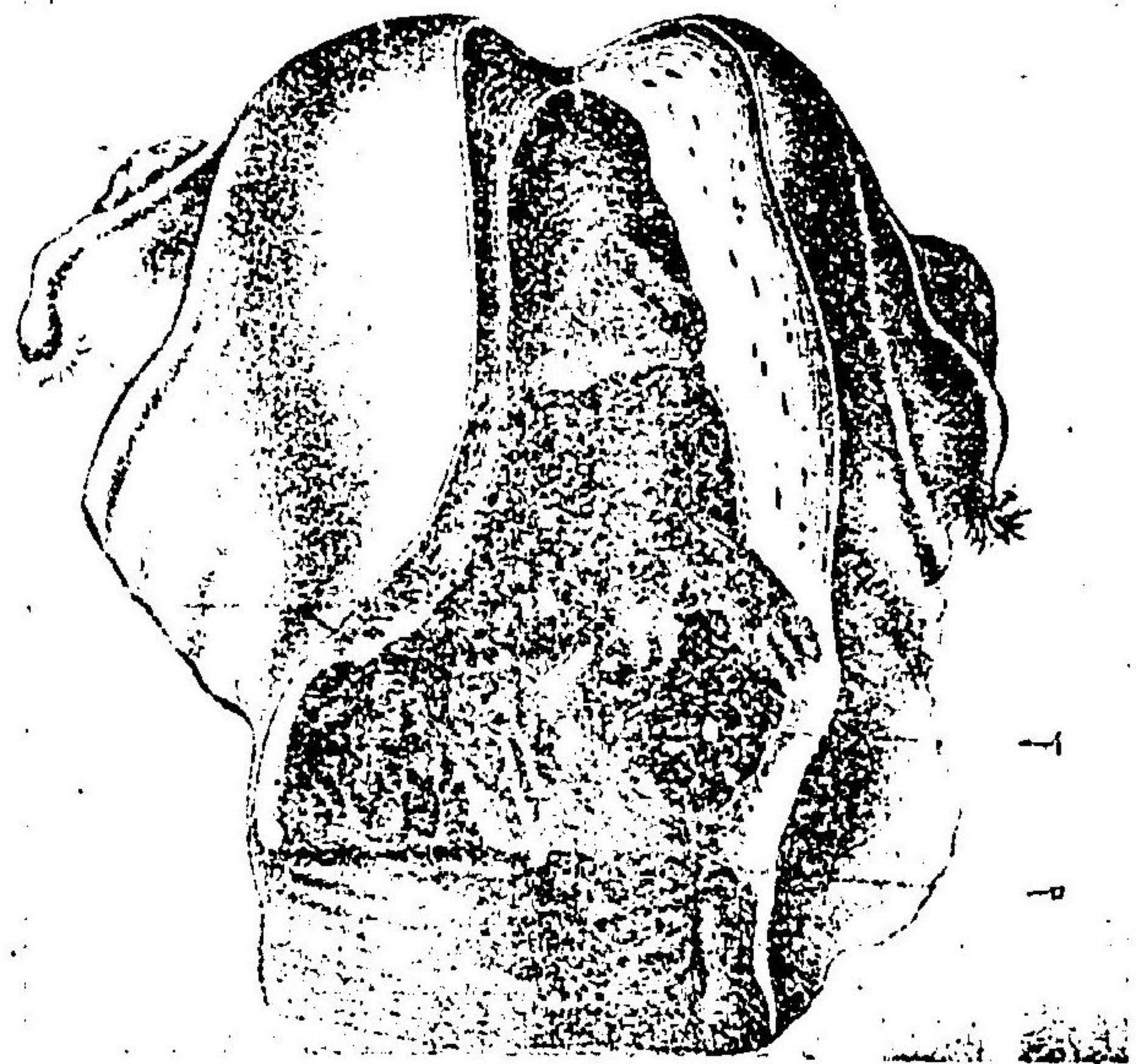
子宮破裂

○子宮ノ將サニ破裂セ
ントスル時ノ微候ハ
如何
○子宮破裂セバ如何ナ
ル變死ヲ來スヤ

不良の胎位、狹窄骨盤、軟部産道の狹窄、過大、或は畸形の胎兒等に於て陣痛強劇なるも産出する事能はざるときは往々子宮破裂を來すべし而して子宮の將に破裂せんとするや陣痛甚だ強劇にして脈膊頻數となり下腹部の疼痛甚だしく子宮體部は漸次退縮して上昇し子宮頸部は延長して著しく菲薄となり、菲薄となれる子宮頸部退縮して厚さを増せる體部との間に收縮輪あるものを生じ腹壁上より觸診するときは横徑の溝を認め得べく其の頸部の延長の度増すに従つて收縮輪は益々上昇し時としては臍部以上に達する事あり此の如くして遂に子宮頸部の破裂を來すに至るべし

子宮の破裂は大概ね頸部に於てし稀れには子宮體部若しくは

第 二 百 三 十 六 圖



子宮頸管の破裂せるものを示す

イ 破裂部

ロ 外子宮

ハ 收縮部

膣穹窿部に達する事あり而して又た全子宮壁盡く破裂する場合、子宮壁の全厚徑の一部のみ破裂する場合あり若し全厚徑全く破裂するときは胎兒は全部若しくは一部腹腔内に脱出し胎盤も時として腹腔内に出づる事あり而して破裂の際産婦

は劇甚の疼痛を覺へ叫聲きうせいを發し多量の内外出血の爲めに急性貧血の症狀を呈し次で人事不省に陥り終に死亡す診察するに破裂後に於ては腹部は其外形を變じ胎兒の各部分は以前より非常に觸れ易くなり精密なる觸診を行ふに胎兒の外に收縮せる硬き球形の子宮を觸知し得べく内診するも以前觸れたる胎兒先進部を觸るゝ能はざるに至るか或は之れを觸知するも容易に移動するを認むべし

處置 已に述べたる如き産道の異常等なき場合と雖も分娩甚だしく長時に亙るときは常に子宮破裂の危険を伴ふが故に成るべく速かに産科醫を招く事を怠るべからず而て産婆は母體の模様殊に出血の多少、脈膊體溫、胎兒心音等に注意し且つ子宮の收縮輪に注意すべし尤も膀胱内に尿の充滿せるとき

産姿の取扱法の精神はこゝなり

は收縮輪と誤まる事あるを以て排尿せしめたる後檢する事必要あり而して又浣腸を行ひ外陰部の消毒をあし努責を禁じ身體を安靜ならしめ以て醫師を待つべし子宮已に破裂せるときに於ては氷囊若しくは砂囊或は兩手を以て下腹部を壓迫し同時に腔内に固く栓塞法を施すべし
凡て産婦が危険に迫れる時は經驗なき産婆は多くは狼狽ろうたいして消毒上の不注意を來し醫治に由りて全く回復し得べきものも之れが爲めに産婦の危険を來す事あるべきが故に出血等に際しては殊に消毒に意を用ゆるを要す

第九十六節 後産期の障害

後産期の出血

後産期の出血

○分娩第三期ノ障害
後産期ニ於ケル異常
出血ノ原因及ビ其處
置
○後産期ニ於テ出血チ
來セシトキノ處置ハ
如何

後産期出血は極めて危険にして屢々産婦を死に至らしむ之れ
に二種あり(一)創傷によるもの(二)子宮収縮不全(陣痛微弱)

子宮腔部の破裂せるものを示す

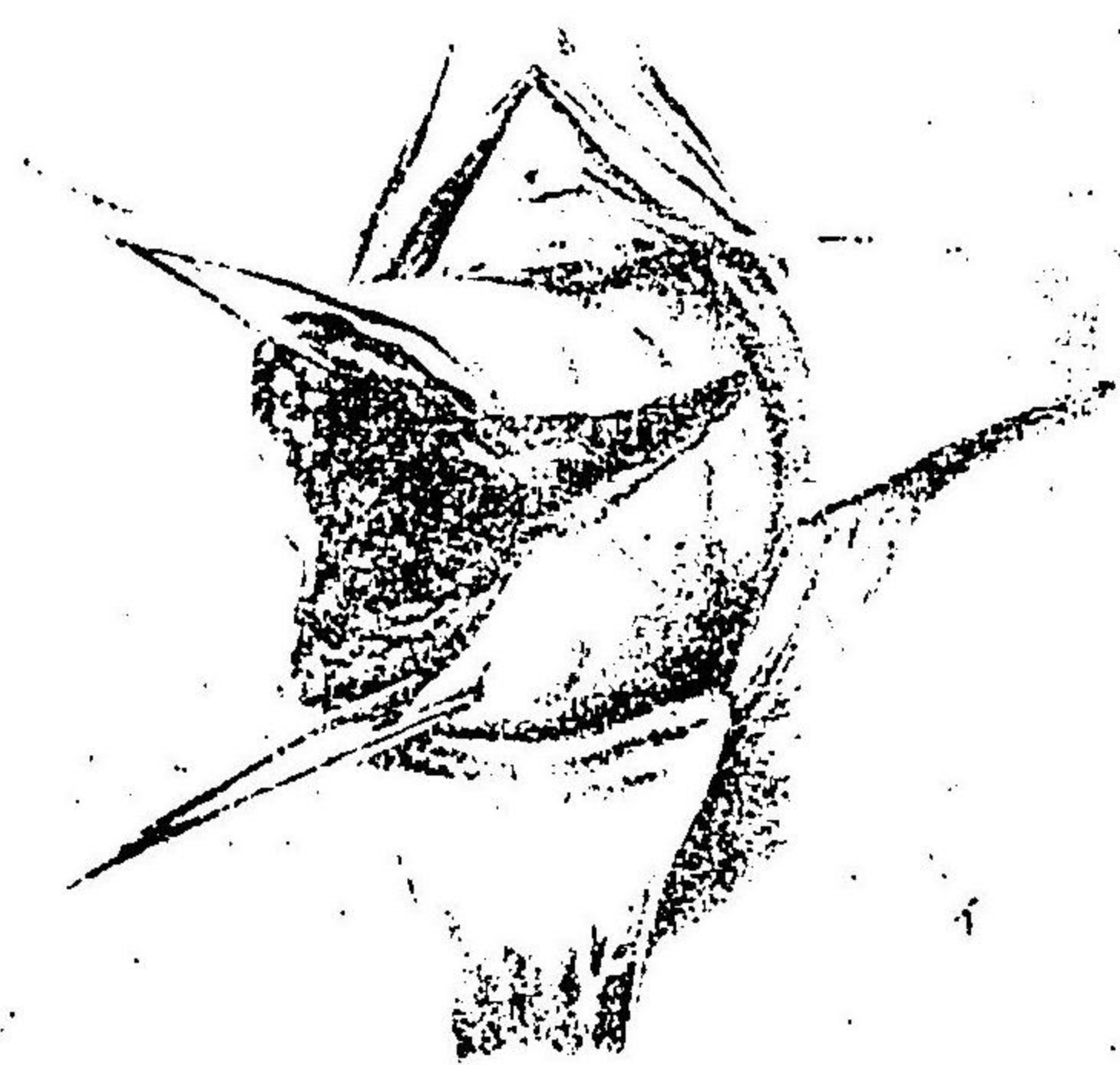
によるもの之れあり

甲 創傷よりす

る後産期出血

子宮腔部の破裂 正規
分娩にありても子宮腔部
は多少の裂傷を生じ爲め
に子宮口縁は永久不正の
形状を呈するに至る然れ
共時こしては子宮頸部の

第 二 百 三 十 七 圖



子宮腔部破裂

○分娩第三期ニ於ケル
出血ノ原因及ビ其處
置
○分娩時外陰部創傷ノ
處置

硬固なる爲め或は子宮口の開大不充充分なる爲め或は器械を挿
入する等に由りて甚だしき破裂を來す事あり

臍破裂 初産婦殊に高年の初産婦にして臍壁の弾力少なき

ものに来る事多く又た産科的手術に依つて來る

前庭部の破裂 正規分娩にありても前庭部は多少挫傷を蒙

る事あり然れ共多くは産婆が會陰保護を行ふに際して先進部

を餘り強く耻骨縫際に向つて壓するに依りて起る而して此の

部は血管に富むが故に出血は可あり著しきものあり

會陰破裂 極めて軽度の會陰破裂は初産婦に在りては殆ん

ど毎常見る處なり然れ共其高度なるものは顔面位、額位、前

頭位の如く胎兒が異常胎勢をこれるもの高年の初産婦にして

會陰の弾力に乏しきもの其他産科手術殊に鉗子手術等に於て

圖八十三百二第
す示を裂破陰會の度一第



イニ後陰唇繫帯
ロ前脛柱
ハ後脛柱
ホへ會陰の皮膚

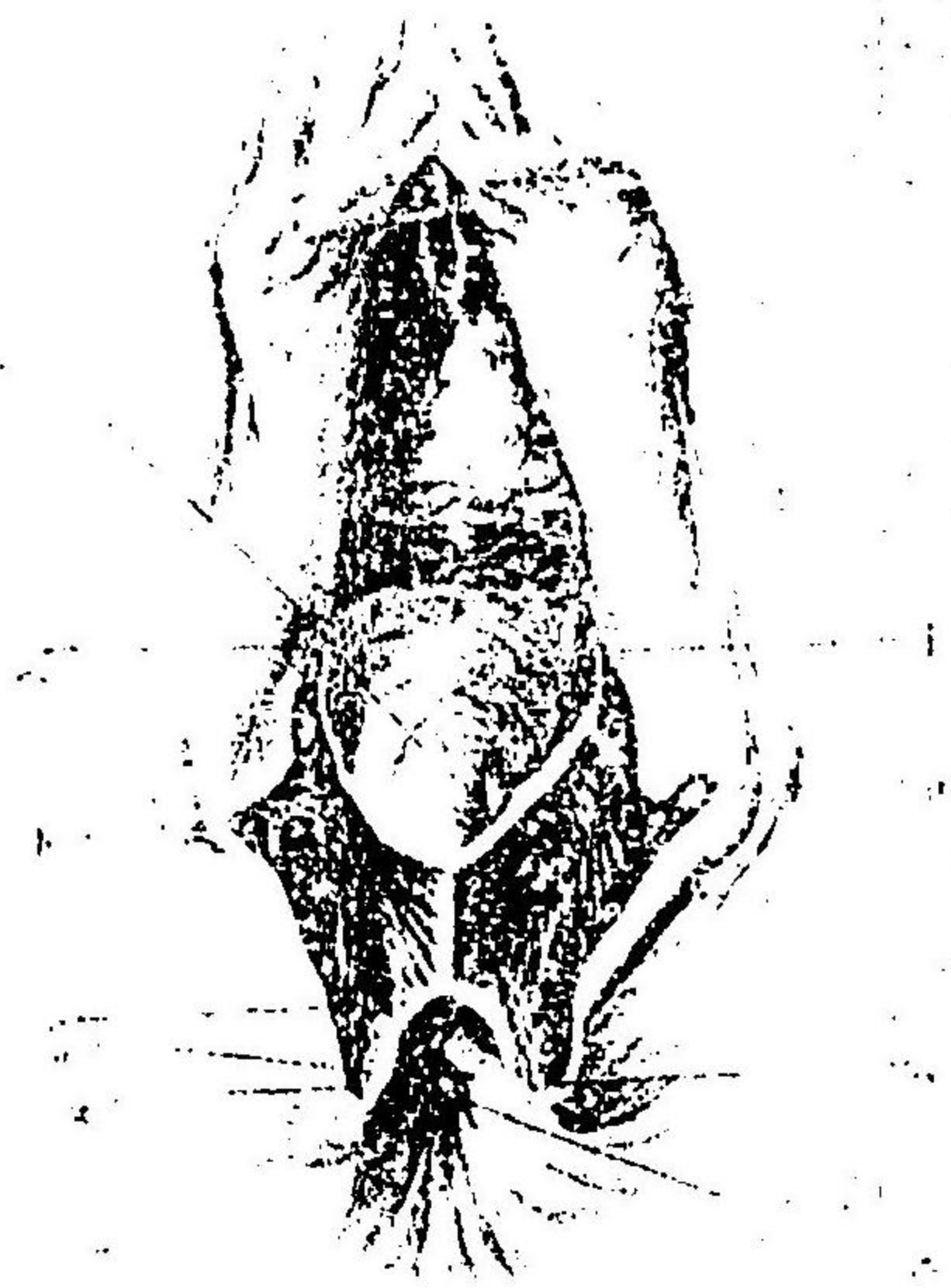
圖九十三百二第
す示を裂破陰會の度二第



イニ創面上端
ロへ後陰唇繫帯
ハホ前後脛柱
トチ破裂せる會陰の皮膚

第三度の會陰破裂を示す

圖十四百二第



イへ創面上端
ロト後陰唇繫帯
ハチリメ肛門括約筋の断裂せるもの
ニ肛門
ホ後脛柱

來る而して會陰破裂を三度に區別す第一度は肛門に向ひて一仙迷乃至二仙迷破裂せるもの

○會陰破裂ノ處置如何

括約筋とは「ク、リ」をなすところの筋肉なり

第二度は殆んど肛門に達し括約筋を残すもの第三度は肛門括約筋も共に破裂するものを云ふ
會陰破裂するときは産婦は陰部に疼痛性灼熱を感じ出血は比較的少なく之れを自然に放置するときは陰門哆開し墜脱墜加

答、兒等を起こし第三度の會陰破裂に在りては、オナラ放屁便意を止むる能はず、其他屢々産褥熱を發し、或は損傷部の化膿を來し、大なる組織缺損を生じ、又た時々大なる癍痕を形成して、膾外陰部の狹窄を起す事あり

乙 子宮の收縮不全に因する

後産期出血

産出期に於て、陣痛微弱の原因とあるものは、凡て本症の原因をかすべく、其他分娩困難にして、遂に子宮筋の疲勞せるもの若しくは墜落産の如く急速に胎兒の娩出せるもの、複胎、羊膜水腫、の如き子宮の過度に擴張せられたるもの、胎盤の剝離し難きもの、胎盤卵膜の一部残留せるもの等より來る而して、後産期に於

○子宮ノ無力性出血ト
ハ如何
○弛緩性出血ノ原因及
ビ處置ヲ記セ

此の如く血液子宮内に
滯溜し子宮の膨大を來たすを子宮血腫と云ふ

て子宮の收縮不全あるときは胎盤の剝離面の血管閉塞せずして著しく出血し、子宮は柔軟にして弛緩し、子宮底は臍窩の上方に位し、時としては殆んど子宮壁を觸知し難き位に柔軟なる事あり、其出血の模様は一種特別にして、血液は陣痛間歇時に子宮内に滯溜し、陣痛發作するか又は壓迫を加ふるときは外陰部外に流出す、此際若し胎盤卵膜等に由りて子宮口の閉塞せらるゝときは血液は外陰部に流出し、能はずして子宮内に滯溜し、即ち内出血とあり、子宮は爲めに急速に膨大し、時としては心窩に達する事あり、然るときは母體は顔面蒼白、脈膊微細、頻數四肢厥冷等の急性貧血の症状を呈して死に至るものごとす

處置 觸診上、子宮硬固にして能く收縮せるに拘らず、出血すものは軟部分の創傷によるものにして、其中會陰破裂は出

血常に著しからざるが故に先づ尿道口の周圍、膈壁、子宮、膈部等
 を、檢して出血部位を定め、尿道口の周圍部なるときは消毒せる
 綿花綿紗類を以て強く壓抵し、膈壁、子宮、膈部あるときは先づ寒
 冷若しくは熱き消毒液を以て膈内を洗滌し、凝血等あらば之れ
 を去り然る後消毒せる綿花を以て固く膈内を栓塞し止血後こ
 雖も時々腹壁上より子宮の收縮状態を檢し以て醫師の來着を
 待つべし、産道に創面を認めず、觸診上子宮弛緩せるものは子宮
 の收縮不全なるが爲めに起れる出血あるが故に、子宮底を強く
 摩擦し子宮の收縮を促し其收縮に乗じてクレーデ氏の胎盤壓
 出法を反覆して其産出を謀るべし然れ共出血尙ほ止まず胎盤
 産出せざるときは片時も手を弛むる事なく強く子宮底を摩擦
 し且つ下腹に氷嚢を貼じ膈内に攝氏五十度位の熱き五十倍石

腔内洗注法

炭酸水を千瓦乃至二千瓦洗注すべし或は又た石炭酸水に氷片
 或は雪を混じ寒冷とされるものを洗注するも可なり
 腔内洗注を行ふには嚴重なる手指の消毒を行ひ次で石炭酸
 水又たはリゾール水千乃至二千瓦を洗水器に投じ凡そ三尺
 位の高さに掛け然る後消毒したる一手の示中二指を子宮頸
 部に送り之れに沿ふて洗水器の嘴管より藥液を噴出せしめ
 つ、腔内に挿入し洗注するを法とす此際嘴管又は護膜管内
 に空氣を含むときは子宮血管内に空氣を進入せしめ母體の
 死亡を招く恐れあるが故に注意を要す而して洗注の間は常
 に腹壁上より子宮底を摩擦し傍ら患者の呼吸及び顔貌に注
 意し若し脈膊呼吸に異常あり顔面蒼白色を呈する事あらば
 直ちに其洗注を止めざるべからず若し又た子宮口に卵膜血

塊等栓塞し爲に血液が子宮内に滯溜し所謂内出血をおこせるときは直ちに消毒したる手指を子宮頸管内に挿入し以て其栓塞物を去り子宮底を強く摩擦し前記の法に従ひ止血を謀るべし

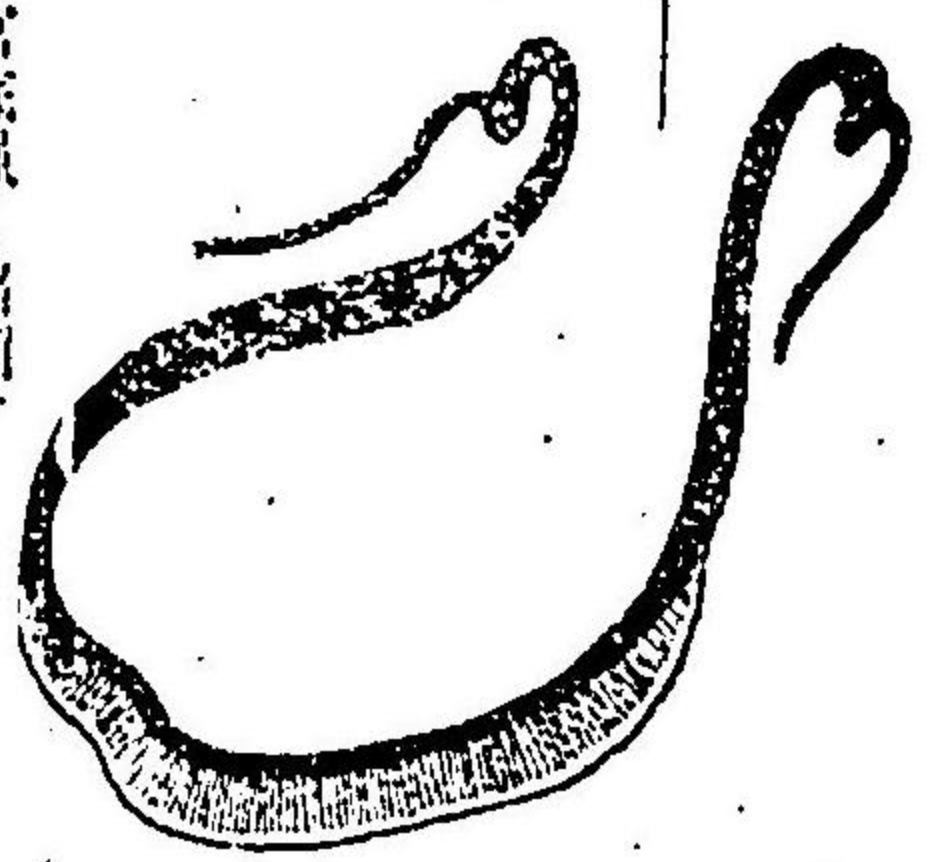
浣注後尙ほ止血せざるときは消毒したる綿花又は綿紗を以て硬く腔内を栓塞し丁字帯を以て固定し兩脚を閉合し尙ほ引續き子宮底を摩擦し出血多量にして急性貧血の症状を發するときはホフマン氏液赤酒ブランデー等の興奮薬を多量に與へ頭部を低くし心臓部に氷嚢を貼じ或は芥子泥を貼布すべし
後産期出血に在りては時として腔内の栓塞に由りて血液は外陰部外に流出する事能はず反つて子宮内に滯溜し内出血を發する事あるが故に常に子宮底に手を壓抵しつゝ其收縮を謀ら

ざるべからず

子宮翻轉

子宮翻轉は子宮の收縮時外に於て臍帶の牽引或は粗暴ある胎盤壓出法を行ふか或は墜落産の時臍帶の過短なること等にも來る之れを區別して二種とす即ち(一)全子宮翻轉とは子宮全體の翻轉するものを云ひ甚だしき時は陰門外に脱出する事あり(二)不全子宮翻轉とは子宮底の陷凹を呈するもの

不全子宮翻轉を示す



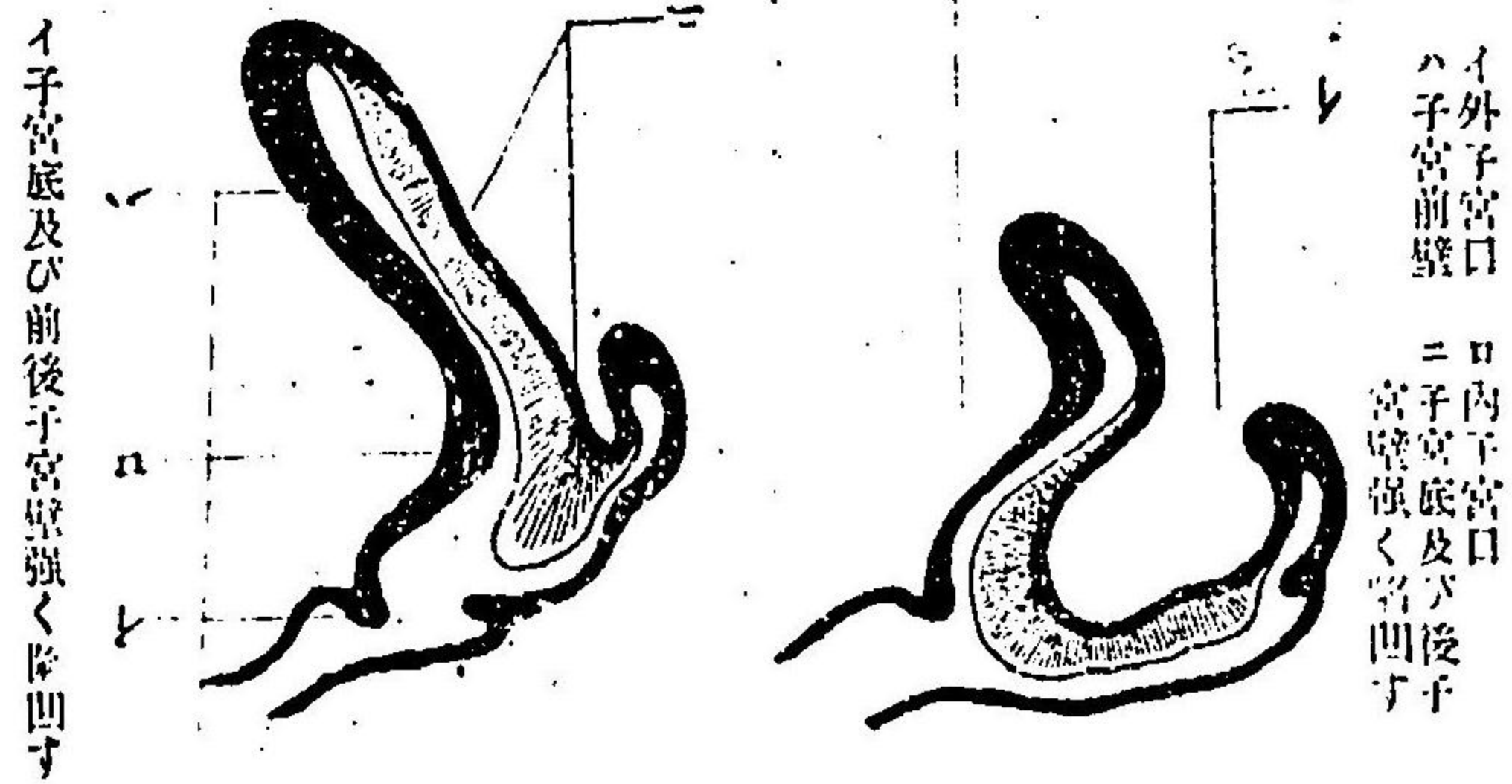
子宮底強く陷凹す

第百四十一圖(甲)

○子宮翻轉症ノ原因徴候及ビ處置

子宮翻轉

第 二 百 四 十 一 圖 (乙)



イ子宮前壁及び前後子宮壁強く陥凹す

を云ふ而して全翻轉に在りては耻骨縫際上より子宮底を觸知する事能はず子宮内面は暗紅色の腫瘍状をなして陰唇間に挺出し之れを觸るゝに知覺甚だ過敏なり不全翻轉にありては腹壁上より子宮底の漏斗状に陥凹せるを觸知し得子宮の内面外陰部に現るゝ事あり、何れも血管の斷口閉鎖せざるを以て著しき子宮出血を現はし母體は劇甚の疼痛を感じ人事不省に陥るか若しくは急性貧血の症状を呈すべし而して此際翻轉せる子宮の内部には胎盤卵膜の一部

欠

MISSING

の癒着によるものと見做して可なり然れ共尙ほ外陰部の浮腫甚だしき時又はは損傷の爲めに外陰部腔の過敏とされるが爲めに異常の腔收縮を起すときは已に剝離して子宮口外に出でたる胎盤の産出をも妨ぐる事あり

處置、何れの原因にせよ産出遅延せば正規分娩後産々出の條下に述べたるが如く常に胎盤の剝離に注意し出血をき限りは二時間を待ち尙ほ産出せざれば嚴重の消毒を施し後ち内診し此際胎盤の大部分已に子宮口外にあらば子宮底を摩擦し其收縮と共に産婦に努責を命じ或はクレデー氏の壓出法を試み尙ほ娩出せざれば壓出と同時に臍帶を少しく力を加へて牽引すべし之れに反して此内診の際胎盤の一部分も腔内にあらざる時は直ちに産科醫を招くべし殊に出血多量なる場合は時

人工胎盤剝離法は一手を以て子宮底を下方に押し消毒せしめ、もう一手を子宮内に挿入し、手の小指の指を刺す。胎盤を剝離するに、胎盤を刺す危険の手術なれば、決して産婆の行ふ可きものに非らず。他の方法として、子宮の収縮を以て止血を謀り、醫師の來着を待つ可し。

を撰ばず醫師を招き醫師の到着前は子宮底を摩擦し或は熱き消毒液を腔内に浣注し尙ほ止血せざれば子宮の収縮に乗じてクレーデー氏胎盤壓出法を反覆すべし然し乍ら此の場合に粗暴の壓出法を行ひ若しくは臍帶を牽引するか或は度々内診して子宮口部を刺戟するときは出血は益々多量となり時として子宮の収縮は痙攣性を呈するに至り反つて有害なる事あり以上の如くして出血止まず危険なるときは消毒せる綿花を以て固く腔内の栓塞を施し下腹に氷嚢を貼じ或は子宮底を持續性に按摩して醫師の來着を待つべし而して最後の手段として人工胎盤剝離法なるものあり。雖もこは醫師の爲すべき事にして産婆の學識を以て行ふは反つて危険あり子宮収縮痙攣性なるときは下腹に濕布罨法を施すべし。

産婦の死亡

○産婦突然死亡シタル時ノ産婆ノ處置ヲ記セ

産婦死亡するも其の死亡が突然あるときは胎兒は母体内に於て暫時間生活し得べし故に分娩時産婦が出血其の他の原因により既に危険に陥るときは猶豫なく産科醫の來診を乞ふは勿論若し産婦が突然死亡し子宮口充分開大せるときは産婆は回轉術の條下に述べたるが如く内回轉術を行ひ續いて骨盤端位挽出術を行ふ可し然るときは生活兒を得るものこそ此の際胎兒假死せるときは人工呼吸法を行ひ蘇生せしめざるべからず

第九十七節 分娩直後に於ける出血

此の出血の原因も後産期出血に於けると同様創傷よりするもの、子宮収縮不全によるもの、さあり療法等も全く産後期出血

○後出血ノ應急處置
○産婦中ノ子宮出血ノ原因候
○下に述ぶる外産婦中出血するものは子宮の回復不全、子宮の變位、胎盤膜片の遺殘等なり

産婦の死亡

分娩直後に於ける出血

に於けること同じ只だ胎盤の排出後と云ふ差あるのみなり

第十一章 異常産褥及び其取扱法

第九十八節 分娩に因て來れる生殖器

及び骨盤の異常

外陰部及び會陰の腫脹

○産婦ノ疾病及ビ處置ノ大要ヲ記セ
陰部會陰腫脹の外
其に稀れに産褥の
初期に於て突然下
肢の浮腫疼痛麻痺
を來す事あり是れ
骨盤内或は下肢靜

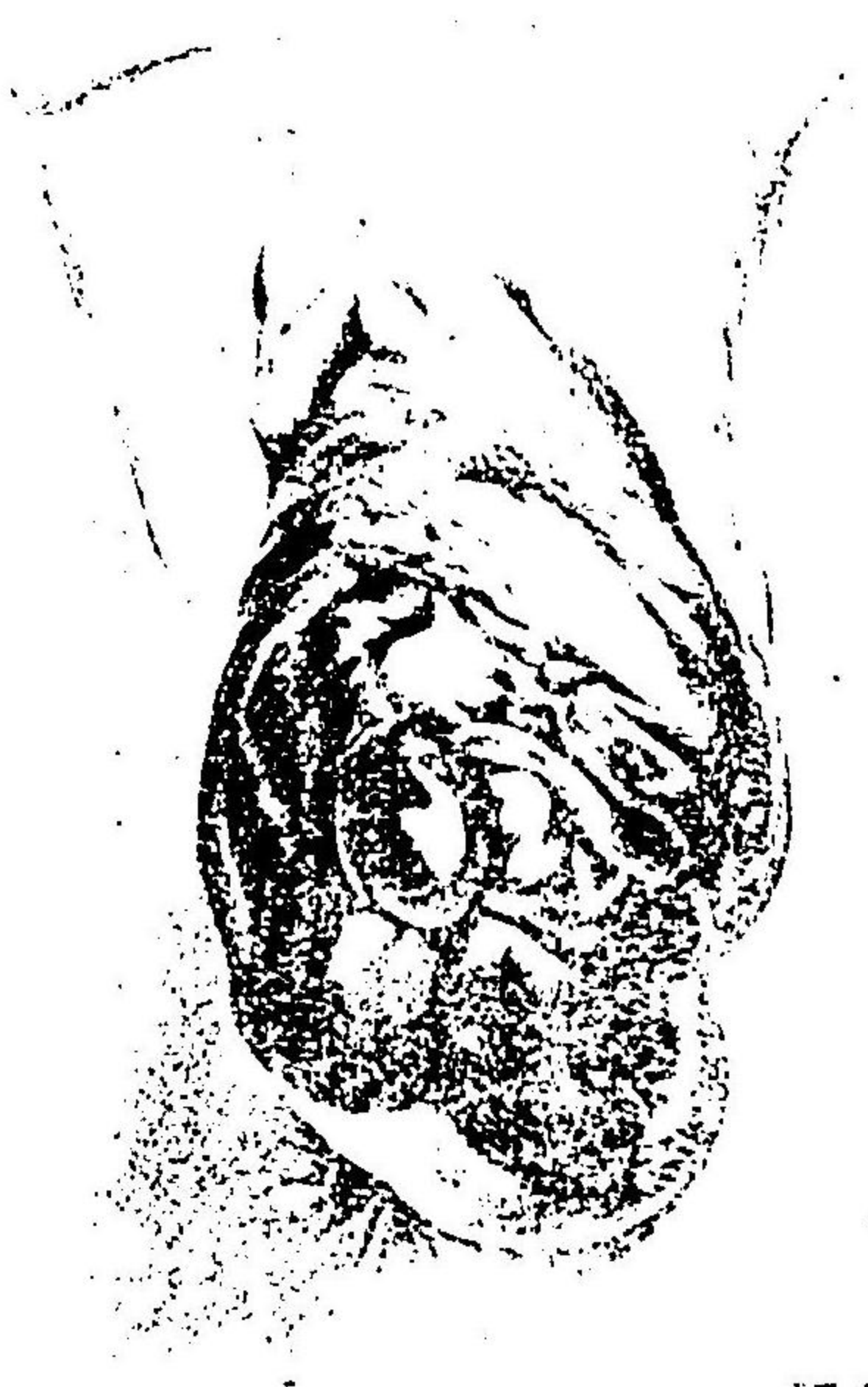
分娩時先進部排臨の時間長き時は往々外陰部及び會陰の腫脹を來し甚だ過敏にして疼痛を訴ふる事あり此症狀は二三日にして自然に消退すべしと雖も若し消退し難きときは百倍石炭酸水又は硼酸水に浸せる綿紗を以て濕布菴法を行ふ可し

脈管血塞の爲め血
行障害を發したる
によるものにして
前記の症狀を發せ
ば速かに醫治を乞
ふ可し然らざれば
血塞の一片破潰し
て血液中に混じ大
靜脈心臓を經て肺
毛細管に至り血栓
を生じ危險に陥ら
しむる事あり

第 二 百 四 十 三 圖

陰部血腫

陰唇等の血管皮下に於て破るゝ時は暗紫色の腫物即ち血腫
陰部の血腫を示す
あるものを
生じ若し破
裂するときは
は非常なる
出血を來し
又た時とし
て化膿する
事あり故に
分娩後に於



て之れを發見するときは消毒薬にて濕せる綿花或は綿紗を以

て被ひ安んぜしめ速かに醫治を乞はしむべし

腔 脫

分娩後腔壁、翻轉し時として子宮も共に青赤色を呈する腫瘍状をあして陰唇間に挺出する事あり其輕度のものは甚だしき害なしと雖も高度なるときは速かに醫治を乞はしめ褥婦をして常に側臥位をこらしむべし

骨盤關節の損傷

兒頭大あるか骨盤小なるごきに於て陣痛強劇なるか又たは骨盤端位挽出術等に於て大ある兒頭を無理に牽出するごきは時として耻骨縫際、薦腸關節等の損傷を來す事あり然るごきは患

婦は疼痛の爲めに下肢を運動する事能はず損傷部を壓すれば劇痛を發すべし是れ素より直ちに醫師に托すべきものにして醫師の來着前此の如き褥婦は安んぜを守らしむる事甚だ必要なり

子宮の變位

分娩後安んぜを守らずして早くより運動をあすごきは多くは子宮の變位殊に後屈、或は子宮下垂、或は脱出等を發するものにして後屈症に在りては下腹の牽引性疼痛、便秘、尿利困難、尿意頻數、等の症狀を發し子宮の下垂、又は脱出に在りては子宮腔部の糜爛、下腹牽引痛、等を發し内診上子宮腔部は深く腔内に下垂し時としては陰唇外に突出し來る事あり何れの場合

に於ても子宮變位あるときは産褥に於て多く出血を來すものなり其他妊娠前已に後屈子宮脱等を患ひ居たるものは分娩後三四週に至り多くは再發するものとす

處置、上述の如き症状を發するときは身體を安靜ならしむると共に醫師の診療を乞はしめ殊に子宮の脱出せるものによりては嚴重の消毒法を行ひ不潔物の附着を防ぎ甚だしく脱出せるものによりては之れを整復せざるべからず

激痛を伴へる後陣痛

分娩後多くは少かに疼痛を伴へる子宮收縮を營む之れを後陣痛と稱す其の甚だしきものは十分時乃至三十分時を隔て、腹部より陰部大腿に波久する疼痛を發し時としては爲めに睡眠

し得ざる事あり此の如き後陣痛は通常二三日にして止むも雖も時として五六日後に至るまで持續する事あり而して一般初産婦は後陣痛を感ずる事稀れにして此の如き激痛を伴へる後陣痛は殊に經産婦にして分娩經過短かく子宮内腔の過早に空虚となりしもの又は卵膜胎盤の一片凝血等の子宮内に遺残するもの等に發し易し

處置、小兒に哺乳せしむるときは通常疼痛を増加すべしと雖も全く授乳を廢すべからず而して疼痛甚だしきものには下腹に濕布奄法を施こし大小便の通利に注意し疼痛甚だしくして睡眠を妨ぐるか或は發熱等を來すものに在りては直ちに醫師の診療を乞はしむべし

子宮の回復不全

○子宮ノ回復不全トハ如何
 ○産褥中子宮回復不全ノ
 徵候原因及其處理
 ナ記セ

經産婦に起り易く羊膜水腫復胎等にして子宮壁の過度に擴張せられたるもの又は弛緩せるもの竝に産褥に於て必要の安静を守らずして早期に起床し或は運動を營むもの或は便秘結する者胎盤卵膜片の残留せるもの小兒に授乳せざる婦人等に於て發す此の症を發するときは子宮は柔軟にして弛緩し子宮底は通常のものに比して甚だ高く惡露の排泄多量にして久しく血液を混じり時としては出血多量なる事あり、産褥熱に罹り易し

處置、安静を守らしめ大小便の通利を規則正しく爲し腹帯を施こし下腹に氷嚢を貼じ置き醫治を乞はしむべし

胎盤卵膜片の遺殘

○胎盤卵膜片ノ遺殘ハ如何ナル障礙ヲ發スルヤ

胎盤卵膜の一片子宮内に殘留するときは子宮の收縮(恢復)を妨げ著しき出血を來し且つ屢々子宮腔内に於て腐敗し産褥熱を惹起する者多し故に産婆は正規分娩の章に於て論述したる如く後産の産出を終らば能く之れを檢め缺損せる部分なきや否やを確かめ若し一部分缺損して子宮内に殘留せるの疑ひあらば速かに醫治を乞はしめざるべからず

惡露の異常

産褥中惡露に多量の血液を混じり又は少量の出血も久しく持續して止まず或は惡露過早に閉止し又た時としては惡露に惡臭を發し惡露の濕潤しじみに由りて外陰部或は大腿内面の糜爛を來す

○惡露ニ異常ト呈スル場合ヲ記セ
 ○子宮ノ回復不全早期の難床運動は惡露中多量の血液を混じり産褥熱の初期に惡露の過早閉止を現はし惡露の腐敗分解は惡臭を放つべし

胎盤卵膜片の遺殘 惡露の異常

○不良悪露ニ就テ記セ

事あり

處置、産褥の初め二三日の間に悪露中多量の血液を混ざるこ
 きは下腹に氷嚢を置き若し血液の混ざる事久しく止まざるこ
 きは醫師の治療を乞はしむべし悪露過早に閉止して下腹の疼
 痛發熱等を來す事あらば産褥熱の初期の疑ひあるを以て直ち
 に醫師の診察を受けしむべし悪露甚だしく多量にして腔内に
 滞溜し發熱あきも悪臭を帶ぶるときは嚴重なる消毒のみに
 一日一二回づゝ五十倍石炭酸水又はリゾール水にて腔洗滌を
 施さば甚だしき危険を豫防し得べし之れに反して若し悪露に
 悪臭を放ち且つ體溫攝氏三十八度以上に昇るときは産褥熱の
 疑ひあるを以て必らず産科醫を招きて診療を乞はしむべし而
 して此の際腔の洗滌に用ひたる器械竝に手指は嚴重なる消毒

恐るべき産褥熱

○産褥熱ヲ豫防スルハ
 産後ノ要務タリ故ニ
 之ヲ實施スルニハ如
 何ナル方法ヲ要スベ
 キヤ
 ○産褥ノ病類及ビ處置
 ナ記セヨ
 ○産褥熱ノ徵候ハ如何
 ナルヲ原由及ビ徵候
 ○正規及ビ異常ノ産褥
 ニ於ケル母體ノ處置
 ○産褥熱ノ原因及ビ豫
 防法

を行はざれば其病毒を他に傳染せしむるの危険あり
 外陰部大腿等の糜爛に對しては五十倍石炭酸水又は硼酸水を
 以て洗滌或は清拭し次で等分の亞鉛華澱粉硼酸末等を撒布す
 べし

第九十九節 産褥中の疾病

産褥熱

産褥熱とは分娩時若しくは産褥の始めに於て病原菌が生殖器
 内に侵入するに由りて起る處の甚だ恐るべき疾病にして其主
 なる徵候は發熱あり醫學上之れを數種に區別すこ雖も茲には
 單に輕重の二種に區別して論述せんこす
 分娩時に於ては其分娩が正規にして些さかの障害あき場合こ

○産褥熱ノ原因及び該疾患ノ治療法

腫起は骨盤内結締
織より漸次大腿に
波及し冷感も如き
の浮腫せる事あり
然る時は之れを白
肢腫と稱す

雖も常に巨多の新創面を生じ殊に胎盤の剝離せる部分は毎常大なる創面を呈するものあり然るに病原菌は通常健康なる皮膚粘膜炎より進入する事能はざれ共此の如き創面よりは好んで侵入すべく且つ分娩産褥に於ける生殖器は極めて血液淋巴液に富み其組織柔軟にして微菌の蕃殖傳播に最も適當なるを以て一旦進入せる病原菌は忽ち蕃殖して初めは創傷の局所に止まるも更らに深部に達し子宮内膜、實質、外膜等の腫起化膿を誘ひ周圍組織、殊に扁韌帶、骨盤内結締織、腹膜等或は血管の媒介に由りて遠隔の臟器例せば心臟肺臟等に傳播し或は自ら毒素を發生し其毒素は血液に吸収せられ全身の症状を發するに至る即ち斯くの如くして産褥熱を發するものあるが故に分娩産褥中外陰部の消毒不完全なるか敷布被服類の不潔

輕症のものには腔外
陰部等の創面より
分泌物の腐敗分解
産物を血中に吸収
して發するものな
るが故に吸収熱又
は創傷熱とも稱す

あるか産婆の手指或は器械類の消毒不完全なるか分娩持續長時間に亙る時等病原菌の生殖器に觸る、機會多き程産褥熱を起し易く其他子宮内に殘存せる胎盤卵膜片等は殊に病原菌の附着蕃殖に適當なるを以て容易に腐敗し産褥熱を發起すべし而して侵入せる病原菌は假之一個にても直ちに蕃殖して數百萬に達すべきものあれば只だ一回の内診に雖も忽にすべからず
徴候、分娩後第一日に於て既に發熱する事あれども多くは二三日後に於て發生す輕症のものに在りては初め輕き惡寒あり次で發熱し、全身倦怠を覺へ口渴頭痛を訴へ熱は時として三十九度以上に昇る事あれども多くは三十九度以下にして脈膊稍々頻數となるも一分時百以上に至る事稀れなり惡露は多く

臭氣を帯び外陰部及び膣内を検するに損傷面は屢々帯黄白色の膿様分泌物を以て被はれ食慾は通例あるか若しくは僅かに減退し腹部は柔軟にして子宮及び其近部の疼痛を發する事なく醫治を加ふれば多くは數日にして治すべし而して極めて輕症のものは昔は乳熱と稱し乳汁分泌盛んならんとするに生理的に發する熱なりとせしも現今の研究によれば乳熱あるものは全く誤りにして生殖器に障害なくしては發熱するものに非らざる事明らかとなりしを以て決して等閑に附すべきにあらず

重症のものは子宮内膜、實質、外膜、扁韌帶、腹膜等に腫起、化膿蔓延し、多量の毒素を血液中に吸收せる産褥中の最も危険なる疾病にして褥婦の死亡を來す事最も多く突然惡寒戰慄を

重症のものは子宮内膜、實質、外膜、扁韌帶、腹膜等に腫起、化膿蔓延し、多量の毒素を血液中に吸收せる産褥中の最も危険なる疾病にして褥婦の死亡を來す事最も多く突然惡寒戰慄を

症及び産褥性敗血症と稱し最も危険にして生命を全ふるに獨乙國等に在るは政府より産褥熱豫防規則なるものさへ發布せられたるに對する産褥熱の注意すべき事項を訓示せられたり

以て始まり次で發熱四十度以上に達し顔面潮紅心神不安、かゝり不眠、頭痛、口禰、食慾不振を呈し脈膊頻數、微細となり下腹部膨滿し按壓すれば著しき疼痛を訴へ子宮は柔軟にして疼痛を發し惡露は膿様汚穢色にして厭ふべき惡臭を放ち外陰部及び膣内の創傷面は黄色膿様の分泌物を以て被はる而して患婦は時々嘔吐を發し乳汁の分泌は減少し惡寒戰慄は屢反覆し熱も亦た之れに伴ふて昇騰し脈膊愈々頻數となり往々精神の異常を來し一週日の終りより二週日の始めに至りて斃るべし殊に始めより體溫高からざるも脈膊微細頻數なるものは最も危険ありとす

處置、豫防法としては妊婦の取扱ひ分娩の介助及び褥婦の處置等に於て嚴重なる消毒法を行ひ微菌の侵入蕃殖を防がざる

へからず然れ共此所に最も注意すべきは現今産婆の弊として消毒ある事は腔洗滌を施せば其れにて目的を達せりと思ひ違へ居る事なり即ち一にも洗滌二にも洗滌を可として腔洗滌をさへ行へば産褥熱の豫防を爲し得るものなほ甚だしきは洗滌の際自己の手指の消毒さへ忽かせにするものありこは甚だしき誤解にして手指、器械類、繙帶材料、被服及び外陰部の嚴重ある消毒は毎回最も必要ありと雖も腔洗滌は醫師の指圖あるこきのみ施すべきものにて前述へしが如く不注意の腔洗滌は反つて微菌進入の媒介をなす事あるのみならず産褥の初めに日々腔洗滌を施すが如きは反つて有害なるものあり故に産婆は産褥熱豫防の方針として左の事項を記憶せん事を要す

一、妊産婦の生殖器に觸るべきものは手指、器械、被服等其

何たるを問はず嚴重に消毒すべき事

一、妊娠中必要な限りは内診を禁ず、妊婦の腔内栓塞を禁ずる事、妊娠末期に於て妊婦をして日々入浴せしめ殊に外陰部を清潔ならしむべし

一、分娩中必要な限りは内診せざる事、分娩の初め外陰部の洗滌をなす事、若し他の産婆が不充充分なる消毒の下に内診を施せしか或は産婆自ら必要上度々内診せしこきは一回限り充分に腔洗滌を施すべき事

一、産褥中外陰部の消毒法を厳にし、悪露多量にして悪臭ある時の外腔洗滌を施すべからず

以上の如き豫防法を講じつゝ、已に産褥に至らば左の事項を注意して早く産褥熱の初期を發見すべし

- 一、體温三十八度以上及び發熱に伴ふ一般症狀即ち脈膊頻數、皮膚の熱感、惡寒、戰慄、食慾不振、口渴、頭痛、眩暈、惡心、嘔吐、全身倦怠、等の有無
- 一、惡露の性質、惡臭ありや否や且つ分量の多少
- 一、子宮の性質、觸診して過敏なるや否や收縮の良不良
- 一、腹壁の模様、觸診上過敏なるや膨滿せるや否や
- 一、外陰部腫に於ける創傷の模様、腫脹せるや又た創傷面は不潔なるや否や

以上に由りて産褥熱なる事を認めれば必らず速かに醫師を招き治療を請ふべし若し時機を誤るときは容體益々不良に陥り爲めに醫治も亦た其效なきに至るべし已に醫師の診斷に由りて産褥熱ある事確定せば褥婦を靜臥せしめ其處置法は凡て醫師

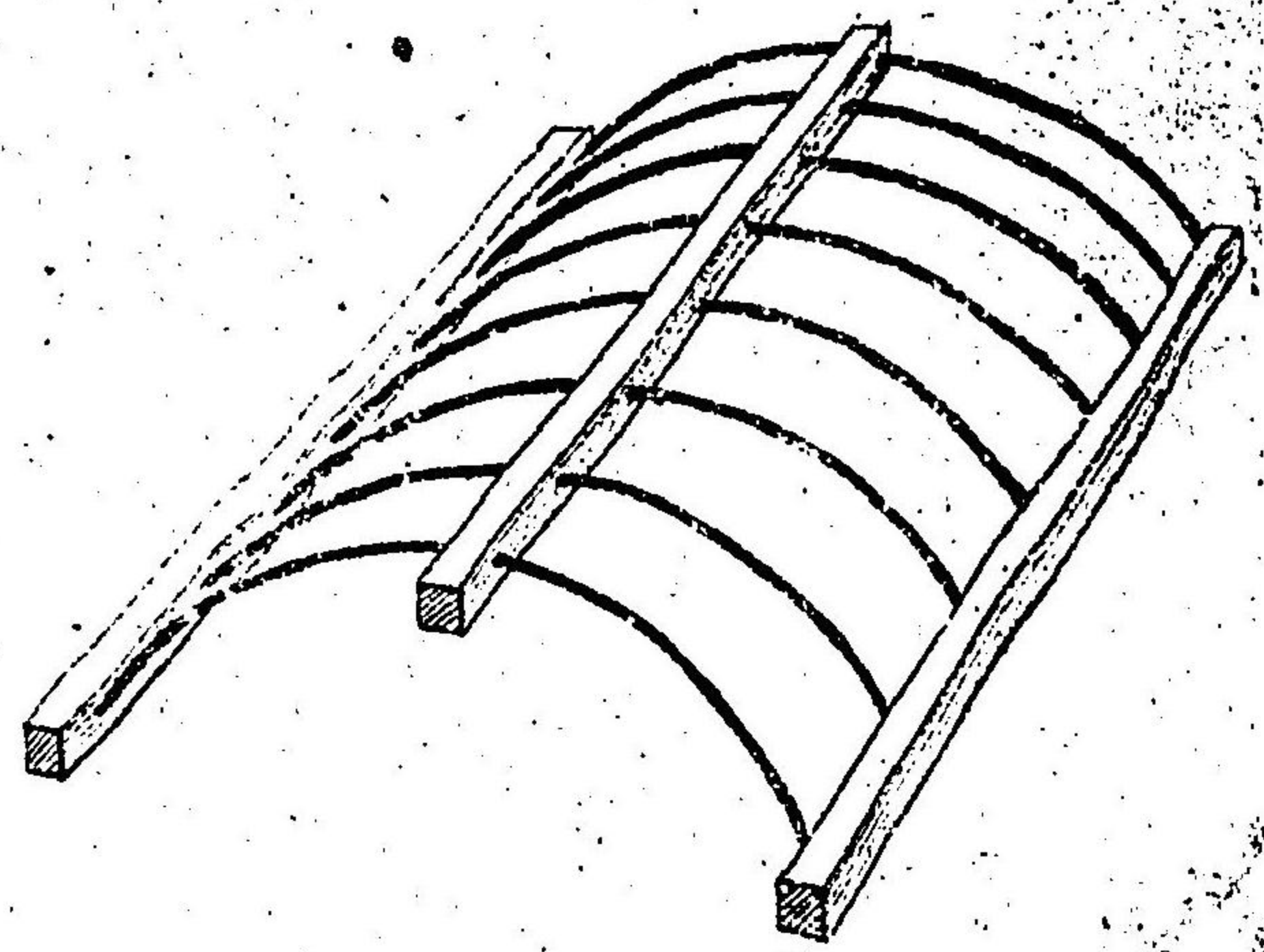
の指揮に従ひ下腹の氷巻法、消毒的陰部の洗滌等を行ふべし而して産褥熱患者に接しつゝ一方に他の妊婦産婦褥婦を處置するときは忽ち産褥熱を傳播し産婆の不注意より多數の産褥熱患者を出す事あるが故に若し醫師にして産褥熱ありと診斷せるときは産婆は直ちに他の妊産婦の處置に従事する事を止め分娩時或は産褥中使用したる器械中一部分は嚴重なる消毒をなし再び使用して可かりと雖も消毒し易からざるものは再び使用に堪へざるもの若しくは著しく病毒に汚染せられたるもの等は可及的棄却殊に燒棄すべし金屬又は硝子製器械は一時間以上二十倍石炭酸水中に浸すか或は攝氏百度以上の熱湯中に於て一時間以上煮沸消毒を行ひ産婆の衣類も亦た煮沸或は蒸氣消毒を施すべし而して業務を執らざる間（少くも

も三日間）は毎日全身浴をせし身體を清潔にし且つ毎日二三回温湯石鹼刷子を用ひて上膊以下手指を刷洗し更らに三十倍石炭酸水又は千倍昇汞水中に於て數分間洗ふべし若し産婆の不注意或は怠慢たいまの爲めに他の褥婦に産褥熱を傳播したる證據しやうぎ明らかあるときは産婆は其責を免がるべからざるものとす

褥婦已に産褥熱に罹らば専ら醫師の指揮に従ひ最も注意して看護するを要す即ち身體は全く安靜からしめ平臥の儘とし起坐せしむる事無く場合によりては常に仰臥の儘にて側臥さへも許すべからず食物も亦た醫師の命の儘にあすべきものありと雖も専ら流動食即ち主として牛乳、米粥、肉汁、鶏卵、等を用ひ固形食は勿論嚴禁し其他のものも雖も常に醫師の指揮に従ふべし飲料は少量の赤酒リモナーデ薄き茶、咖啡、等を

第 二 百 四 十 四 圖

夜具を以て身體を壓迫せざるよう先づ之を以て身體を被ひ次に夜具を被らしむ



離被架を示す

與へて可あり被服蒲團の類は乾燥して温暖あるものを用ひ腹部の疼痛あるものに對しては離被架を用ゆるを可とす又た已に産褥熱に罹れるものも雖も不潔なる手指等により更らに微菌の進入を來し病勢を増進すべきにより消毒法は最も嚴重をらざるべからず

乳房の疾患

○乳頭ノ裂傷及び炎症ノ原因並ニ預防法

乳頭乳暈の皸裂及び糜爛、乳頭及び乳暈の皮膚は他部に比し頗る薄弱なるを以て授乳の際容易に剝脱又は皸裂を生ずるものなり此の損傷は哺乳或は衣服の擦過により劇痛を感じ且つ往々出血する事あり或は小兒の吸吮に由りて初め水胞を造り後ち破潰して糜爛面を生じ微菌此處に浸入せば甚だしく深部に蔓延して遂に乳腺炎を誘發するに至る初産婦若しくは凡て皮膚の薄弱なるものは本症に罹り易し

褥婦若し乳房に疼痛を訴ふるときは産婆は乳頭及び乳暈に損傷の有無を検し若し赤色を呈し或は皮膚の剝脱皸裂を認むれば授乳毎に五十倍硼酸水を以て洗滌し疼痛甚だしきときは乳頭帽子を用ひて授乳せしむべし若し已に潰瘍面を生じて治癒

第 二 百 四 十 五 圖



乳頭帽子を示す

し難く乳腺炎を發するの疑ひあるときは直ちに授乳を止め醫師の治療を乞はしむべし

○乳腺炎ノ原因症候及び處置ヲ記セ

乳腺炎、とは乳頭或は乳房の損傷より病原菌の侵入蕃殖して乳腺の炎症を起せるものにして此の微菌は主もに褥婦又は産婆の手指若しくは小兒口内より傳播す而して輸乳管閉塞するときは侵入したる病原菌は甚だ速かに蕃殖するものにして愈々乳腺炎を發すれば褥婦は悪寒發熱を來し乳房は強く緊張

炎症の四徴候

腫起して硬結を生じ皮膚潮紅熱感あり之れに觸るれば甚だしき疼痛を訴へ屢々續いて腋窩淋巴腺の腫起疼痛を發するが爲め患側の四肢を運動し難き事あり發熱は時として四十度以上に達し二三日にして消退せずんば遂に化膿して破潰するに至る然るときは多くは乳腺胞を荒壞せしむるを以て治癒後乳汁分泌減少若しくは閉止を來す事あり

○乳腺炎ノ豫防法

乳腺炎の豫防法、上述の如く乳腺炎は乳頭乳房の損傷より起るものなるを以て豫防法を緊要なりとす即ち常に乳頭を清潔からしめ皮膚を強固にして損傷を防ぎ哺乳後は殊に清潔ならしむ可し已に創傷を生じ腫起痒痒を感じ乳腺炎を發せんとするに至れば上述の如く直ちに授乳を廢し硼酸水(五十倍)の濕布繃帶又は氷菴法を施し傍ら醫師の治療を受けしむべし

乳汁分泌減少及び過多、乳房に著明の變化を認めずして乳汁分泌の甚だ少き事あり或は之れに反して乳汁甚だ多く分泌し放置するも絶へず自から流出し點滴するものあり之れを名附けて乳汁過泄と云ふ或は授乳を廢せし後久しく多量の稀薄の乳汁分泌して止まざる事あり之れを稱して乳汁漏と云ふ其分泌少量あるものは小兒を養ふに適せず乳汁過泄及び乳汁漏は共に婦人身體を衰弱せしむるものにして婦人は屢々慢性貧血に陥り顔面蒼白身體羸瘦、食慾減退、腰痛等を呈す故に此の如き婦人は専ら攝生に注意せしめ滋養物をこらしめ便通を整へ授乳を廢して乳房に繃帶を施し傍ら醫治を受けしむるを良とす

便通異常

分娩後數日間は便秘を來す事通常あれ共尙ほ長く秘結するときは直腸の充盈に由りて子宮の回復不全を來すべきが故に二三日毎に一回灌腸を施すべし之れに反して産褥中食物の不攝生等に由りて往々下痢を來す事あり而して單に下痢のみあるときは下腹を温包し醫治を乞はしむれば直ちに全治すべし雖も下痢劇しく甚だしきに至りては不隨意に大便を漏らし加之發熱あるときは甚だ危険あるを以て直ちに醫治を乞はしむべし又た妊娠中増大せる痔核は産褥に至りて便通時の疼痛を伴ふ事あり或は脱肛にて分娩時の努責に由りて肛門の粘膜翻轉して肛門外に出て産褥に至りても整復せざる事あり然るときは手指に阿列布油を塗り徐々に之れを還納し努責を禁じ常

脱腸若し箝頓する時は腸管の疏通止まり便通なく嘔吐頻々遂に糞便を吐出するに至り腹部膨滿緊張して大鼓の如くなるべし

に側臥位をこらしめ高度のものにありては醫治を乞はしむべし

脱腸、分娩時の努責に由りて鼠蹊部臍部等に脱腸を來し又た妊娠中より脱出せる腸管は時として産褥に至るも整復せずして劇痛、嘔吐、便秘、等の箝頓症を發する事あり而して斯くありては殆んど救ふ事能はざるものあるが故に平素脱腸を有する婦人の分娩に際しては努責を禁じ脱腸門を指にて堅く壓閉し産褥中脱腸あるを認めば猶豫なく醫治を乞はしむべし

尿利障害

産婦は往々排尿時疼痛を感じる事あり或は全く排尿をせし能はざる事あり或は尿を不隨意に漏出する事あり

○分娩後於ケル尿閉症及び尿失禁ノ原因及ビ處置

排尿時の疼痛、多くは分娩の際生じたる尿道口、或は近傍の創傷に尿の浸觸して刺戟するに由るものあるが故に外陰部を清潔に保ち生薑、胡椒、芥子、其他の刺戟物を食せざる様注意し時々硼酸水を綿花に浸し拭ひ沃度仿謨末を撒布するときは容易に治するものごとす

尿閉、多くは分娩後腹壁弛緩に因する腹壓の不完全ある爲めか或は分娩時被りたる尿道膀胱等の挫傷に由りて來り若しくは褥婦の仰臥位に於ける排尿に慣れざるに由る事多し而して尿閉を起せるときは耻骨縫隙上に於て柔軟なる球形物として膀胱を觸れ軽く之を壓すれば尿意を催すべし、雖も尙ほ自利し能はざるときは嚴重ある消毒の下にカテーテルを用ひ一日二三回宛排尿せしむべし但し尿閉は長く持續するものにあ

○分娩後尿閉ノ原因及ビ處置

○膀胱充満ノ狀況及ビ排尿法ヲ記セ

らざるが故に毎回カテーテルを挿入する以前に先づ褥婦が自らから排尿し得るや否やを試むべし而して産褥に於ては仰臥位の儘排尿する事必要ある場合多きを以て妊娠の末期より勉めて仰臥の儘排尿する事を試ましめ之れに習慣せしめ得ば甚だ便利ありとす

不随意の排尿即ち尿失禁、分娩長時に亘り膀胱の下部兒の先進部の爲めに長く壓迫を蒙るときは膀胱括約筋の麻痺を殘し咳嗽、嘔吐、身體動搖に由りて不随意に尿を漏す事あり此の症は分娩後多くは一週日を経て治癒すべし之れに反して先進部の壓迫強劇にして殊に長時持續せる困難ある分娩に在りては膈前壁若しくは子宮頸部組織の壊死を來し排泄する尿中には血液を混じ壞死組織は二三日の後剝落して爲めに膀胱

壓迫壞疽

膀胱の間に瘻孔を形成する事あり之れを膀胱瘻と稱し尿は膀胱内に蓄積する事能はずして絶へず膀胱内に出て尿の爲めに膣外陰部の糜爛を來す事甚だし此の症は醫師の手術に由らざれば到底治癒し難きものなるを以て之れを發見せば直様婦人科醫に托すべし

膀胱加答兒 尿意頻數排尿時の疼痛及尿の混濁等の徴候ありて尿中に膿及び血液を混ざる事稀れからず原因は多くは不潔のカテーテル挿入及び挿入時の不注意に由りて起るものにして甚だしく危険ある疾病にはあらざるも醫治を加ふるも長く治癒し難く慢性病となり易きものあるを以てカテーテル挿入の際は消毒を嚴重にし粗暴ならざる様注意するを要す處置としては勿論醫師に托し膀胱内の洗滌を乞ふより外亦も産

婆は身體の安靜を守らしめ刺戟性の飲食物を禁じ牛乳飲用を勸誘する事肝要なり

第十二章 初生兒の異常及び疾病

第百節 初生兒の假死

○初生兒眞假死ノ區別ハ如何
假死と眞死の鑑別に述ぶるが如き症に發する時は心音を發し呼吸をなす止まり四肢の末端を緊縛するも血液循環せざるを以て燈火を眼前に持來るも瞳孔を縮小せず鼻粘膜を羽毛等に刺戟せず呼吸の有無を檢

胎兒産出するも時として殆んど生活の徴候を缺き四肢を運動する事無く啼泣せず且つ呼吸を營まず臍帶の搏動は殆んど手に應ぜず唯僅かに幽微の心音を聴取し得るのみある事あり此状態を假死と云ふ此の場合に於て適當なる處置を施すときは多くは生命を保續せしめ得るに至るものとす而して此の初生兒の假死は已に述べたるが如く兒の體内に兒の生存に必要な物質殊に酸素の輸入減少するか或は絶止するに由りて發す

初生兒の假死

せんと欲せば鏡を
口鼻の前に接すべ
し鏡若し曇る時は
呼吸しつゝある徴
候にして曇らざる
時は呼吸せざるの
徴なり又た燈火を
鼻口の前に持ち來
りて檢するも可な
り若し呼吸しつゝ
ある時は燈火は其
呼吸に應じて動く
を見るべし

○初生兒假死ノ徴候及
ビ原因處置ヲ擧ゲヨ

○初生兒假死ノ原因
候及ビ産變ノ施スベ
キ處置ヲ記セヨ

るものにして臍帶の壓迫、捻轉、纏絡、胎盤の早期剝離、過
劇ある陣痛、痙攣性陣痛、子宮の強直、等に由りて母體より
胎盤内に血液の流入障害せられたるもの或は分娩長時間に涉
り殊に兒頭長く骨盤内に箝入して壓迫せらるゝごき、或は母
竝に胎兒の失血、心臟病、肺病の如き血液の性質及び循環に
變狀を呈する母の疾病福帽を被りて産出する胎兒等に來る而
して子宮内に於て胎兒危險に迫り將に假死に陥らんごするご
きの徴候は分娩中胎兒死亡の條下に於て既に述べたる如し、
胎兒が假死の状態を以て分娩するごきは其輕重に従ひ種々の
症狀を來すものにして輕度の假死に在りては極めて微弱なる
四肢の運動をあし長き間歇を以て呼吸をなし顔面は藍赤色を
呈し産瘤は強く緊張し臍帶は鬱血緊張して搏動甚だ微弱なり

○分娩シタル小兒ノ呼
吸セザル時又ハ分娩
後呼吸停止シタルト
キハ如何ニ處置スベ
キヤ

初生兒の假死

二八九

中等度の假死に在りては四肢は運動せざるも未だ弛緩する
に至らず顔面は浮腫狀を呈して藍赤色を現わし産瘤は緊張し
臍帶も緊張し其の搏動は甚だ幽微なるか或は全く觸知する事
能はず呼吸は全く之れ無く只だ幽微の心音を聽取すべし高度
の假死に在りては顔面は蒼白色を呈し四肢其他身體の諸部は
全く弛緩し皮膚は皺襞を現はし口腔及び肛門哆開し呼吸は全
く之れを營まず産瘤は弛緩して柔軟となり臍帶は萎縮して搏
動全く止み唯だ僅かに甚だ幽微にして緩慢不正なる心音を聽
取し得るのみあるが故に最も適切なる處置を取るにあらざれ
ば到底其の危険を救ふ事能はざるものごす
處置、産婆は豫じめ分娩の經過に注意し假死の原因ごなるべ
きものを出來得べきだけ取り除き其末期に於て胎兒が危険に

○初生兒假死ハ何ニヨ
リテ之レヲ豫防スル
セテ併セテ其原因ヲ記
セ

陥りたるの徴候を認めたるときは速かに醫師を招請し娩出後直ちに適當の處置を施し得る様準備をせし置くべし胎兒娩出後假死の症狀を呈するときは臍帶搏動の如何に拘らず速かに結紮切斷し直ちに指頭に布片を巻きて口腔及び咽頭部に存する粘液血液等を拭ひ去り氣管カテーテルを深く喉頭部に挿入し兒の吸引せる粘液羊水血液等を悉く吸ひ出したる後輕度の假死に在りては手掌面を以て臀部若しくは背部を軽く打ち或は四肢を摩擦し若しくは攝氏四十度位の溫湯中に兒の身體を浸し胸部に冷水を注ぐ時は多くは強き呼吸を始むるものごとす氣管カテーテルを挿入するの法は左手の示中指を兒の口中に入れ舌を前下方に壓し右手を以て軽くカテーテルを摘み左手

の示中二指の間に沿ふて徐々に深く喉頭部に進入せしむ此の際氣管カテーテルの尖端舌根に達せば口中にある左手の示中二指を以てカテーテル尖端の方向を前下方に向はしめ喉頭部に至る様加減すべし

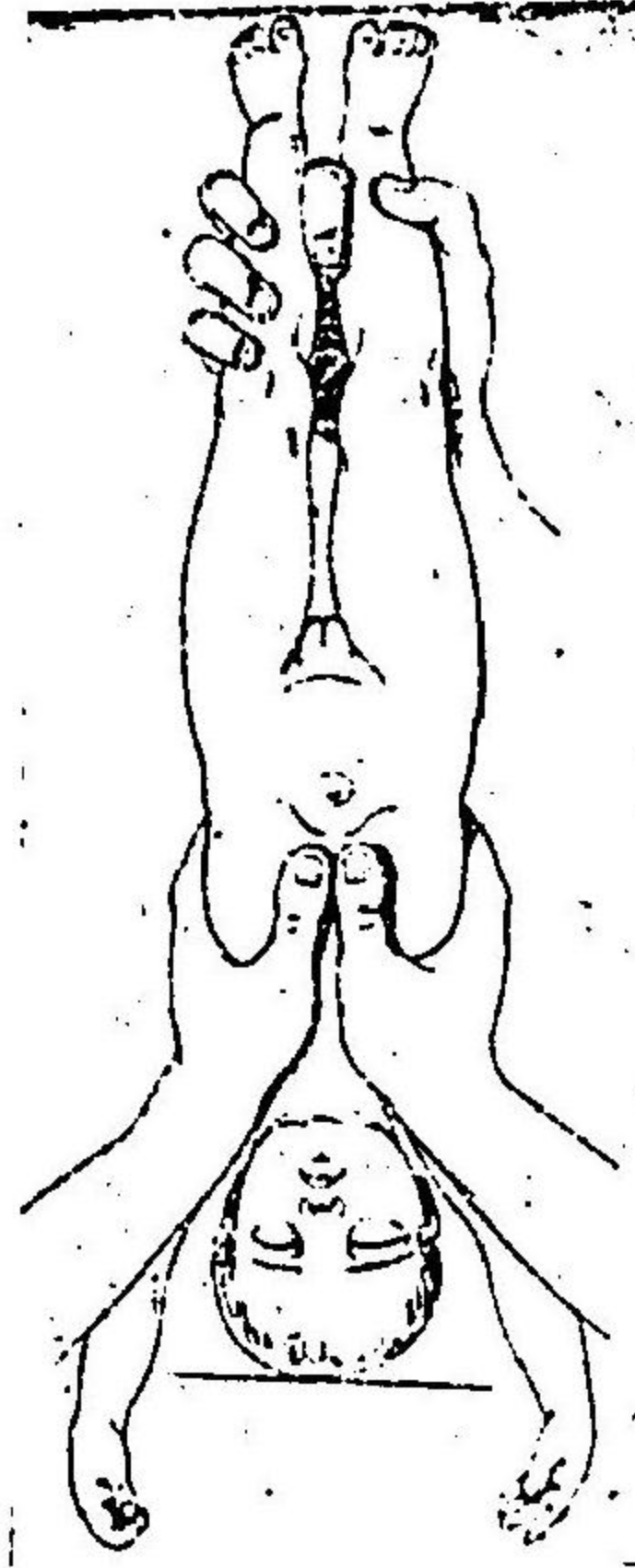
以上の如く皮膚に刺戟を與ふるときは輕度の假死及び其中等度のものにありても多くは恢復すべし雖も高度のものにありては常に人工呼吸法に由らざれば蘇生し難し故に此の場合に在りては氣管カテーテルを以て充分吸引して氣道の開通を謀りたる後猶豫なく左の方法を行ふべし

初生兒の人工呼吸法

初生兒人工呼吸法には數種あり雖も何れも規則正しく胸

○假死兒ヲ蘇生セシム
ル方法如何
○人工呼吸各種ノ方法
ナル呼吸法ヲ記セ

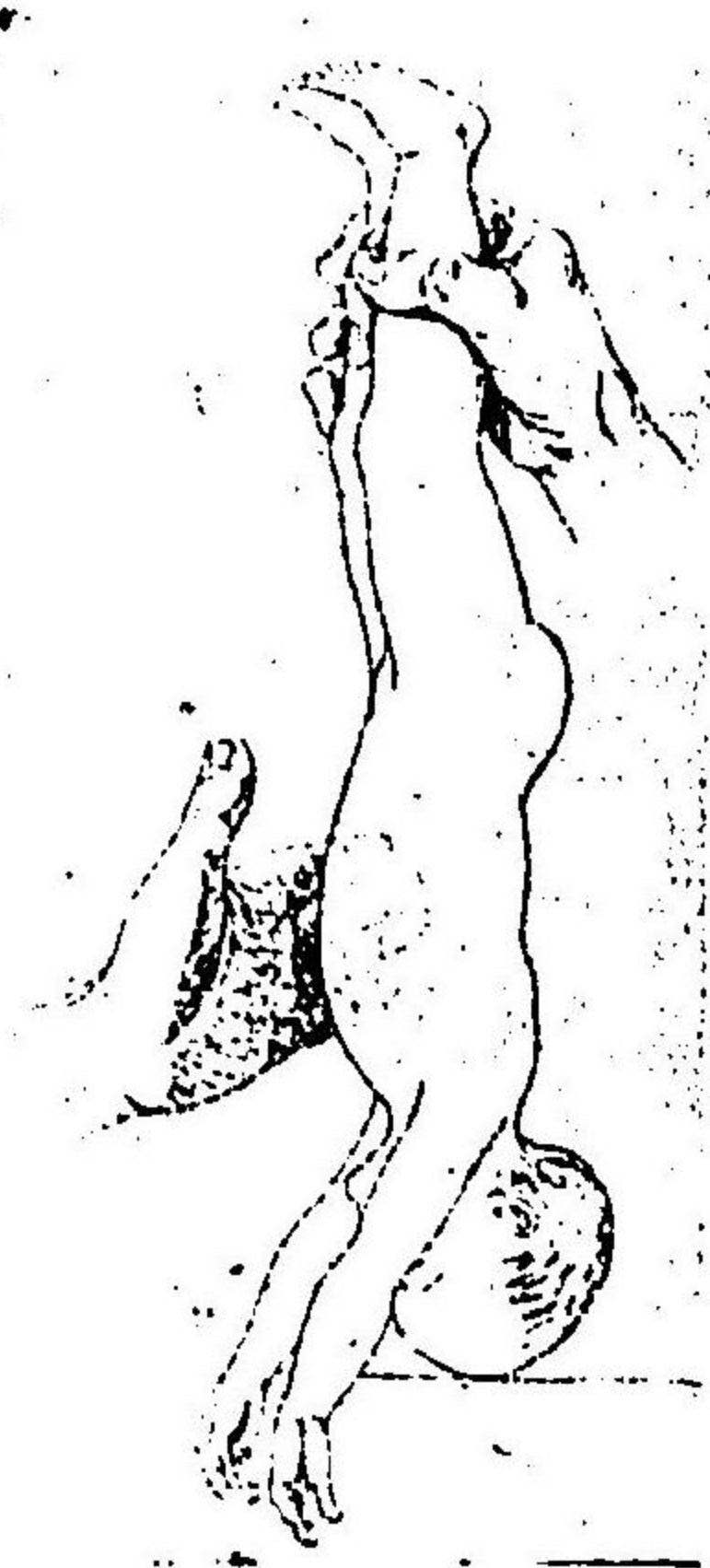
(甲)圖六十四百二第



プロヒョーニツク氏の人工呼吸法を行ひつゝあるを示す

(前面より見たるもの)

(乙)圖六十四百二第



(側面より見たるもの)

廓を一張一縮せしめ生理的の呼吸作用を人工にて真似るに外ならず而して其の内にて有效なりと認むるものを左に掲ぐべし
(一)、介者をして兩兒足を握りて兒體を倒まに懸垂せしめ術者は兩手掌を以て初生兒の胸廓を握り一

○シユルツエー氏人工呼吸法トハ如何

(甲)圖七十四百二第



(兒を懸垂せるもの)

シユルツエー氏の人工呼吸法を行ひつゝあるを示す

度び壓し一度び緩め以て胸廓を一張一縮せしむ然るときは氣道内に存する粘液血液等は自己の重力に由りて自然に流出し且つ脳内には多量の血液を送り大に其蘇生を助くるものごす之れをプロヒョーニツク氏の人工呼吸法と云ふ

(二)、人工呼吸法中最も有效なりと認めらるゝものはシユルツエー氏の振揺法とす先づ術者は起立して少しく兩脚を開き兩手を以て初生兒を前方に向け兒の兩側

兒を舉上し倒まに屈伏せしめたる時は呼吸を營み腦内に血液流入し喉頭内の汚物は自己の重力により流出す

第二四百七十七圖 (乙)



シユルツエー氏の人工呼吸法を行ひつゝあるを示す

(兒體を舉上せるもの)

高く舉上し自己の頭部の高さに至り臀部を上方に至らしめ小兒の顔面を術者の顔面と逆に對向せしむ而して兒體の下半部は垂下して胸廓を壓するに至らしむ次で再び之れを下方に振

の肩胛を把持して
拇指を鎖骨の前に
置き示指を腋窩に
懸け他の諸指を背
部に當て兩手掌を
以て兒頭を其間に
狭み支へて兒體を
懸垂し次で腕を伸
ばしたる儘小兒を

之に反して兒を下
垂したる時は胸廓
擴張して呼吸を營
む

下し自己の脚間に致して兒體を懸垂す此の如くして之れを反覆する事一分時間八回乃至十回あるべし

此の振搖法は兒が術者の手より滑脱する恐れあると外觀上慘酷の觀あると其他居室の構造上等よりして一般に行はれ難き場合あり故に緒方博士は單筒ある左の呼吸法を創き意いせられたり

(二)、兒を仰臥の位置にあらしめ一手の示指拇指を以て兒の背側より頸部を狭み他の三指を以て一方の胸側を把持し他手の示指を兒の後側より内踝の中間に挿入し拇指及び他の三指を外踝部に抵て、兩足を握る而して先づ背部に貼せる手を以て兒の上體を徐々に舉上して兒の顔面小兒の足背に接するまで強く屈伏の位置をこらしめ次で二三秒時間此の位置を保ち

たる後ち背部に貼せる手によりて頭部を起し舊位置に復せしむ次で此の法を反覆するか或は一日舊位に復したる際兒の背側に貼せる手を離して兒をして自己の重力に由りて倒懸するに至らしめし後先きに拔去せる手を再び背部に貼じ再び屈伏の状態をこらしめ之れを反覆するかにあり此の法も一分時間八回乃至十回なるべし

以上の方法を行ふの間は太低一二分間毎に温湯中に入れ兒の體温を失はざる様注意し此の間初生兒の状態に注意し口中に粘液等の溜れるを見ば之れを拭去し更らに氣管カテーテルを以て吸引すべし

斯して人工呼吸法其の效を奏せば兒は呼吸を始め皮膚は漸次紅色を帯び來り温暖となり四肢を運動し眼を開き次で強く啼

○假死シタル小兒ノ蘇生シタル徵候如何

産婆の勞力の現著なるは人工呼吸法なり

泣するに至るべし然れ共呼吸の整然として啼泣力強く全く確かありと思ふまでは決して油斷すべからず時としては一旦呼吸せる兒も再び假死に陥る事あるが故に注意せざるべからず又た人工呼吸法を行ひ其效現はれざるこき雖も直ちに失望する事なく充分ある忍耐を以て氣道内の粘液を除き重ねて人工呼吸法を反覆し時々心搏動を見觸れ若くは聽診器を以て聽き心音の存する間は決して斷念する事なく連續して之れを行ひ心搏動全く止むも直ちに斷念すべからず何とあれば二時間以上も人工呼吸法を持續して蘇生せしめたるの例あればなり

第百〇一節 未熟兒の看護法

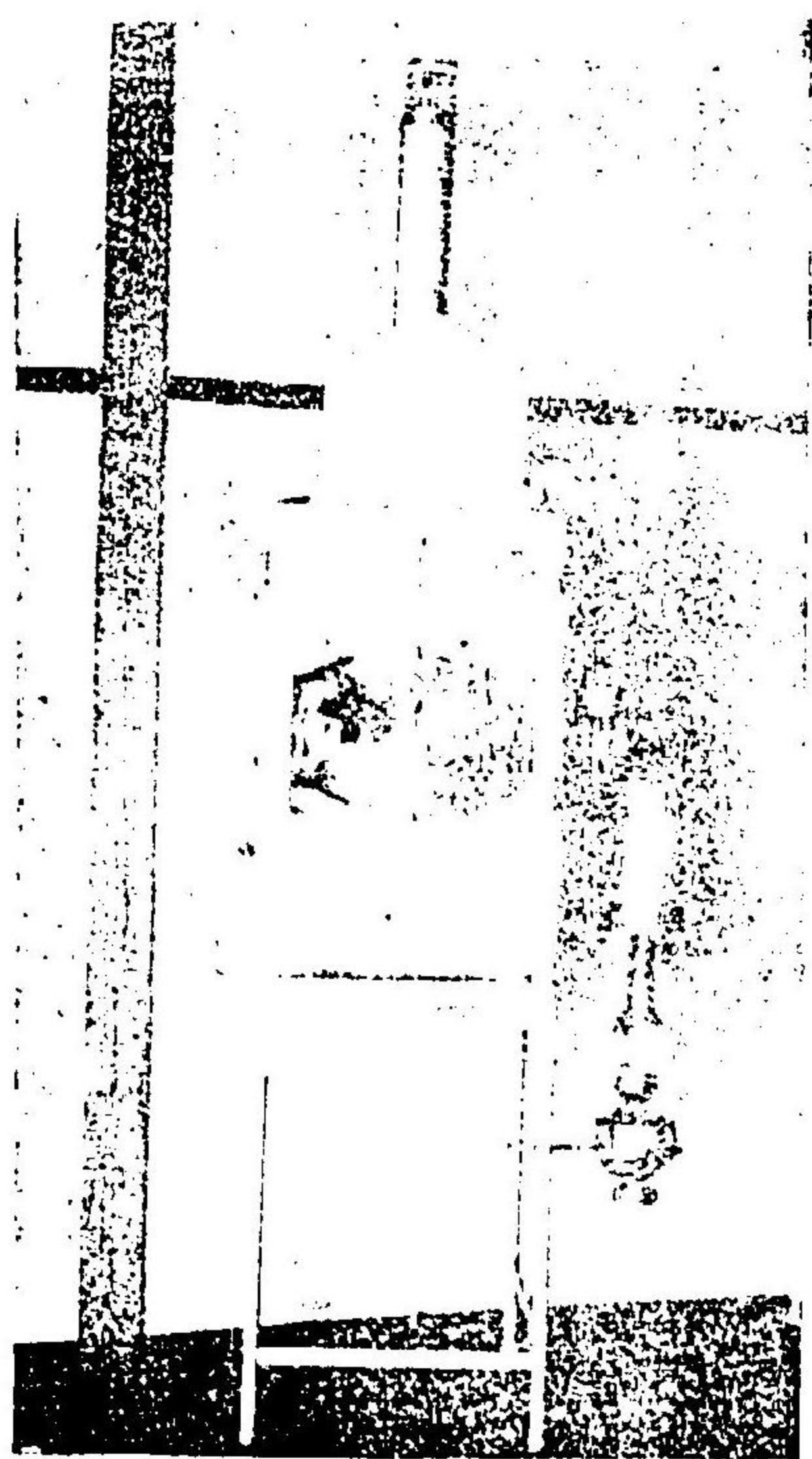
未熟兒とは妊娠拾ヶ月前に於ける早産兒にして成熟兒の徵候

を具へざるものを云ひ其發育不充分なるを以て餘程の注意を與へざれば成育する事困難なり然れ共其の分娩が妊娠末期に近づける程容易とあるは自然の道理あり

未熟兒に就きて最も注意すべきは兒の體温を失はざる様温暖

初生兒保育器を示す

圖八十四百二第



に保つの方に於て歐洲諸國亦た近來我が邦に於ても産室を有する病院等には人工保育器

或は乳豆を作りて吸はしむ

あるものを具へあり此器は常に一定の温度を保ち空氣の交換を爲し得るの裝置を有し此の中にて未熟兒を養はゞ結果甚だ良好なり然れ共普通民間に於ては温婆を以て直接兒を温むるの用に供し暖爐又は火鉢を以て室内を大凡攝氏の二十三四度位に温め常に寒暖の變化なき様注意せざるべからず次に注意すべきは授乳の點に於て未熟兒は元來一回の哺乳量の少きものなるが故に一時間乃至二時間毎に授乳し殊に母乳を用ゆるの必要あり若し止むを得ずして人工營養法を施すにきは牛乳は成熟兒に比して稀薄ならしめ哺乳の力弱きが故に茶匙を以て口中に流し込むべし

以上の如くして常に其の呼吸状態に注意し且つ睡眠中を注意して監査すべし未熟兒は五官の働き成熟兒に比して甚だ鈍き

未熟兒は屢々泣く方がよろし

が故に少しの障害位は感ずる事なくして常に能く睡り睡眠中
顔面藍紫色或は蒼白色に變じ急に絶息する場合あきにあらず
故に此の如き危険症状あるときは勿論然らざるも睡眠長時に
互るときは之れを醒覺して強く啼泣せしめ深呼吸を營ましむ
べし然るときは大に血行を盛んあらしむべし尙ほ血液循環を
盛んならしめ營養を良かしめんが爲めに一日數回沐浴せしむ
るを良しすれ共此際温湯の温度を成兒熟に於けるよりも高か
らしめ其他取扱上體温を失はざる様注意せざれば甚だ危険あ
り其他未熟兒は虚弱にして驚口瘡其他の疾病に罹り易く且つ
腋窩頸部鼠蹊部等の靡爛を來し易き故常に清潔法に注意すべ
し

第 二 百 四 十 九 圖



兩側に發生せる頭蓋血腫を示す

第百〇二節 分娩に因する初生兒の異常 頭蓋血腫

既に正規分娩の條
一下に於て論述した
るが如く分娩の際
小兒の頭部臀部顔
面等の一部子宮口
に括約せらるゝ時
は該部の血行障害
を來し最も先進せ
る部の組織中に漿
液滲漏し腫脹を來

○産瘤ト血腫トノ區別如何

すべし之れを産瘤と云ひ分娩後長くも一二日にして消失するものなり然れ共時としては壓迫甚だしき爲めに頭蓋の骨膜下に於て血管の破裂を來し溢血を來し産瘤に類する腫脹を來す事あり之れを稱して頭蓋血腫と云ひ分娩直後直ちに認め難き場合にては暫時にして腫大すべし而て多くは後頭骨又は顛頂骨上に發生し縫合及び顛門を越へて他骨に蔓延する事なく産瘤に比して少しく硬く弾力性硬固なる點が産瘤と異なる所なり而して其の小あるものは多くは數日にして自然に消失すべしと雖も其の大あるものに至りては消失する事遅く危険あるを以て硼酸水の濕布繃帯を施こし置き醫師の治療を乞ふを要す

骨の損傷

○初生兒骨傷ノ原因症候及び取扱法

頭蓋骨の壓痕は狭小骨盤に來る事多し

第 二 百 五 十 圖



頭蓋骨に壓痕を生じたるを示す

異常分娩の際殊に娩出術を行ふに際し粗暴ある力を用ゆることは往々四肢の骨折脱臼等を來す事あり然るときは該肢は異常の位置を取り或は異常の屈曲を現はし之れを運動する事能はず損傷部を壓迫すれば甚だしく啼泣して其劇痛ある事を示し四肢の骨折にあつては該肢を運動せしむるに際し其部に摩擦音を發すべし又た分娩困難あるときは往々頭蓋骨の壓痕若しくは骨傷を來す事

骨の損傷

あり産婆若し以上の症状を發見すれば骨折部に繃帯を施こし其移動をさけ直ちに醫師の診察を受けしむべし

頸部の損傷

顔面位額位或は骨盤端位挽出術等に由りて強く頸部を伸展し或は牽引捻轉等を行ふときは頸部皮下に挫傷を生じ血腫を構成す殊に胸鎖乳頭筋を損傷するときは該部に血腫を生じ頸は著しく腫脹し治癒するも斜頸を残す事あり故に此の如き損傷を發見せば速かに醫師の診察を乞はしめざるべからず

軀幹の損傷

分娩に際し強力なる挽出術を行ふときは時として脊椎骨の脱

胸鎖乳頭筋は又た胸鎖乳頭筋とも云ふ
諸姉は生れながらに頭部の一方に傾ける人を見るべし即ち斜頸なり

圖一十五百二第



臼脊髄被膜の出血を來し下肢の知覺運動麻痺を現はす事ある
右側の顔面神経麻痺を示す

により初生兒が若し身體を動かし或は背部に觸るるに當りて甚だしく啼泣し且つ下肢の屈伸をなさざる様の事あらば速かに醫治を乞はざるべからず

顔面神経麻痺

甚だ困難ある分娩殊に鉗子手術を受けたる初生兒は時として顔面神経麻痺をのこす事あり然るときは患側の目を閉する事能はず口角は健側に引き附けられ患側の筋を運動する事能は

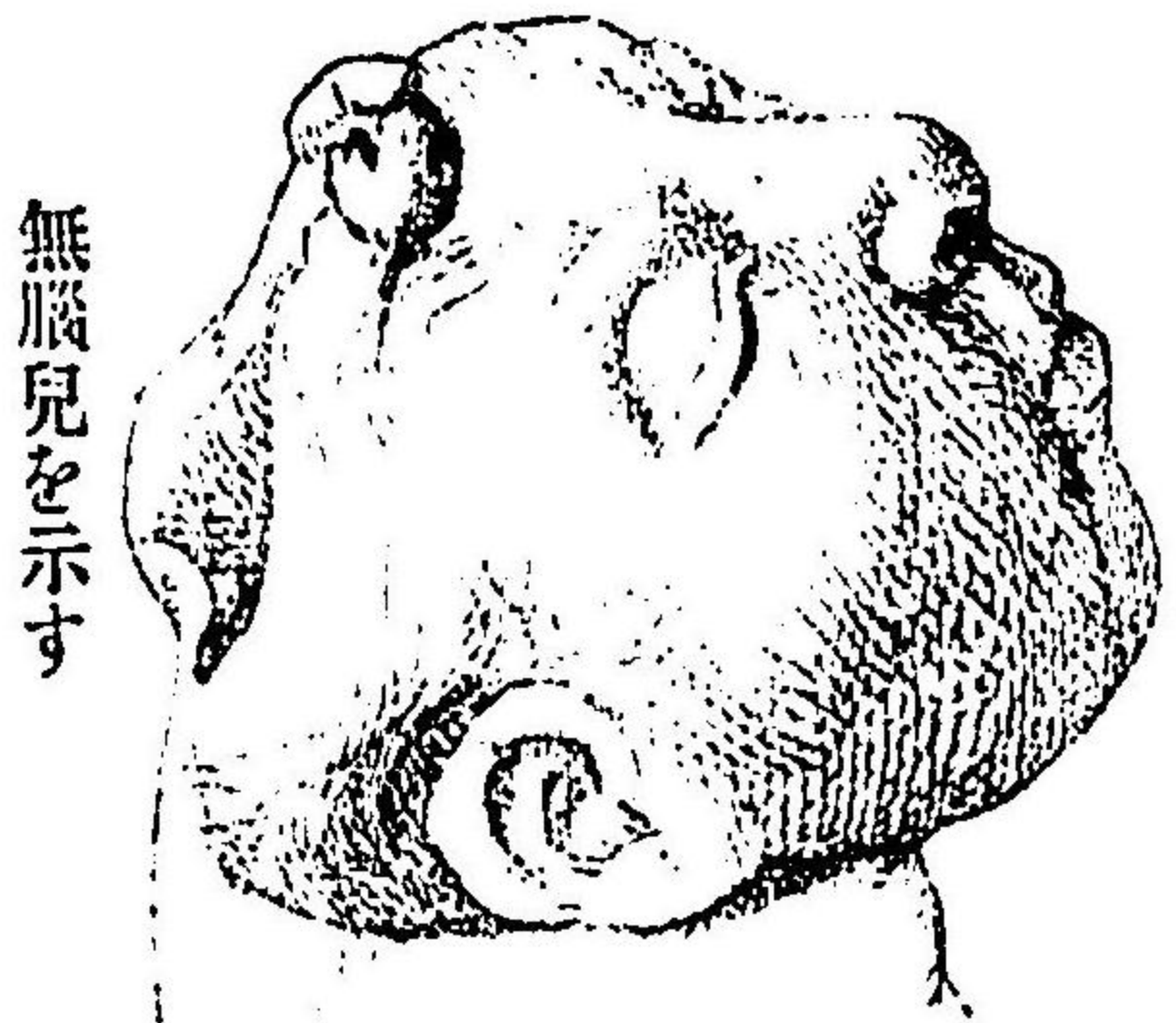
ざるに至る故に若しかゝる症状を發見せば直ちに醫師の診察を乞はしむべし

第百〇三節 初生兒の畸形

初生兒の畸形には數種あり其の中分娩の障害となるべきものは異常分娩の條下に詳述せしを以

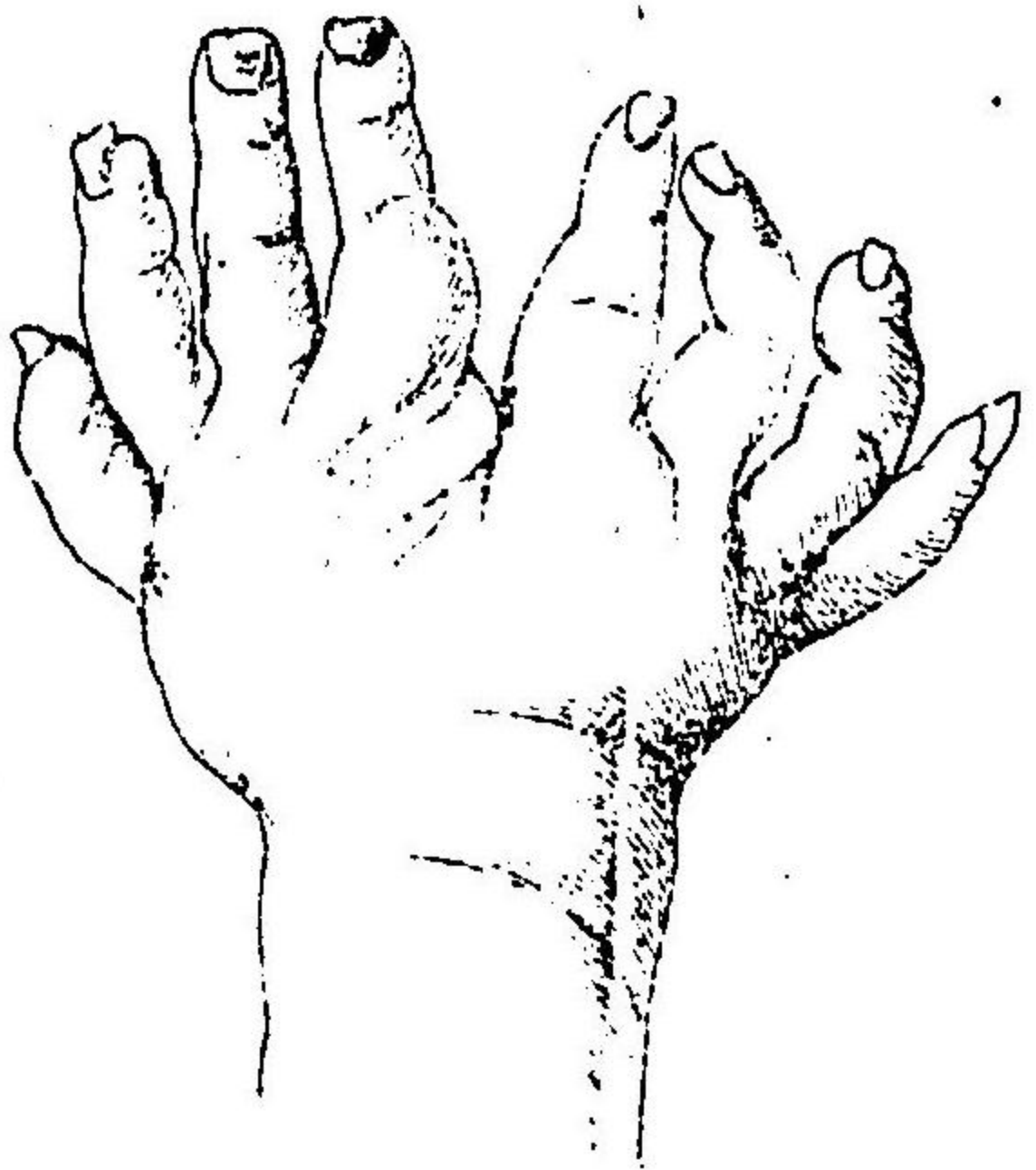
第二百五十三圖(甲) 第二百五十三圖(乙)

無腦兒は直ちに死す、頭に學問の無き産婆は廢物なり



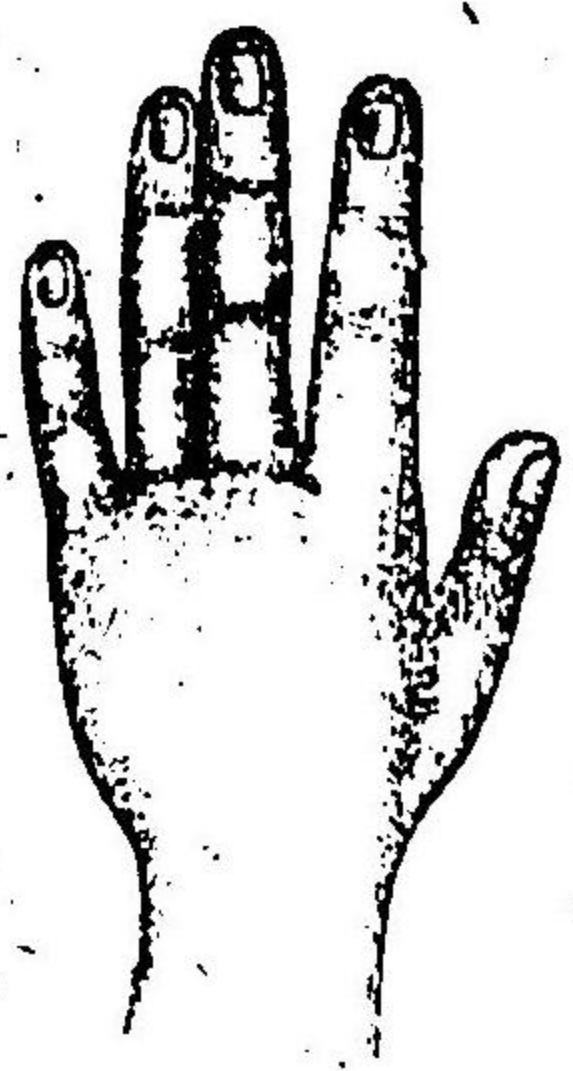
手指の過剰を示す

圖四十五百二第



手指の癒着せるを示す

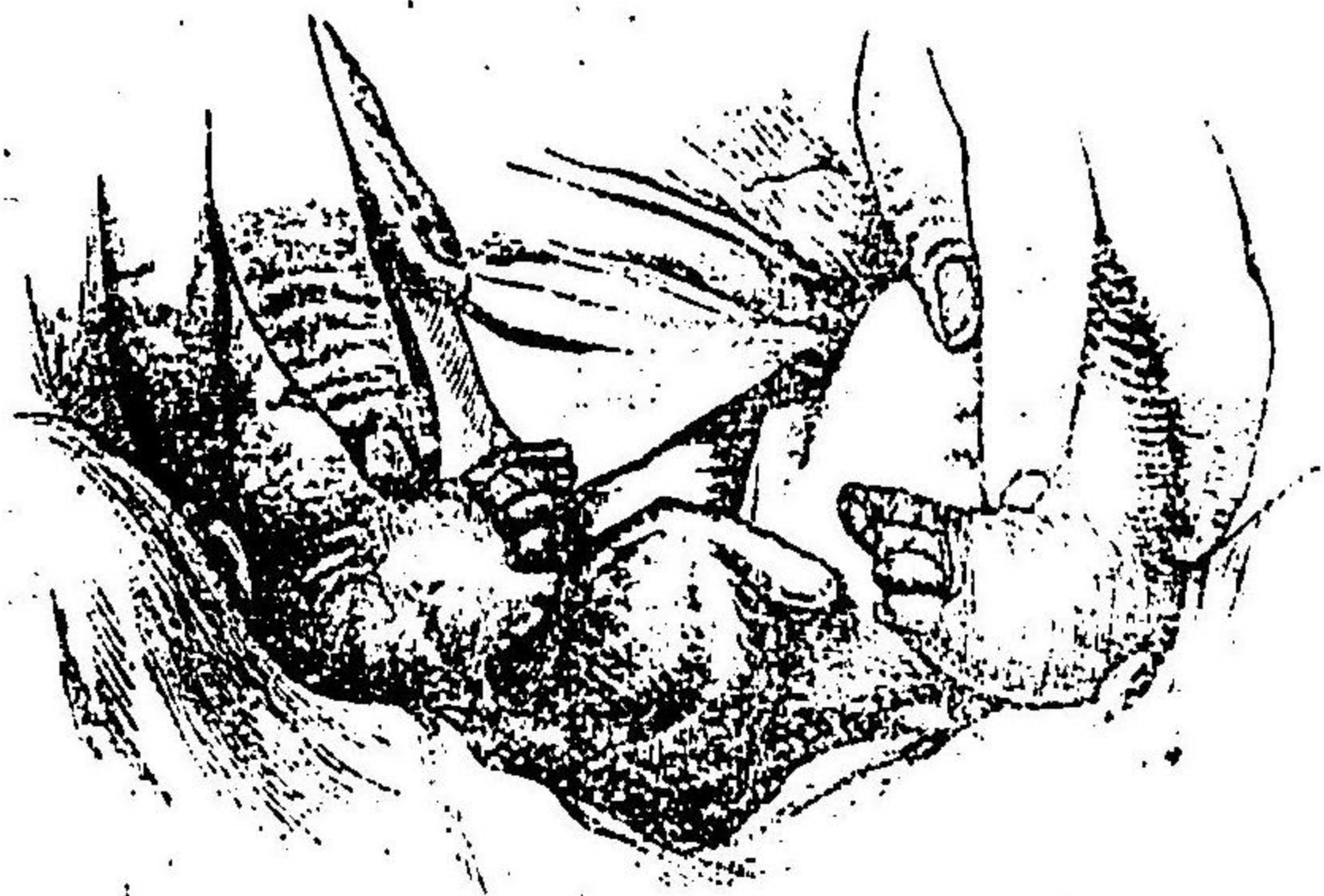
圖五十五百二第



て此處には其他の畸形を舉ぐべし

内翻足を示す

圖六十五百二第



初生兒の畸形を見てビツクリする勿れ宜しく沈着の態度を保つべし

無腦兒又たは半頭兒、圖の如く頭蓋骨の缺損し薄き被膜を蒙むれるものにして分娩の際異常の位置を取り易く多くは顔面位を以て産出すべしと雖も頭部小あるが故に分娩の障害をあす事殆んど之れ無し

無心兒又たは無形兒、形不正にして身體各部を區別し難きものなり

兔唇、狼咽、兔唇とは上口唇の破裂せるものにして狼咽とは口蓋の破裂せるものを云ふ是れ等は小兒の哺乳を妨ぐるを以て早く醫師の手術を受くるの必要あり

鎖肛、とは肛門の閉鎖せるものなるが故に放置し置かば分娩後數時を経るも胎尿を洩さず次で腹部は漸次膨滿し吐乳吐糞を來し遂に死亡するに至るべし故に初生兒第一回沐浴の際に

は毎回注意して肛門を検し分娩後數時間胎尿を洩さず吐乳する等の異常あらば尙能く検査すべし外形上肛門の形を具ふるも直腸と通ぜざるものあるが故にかゝる時はテラーン氏カテータールを挿入して検するも可なり而して鎖肛を發見せば猶豫なく醫治を乞ふべし

尿道口閉鎖、分娩後數時を経るも排尿なきときは此の畸形に疑を置き猶豫なく醫師の診療を乞はしむべし

以上の外指趾の過剰若しくは缺損或は癒着せるもの内翻足にて足部の内方に曲り込みたるもの睪丸の陰囊内に存在せざるもの乳房の過剰なるもの等種々の畸形あれ共直接兒の發育を害するものは少なし

第百〇四節 其他の初生兒の疾病

臍の疾病

臍の糜爛及び臍炎

○初生兒疾病ノ種類ヲ
 記セヨ
 ○初生兒臍部炎症ノ原
 因及ビ臍部ニ記セヨ
 ○初生兒臍部ニ發スル
 疾病ヲ記セ
 ○臍部ノ疾患並ニ其處
 置
 ○臍部ニ軟衝ヲ發シタ
 ル時ハ如何ナル症狀
 ヲ來スルヤ其處置如
 何
 ○初生兒臍炎ノ處置並
 ニ該炎症ニ由來スル
 重要ナル疾患ノ徵候
 ヲ記セ

臍部の脱落前後臍部不潔なるときは糜爛を來し病原菌進入し
 て臍の炎症を發すべし此の臍炎症は最も屢々來るものにして
 臍輪の周縁、發赤腫脹し之れと同時に臍輪の中に潰瘍を生じ
 時としては炎症甚だ蔓延し高熱、痙攣を發して小兒の生命を
 危うくする事あり
 處置、としては豫防を肝要とす即ち産婆は毎回必ず先づ初生
 兒の取扱ひを前にし産婦の取扱ひを後にすべし且つ臍帶臍輪
 及び其近傍は決して不潔なる手若しくは其他の物を觸れしむ

る事かく常に注意して殺菌せる材料を用ひ繃帶すべし既に糜
 爛炎症等を來せば石炭酸水若しくは硼酸水等の洗滌を行ひ後
 ち硼酸末、沃度仿謨末、亞鉛華澱粉等を撒布し消毒綿紗を掩
 ひ繃帶を施こし醫治を仰ぐ事肝要なり

臍膿漏

臍帶脱落后に長時臍部より膿汁を洩す處の病にして産婆は此
 の如き症を發見するときは直ちに醫治を乞はしめ膿汁は叮嚀
 に清拭して繃帶を施こし醫の指揮を待つべし

臍出血

臍帶結紮の不完全なるか臍帶斷痕の早く壞疽に陥れるとき或

は臍血管の脆弱あるに由りて或は血友病、梅毒等の如き種々の全身病に由りて臍部より出血する事あり之れを臍出血と云ふ而して此場合も醫治を要するは勿論あれ共出血少量なるときは石炭酸水を浸せる小綿球を以て出血部を強く壓抵し繃帶すれば多くは止血し得べし若し之れにて止血せざるか若しくは出血多量なるときは速かに醫治を乞はざるべからず假死せる初生兒若しくは呼吸の不充分なるものによりては臍帶の結紫殊に綿密あらざれば臍出血を起し易し

臍脱腸

○初生兒臍脱ノ處置如何
臍脱腸の如何なる危険あるやを知ら

先天的臍輪の大ある者或は啼泣、咳嗽其他の努力に由りて初生兒の腹壓亢進するときは腸管は往々臍輪より脱出する事あり

俗間にては出臍と稱へ出臍は親孝行ものなり等と云ひてすまじ切て居る

り之れを臍脱腸と云ひて臍部の皮膚は囊状に膨出し腹壓止むか或は之れを軽く壓迫するときは再び還納し得べしと雖も稀れに還納せずして嵌頓する事あり然るときは腹部は著しく膨満して嘔吐を來し便秘結し甚だときは吐糞をなし遂に死に至るものとす

處置、こしては脱出せる腸管を還納して再び脱出せざる様壓抵繃帶を施し醫師の診察を請ひ常に啼泣せざらん事を勉め若し嵌頓して復納せざるときは其儘直ちに醫師の治療を乞はしむべし

臍息肉

臍帶脱落后に於て其の部より肉牙異常に發生して突出する事

あり之れを臍息肉と云ふ然るこまは醫治を乞はざるべからず

初生兒の破傷風(テタヌス)其他全身痙攣

劇烈なる創傷傳染病にして臍帶斷端又は臍部の創面より破傷風菌の侵入蕃殖するにより發する病あるが故に臍を不潔からしむる時は本症を起し易し即ち生後第一週稀れには第三日の頃より啼泣其他不安の状を呈し哺乳困難となり口は壓迫せられたるが如く緊閉して開く事能はず所謂牙關緊急を呈し遂に全身に痙攣を惹起し甚だしきは強直して軀幹は後方に反張す(角弓反張)體温は四十度以上に昇り或は高く昇る違ふくして二十四時間以内に死に至る事多し
其他初生兒は知覺の鋭敏なるものなるが故に僅かの發熱、便

秘、消化障害、等によりて屢々全身の痙攣を發する事あり

處置、臍帶斷端及び臍部の創面に直接間接觸るゝものは必ず消毒したるものを用ひ且つ産婆の手指は常に嚴重なる消毒を行ひ其豫防に心懸け萬一前記の症狀を發する事あらば時を移さず醫師の來診を乞はしめ該患者に接したるときは器械は勿論産婆は全身浴ををし手指の嚴重なる消毒を行ひ被服を交換したる後にあらざれば他の産婦或は初生兒に接すべからず

丹毒

多くは臍部稀れには生殖器鼠蹊部の糜爛面より丹毒菌と稱する微毒の侵入蕃殖するに由りて發生するところの最も恐るべき病にして先づ患部の周圍發赤して猩紅色を呈し僅かに腫脹

し之れを壓すれば退色し手を放てば再び紅色とある此際疼痛の爲めに兒は啼泣すべし而して該紅色は速かに周圍に蔓延し甚しきに至りては四肢に至るまで波及し高熱を發し小兒は速かに衰弱し脈膊呼吸頻數とあり哺乳するを嫌ひ數日にして多く死に至る

處置、消毒法を嚴守し其豫防を謀り已に丹毒を發せば速かに醫治を乞ひ患者を取扱ひたるときは全身の温浴を命じ手指の嚴重なる消毒を行なひ衣服を交換したる後ちにあらざれば他の産婦或は初生兒に接觸すべからず

初生兒膿漏眼

分娩時腔内に存する淋毒が兒の眼中に侵入して發するものに

○初生兒眼疾ノ原因
○初生兒眼疾ノ原因
○初生兒眼疾ノ原因

○初生兒眼疾ノ原因
○初生兒眼疾ノ原因
○初生兒眼疾ノ原因

○初生兒眼疾ノ原因
○初生兒眼疾ノ原因
○初生兒眼疾ノ原因

して分娩後と雖も母及び産婆の手指等より傳染する事あり本症は甚だ危険なるものにして兒は之れが爲めに失明する事多し
初徴は多くは分娩後第一日乃至第三日頃におこり一眼若しくは兩眼の眼瞼は初め甚だしく腫脹して赤色を呈し上下の眼瞼は互に粘着し眼内よりは帶綠色或は帶黃色水様の液を漏出し數時間を経過するや該分泌物は膿状となり眼瞼は益々腫脹し眼を開く事能はず強いて之れを開き檢するに結膜は甚だしく充血して眼内朱を注ぎたるが如く重症にありては角膜に潰瘍を生じ醫治時を失すれば該潰瘍は益々深部に達し主要部分破壊し遂に全く失明の不幸に陥るものなり、本症は初め一眼なる時と雖も直ちに他方に傳染すべし

初生兒膿漏眼豫防法

處置、豫防法最も緊要なり故に妊婦の腔内分泌液(即ち帶下)が若し膿様にして淋疾の徴あるときは初生兒膿漏眼を起すの危険ある事を論じし妊娠中に於て速かに醫治を乞はしむべし若し分娩時に於て膿様帶下を認むるときは五十倍微温石炭酸水を以て丁寧に腔内を洗滌し胎兒は分娩後直ちに醫師の診察を受け一%即ち百倍硝酸銀水一滴づゝを點眼すべし既に本症を發せる時は氷水を綿紗に浸して眼の冷卷法を施し速かに醫師の診察を乞ひ偏眼の分泌物を他眼に移さざる様注意し其分泌物は五十倍硼酸水を浸せる綿花又は綿紗を以て常に外眥より内眥に向ひて清拭し小兒は稍々暗き室内に居らしめ其顔を日光或は燈火に直射せしめざる様注意すべし此の疾病は大人小兒の別なく手指布片被服等凡て分泌液に觸

れたるものよりして傳染するものなるが故に之れを取扱へる産婆は毎常必らず嚴重なる手指の消毒法を行ひ眼の清拭に用いたる布片は勿論凡て此の初生兒に用ゆべき手巾等は全く別にするを要す且つ産婆は自己の手指を以て褥婦竝に自己の眼及び陰部に觸れざる様注意すべし

鴉口瘡

鴉口瘡菌と稱する微菌が口唇、舌、齒齦、口腔粘膜に附着繁殖して發する病にして母の乳頭小兒の口内等を不潔ならしむるに由つて來り殊に兒の虛弱なるもの及び人工營養法によるものは之れに罹り易し

初め口腔内壁舌及口唇等に粟粒大の乳汁の凝固したるが如き

- 鴉口瘡は俗にシメシトギト云ふ
- 鴉口瘡トハ如何其處ニテ記セヨ
- 鴉口瘡ノ症狀竝ニ其處置
- 鴉口瘡ノ原因症候及預防法
- 鴉口瘡ノ原因及ビ豫防法

白斑を生じ日を経るに従ひ増大且つ増加し後ちには普ねく口腔内に蔓延し甚だしきに至りては咽頭食道内に蔓延し疼痛の爲めに嚥下困難を呈し兒は哺乳する事能はずして啼泣し漸次衰弱するに至るべし

處置 豫防法を第一とす即ち授乳前後は乳房殊に乳頭を清潔にし吸乳器に由りて乳を與ふるものは授乳の前後に吸乳器を清洗し小兒の口内は時々殊に授乳後暫時を経て清水に浸せる綿花又は綿紗を以て穩かに清拭すべし(授乳少時間を隔たてざれば吐乳を來す事あり)而して口内を清拭するに當りて其の取扱ひ粗暴あるときは口内に損傷を來す事あるを以て注意すべし既に本症を發するときは直ちに醫治を乞ひ本症を患ふる兒に授乳するものは決して他の小兒に授乳すべからず然ら

口内炎

ざれば病毒は他の小兒に傳播すべし
其他一種の口内炎にして口蓋其他の粘膜に大なる圓形の潰瘍を生じ疼痛を發し爲めに哺乳を妨ぐる事あり之れ等は口内の不潔に由りて生ずるが故に常に口内を清拭し若し前記の症狀を發せば醫師に托せざるべからず

初生兒の耳疾患

中耳炎、外聽道加答兒等あり原因は沐浴の際湯水の外聽道内に入りて先づ此部の炎症を起し次で中耳炎を發する場合多く或は鼻加答兒、口腔、咽頭の疾患例せば鴉口瘡等より傳播して中耳炎を發することあり、中耳炎は殊に恐るべき疾病にして多くは膿を残し若しくは腦膜炎等の恐るべき疾病を起し死

耳に注意せざる産婆多し

に至る事あり而して又た中耳炎は今日までの統計によれば甚だ多數にして其の原因は産婆の取扱ひの不備あるより起るものなるが故に最も注意を要す
外聽道加答兒を發するときは耳より絶えず膿汁を分泌し外聽道は糜爛發赤すべし中耳炎は専門家にあらざれば診斷する事難しと雖も耳部の疼痛の爲めに哺乳する事難く疼痛の爲めに啼泣し熱發する等の症狀あらば猶豫なく醫治を乞ふべし
處置、嚴重に豫防法を守り沐浴の際湯水の耳内に入らざる様注意し殊に綿花を耳内に挿入して沐浴せしむべし又た耳の疾患は人の注意を惹く事遅きが故に常に外聽道に注意して分泌物の有無を検すべし

乳房の腫脹

初生兒乳房の腫脹は往々見る所にして分娩後數日の間に來り其部の皮膚單に腫脹せるのみにして發赤せざるときは別に害をなさず暫時にして消失すも腫脹發赤して炎症徴候を發するときは兒は啼泣して睡眠し得ず終に化膿を來して深部に蔓延する事あり爲めに女兒にありては將來乳汁分泌を損ふに至るべし故に此の如き際は五十倍硼酸水の濕布繙帶を施し直ちに醫師の診察を乞はしむべし

鼠蹊脱腸及び陰囊水腫

鼠蹊部に存する腹筋の間隙所謂鼠蹊管よりして腸管が陰囊内若しくは大陰管内に脱出することあり之れを鼠蹊脱腸と云ふ

恰かも臍脱腸に於けるが如く兒の啼泣其他に由りて腹壓亢進するときは其膨隆増大し腹壓止むか或は其部に壓迫を加ふるときは還納す然れども又た時として倏頓して復納せず腹部膨滿嘔吐吐蝨等の症狀を發する事あり又た男兒に於て陰囊内に漿液潑溜し爲めに陰囊著しく膨大して外見上恰かも脱腸に類する事あり之れを陰囊水腫と云ふ此者は壓迫を加ふるも還納せず又た腹壓に由りて増大する事なきに由り鼠蹊脱腸と區別する事を得べし

處置、は兩症共に醫師の診察を乞ひ其指揮を受くべきものにして産婆は之れを處置する事能はず

初生兒の消化器障害

○初生兒嘔吐ノ處置如何
○初生兒嘔吐ノ原因及
ビ處置ヲ記セヨ

無情なる子守は兒の啼泣を止めんとして手當り次第兒の口内に含ませしめる事あり子を持つる親たち宜しく注意すべし

初生兒の消化不良は甚だ多く知らぬ間に大事に陥るこゝとあり最も注意すべし

人工營養法による兒殊に未熟兒は常に此の症を起し易く成熟初生兒と雖も乳汁の不良過度の授乳感冒等に由りて本症を起す事多し

初生兒の消化器は發育未だ完成せず胃の如きは其位置鉛直にして屈曲少きが故に哺乳量少しく多きに過ぎ或は身體の動搖咳嗽等によりて吐乳する事あれ其他の症狀を交へざれば大して差支なし然れ共頻々嘔吐を發し嘔氣を伴ひ顔面蒼白さかり食慾減じ腹部の膨滿を來し屢々啼泣し下痢を發し大便は綠色を帯び中に黃白色の凝塊を混じ甚だしき臭氣を有するに至らば是れ急性消化不良の徴にして斯るときは屢々眼球上竇全身の痙攣を發する事あり慢性のものにありても吐乳食慾減退腹部の膨滿等の症狀ありて多くは便秘を來し漸次貧血に陥り全

身の衰弱を來すものごとす
 處置、元より醫師に托すべきものかれ共産婆は豫防法に注意し人工營養法を行へる場合には牛乳の消毒稀釋法哺乳の回数及び分量に注意し器具類の消毒を嚴重に行ひ出來得べくば母乳若しくは乳母の乳を與ふる方針を取り常に大便の性質其他に注意し已に本症を發するときは早速醫治を乞はしめ便秘するときは等分のグリセリン水三五乃至八五を浣腸すべし

吃逆

兒の身體を冷却するか或は一度に多量の乳を與ふるときは屢々吃逆を生じ容易に止まず飲みたる乳を吐出する事あり然るときは兒の身體を暖め或は徐々に乳を與ふるを良しす尙ほ止

まざれば少量の砂糖湯を與ふるを良しす而して尙ほ治せざれば醫師の治療を乞ふべし

初生兒黃疸

○初生兒黃疸ノ經過如何
 ○初生兒黃疸ニ就テ記セ

大人黃疸の糞便は灰白色なり初生兒のは黄色なり

大人に於ける黃疸症は主もに肝臓の疾病に由りて發するものありと雖も初生兒に在りては然らずして之れを發する原因未だ明らかならず唯初生兒の多數に於て本症を發するを以て此名あり而して虚弱なる初生兒、殊に未熟兒、梅毒性初生兒、生後の看護不良なるものは本症を發し易くまづ分娩後三四日より全身の皮膚に黄色を呈し眼結膜までも黄色となるべし尿は變化せざる事あるも多くは亦た黄色となり糞便は通常其の色を變せず之れ大人の黃疸と異なる所あり此の如くして兒の

状態良好あるときは六日乃至十日に至りて自然に消散し時としては二三週間持續する事あり
 處置、特に醫治を乞ふの要なく身體を清潔にし食餌に注意し室内の空氣を清良ならしめ身體を温保し便通を佳良ならしむべし若し黃疸を呈せると同時に高熱りんじゆう嫌乳下痢其他甚だしき不安の状態を呈する事あらば醫師の診察を乞はしめざるべからず

乳兒脚氣

母若しくは乳母等小兒に授乳するもの若し脚氣症に罹るときは其血液中存在する脚氣毒は乳汁に混じて小兒の體中に移り行き兒も又た脚氣を患ふるに至るべし之れを乳兒脚氣と云

○脚氣母乳ニ因ル生
 兒病的多數ヲ記シ人
 工營養ノ方法ヲ述ベ

日本には此の病氣
 甚だ多し産婆の注
 意甚だ肝要なり

ふ然る時は兒の身體は目を追ふて衰弱し頻りに吐乳し聲音嘶
 嘎し脈膊呼吸頻數となり排尿減少し下肢の浮腫を來し口唇及
 び四肢の末端紫藍色(チアノーゼ)となり屢々綠色の便を洩ら
 し常に呻吟若しくは啼泣して授乳を廢するにあらざれば病勢
 は増進して遂には死に至るべし故に産婆は妊婦の脚氣症を患
 ふるものに出遇はゞ分娩後は必ず乳母又は他の方法により營
 養すべきを諭し若し授乳中脚氣に罹り兒が前記の症狀を發
 する場合には直ちに授乳を廢し他の健康ある乳母或は牛乳に
 より營育せしめ速かに醫師の診察を受けしむべし

メレナ一名黑色病

甚だ稀ある疾病なり、分娩後第二三日の間に發し腸胃の出血

を來す病にして多量の血液を下泄し血液を嘔吐し或は吐血を缺く事あるも劇しき貧血の症状を呈し顔面蒼白脈膊微細頻數ごかり皮膚厥冷して遂に死に至る産婆若し前記の症状を認むるときは直ちに醫師の往診を乞はしめ腹部に氷菴法を行ひ寒冷ある乳を與ふべし

初生児皮膚の疾病

初生児に來るべき皮膚疾患は糠粃疹、汗疹、濕疹、水疱疹等あり

糠粃疹、分娩後一週日乃至四週日にして前頭或は顛頂部の皮膚に灰白色鱗屑狀又だ痂皮狀のものを生ず之れ即ち糠粃疹あり此者は清潔法の不充分あるに基き皮脂の分泌過多あるに由

るが故に常に頭部の皮膚を清潔にして入浴の際石鹼水を以て洗滌すべし

既に之を生すれば先づ阿列布油を塗りて軟げたるのち石鹼水を以て之れを洗ひ亞鉛華濃粉を撒布し數日間之れを反覆すれば治癒すべし

汗疹、汗疹は温保に過ぐる爲め胸部顔面頭部四肢等の皮膚に生ずる小隆起疹を云ひ若し之を發する時は衣服を減じ室内の温度を適當にし亞鉛華濃粉を撒布すれば日からず治癒に至るべし

濕疹、小兒に最も屢々來る皮膚病にして殊に多く兩皮膚面の接觸する部及び頭部に生じ不潔竝に持續性の刺戟は其の主なる原因なり本症に急性慢性の二種あり

○初生児陰部癰腫ノ原因及其治療法ハ如何

急性のものは其部の皮膚面一般に赤色腫脹を呈し所々透明の水液を含める小水疱疹を生じ瘙癢甚だしく次で水疱は終に破潰して帯白黄色若しくは褐色の痂皮を生じ或は糜爛面を作る慢性のものにありては容易に治せずして皮膚は肥厚し頭部の如きは爲めに脱毛する事少からず（但し濕疹に由る脱毛は再び發毛するものなり）此の濕疹の分泌物は身體他部に附着して同一の病機を傳播し廣く蔓延する事あり

處置、こしては身體を清潔ならしめ刺戟をさけ速かに醫療を乞はしむべし而して患部に觸れたる手指は消毒を怠るべからず

水疱疹、單純性水疱疹、梅毒性水疱疹の二種あり單純性のものにありては中に水様透明の液を含める大水疱疹（豌豆大）を身

體諸部に發し梅毒性のものにありては遺傳性梅毒を有する兒に來るものにして外觀上單純のものゝ異なる事あり雖も其主として發生する所は手掌足蹠にして時こしては大腿胸部等に生ずる事あり尙ほ詳細は遺傳梅毒の條下に述ぶべきを以て茲に略す

處置、こしては身體を清潔に保ち速かに醫療を請はしむ且つ濕疹と同じく之れに觸れたる手指は消毒を怠るべからず

兒斑

兒斑とは本邦小兒の皮膚殊に臀部腰部背部に存する藍色の大小ある斑點にして皮膚中に色素の集まれるに由りて生じ六七歳に至れば自然に消失するものなり此の者の生ずる原因は明ら

かみらず又た何の意味なきものにしてたごへ大あればこて意に介するに足らず

遺傳微毒

既に妊娠異常の條下に述べたるが如く男女一方に微毒を有するときは病毒は兒の體中に移行し多く妊娠の中絶を來し流産するか或は幸に妊娠末期に達し生きて生まるゝも兒は速かに死するか或は虚弱にして全身に微毒固有の症狀を呈すべし之を遺傳微毒と云ふ
即ち兒の手掌、足蹠及び鼻腔、腋窩、頸部、鼠蹊部等に許多の水疱を有し身體浮腫狀を呈し腹部膨滿して肝臟脾臟は著しく腫大し(殆んど二倍に達す)皮膚は一般に汚きたく皺襞を現はし

殊に口圍、手掌、足蹠等は銅色を帯び屢々所々に赤色の斑點を認め表皮剝離し易く胎盤は大にして殆んど二倍に達する事あり兒は多くは生後八日乃至二週間以内に死亡す幸に死亡を免るゝも鼻粘膜は屢々腫脹し鼻孔閉塞し多量の膿様分泌物あり適當の醫治を加へざれば完全に生育する事能はず死して生れたるものは以上の外身體膨大し皮膚は汚穢銅色を呈して所剝離し筋肉甚だ軟弱あり
處置、直ちに醫師の診療を乞ひ身體を温保し看護に盡力すべし

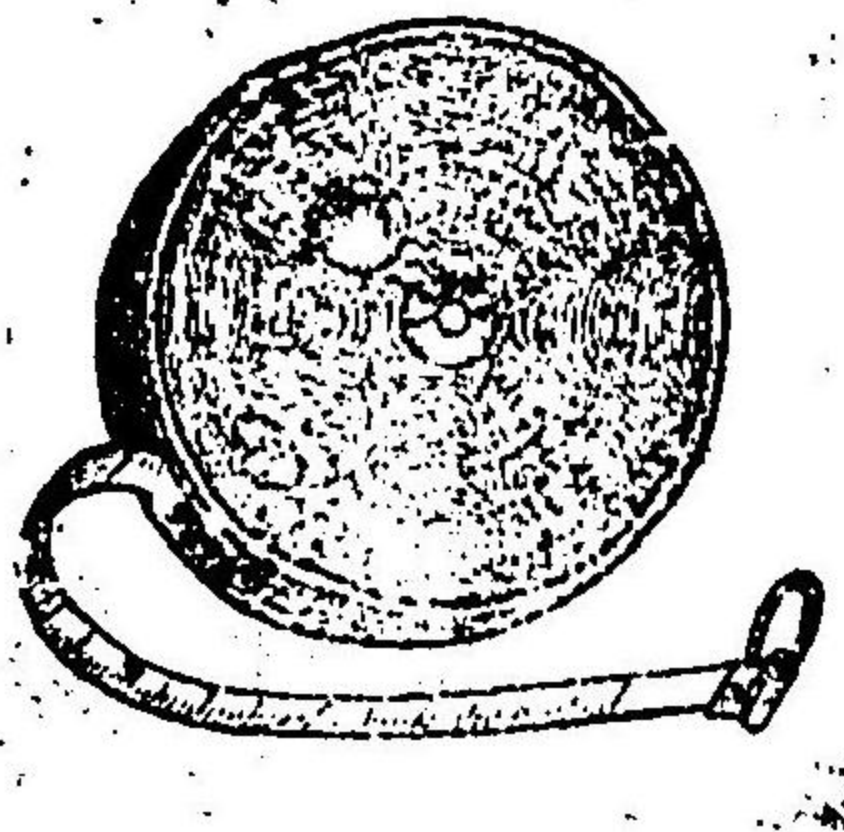
醫師は母兒に嚴重なる軀微療法を行ひ治癒をはかるべし

第十三章

産婆に必要な看護法の概要

産婆が妊産婦及び初生児の異常を未發に防ぎ或は既に發したる異常を正規に導かんとするには産婆學に於て論述したる種々の處置を行ひ或は醫師の命に由りて臨機^{りんき}の處置をせし或は家人に諭して看護をなさしめ時としては自から妊産婦及び初生児の傍らに看護^{かんじ}して看護又は種々の取扱をなさざるべからざる場合も生ずべし此大切なる任務を全ふせんには既に産婆學上論述したる處置のみにては尙ほ未だ缺點なき能はず是れ産婆に看護法の必要ある所以にして是れより以下順次看護法の概要を論述せん

第五百七十七圖



第百〇五節 産婆に必要な數量

メートル尺を示す

産婆に必要な數量は尺度重量液量なり

(一) 尺度 尺度は通常萬國通用の「メートル」尺度を用ひ我邦の曲尺をも併用す一メートル(記號一迷)は我が邦曲尺の三尺三寸強に當る今各位に於ける比較を示せば左の如し

- 一メートル(記號一迷) 曲尺三尺三寸
- 一デシメートル(記號一) 曲尺三寸三分
- 一センチメートル(記號一厘又は一仙迷) 曲尺三分二厘
- 一ミリメートル(記號一耗又は密迷) 曲尺三厘二毛

〔記號のものは餘り必要ならず〕

- 一デカメートル(即ち十迷) 曲尺三丈三尺
- 一ヘクトメートル(即ち百迷) 曲尺三十三丈
- 一キロメートル(即ち千迷) 曲尺三百三十丈

但し一迷以上の尺度は通常必要あり

(二)重量及び液量、重量は通常萬國通用の「グラム」(記號五)を用ひ我邦の貫匁量をも併用す一瓦は我邦の二分六厘六毛に當る今各位に於ける比較を示せば左の如し

- 一グラム(記號一瓦) 二分六厘六毛
- 一デカグラム(一瓦の十倍)(記號一尅) 二匁六分六厘
- 一ヘクトグラム(一尅の十倍)(記號一匁) 二十六匁六分
- 一キログラム(一匁の十倍)(記號一尅) 二百六十六匁
- 一デシグラム(一瓦の十分の一)(記號一尅) 二厘六毛六糸

一センチグラム(一尅の十分の一)(記號一尅)二毛六糸六
 一ミリグラム(一匁の十分の一)(記號一尅)二糸六六
 而して通常一グラムを略して單に一〇十瓦を一〇〇〇記し
 一瓦以上は尅尅と云はずして十五百瓦と云ひ千瓦以上なるこ
 きは幾基と云ふ例之は二千瓦を二尅或は二基と云ふが如し我
 が國の一匁は三五と七百五十六尅餘に相當するを以て通常一
 匁を四瓦と見て大差あるべし
 液量を測るには通常瓦を用ひ或は滴數匙數を以てす我が國の
 石斗升合勺等も又た併用せざるにあらず今其比較を示せば左
 の如し而して常に液量計を以て側る

- 一尅又は一リートル 五合五勺四倍
- 一升 一リートルト八百〇三五 (大凡二リートル)

一石 百八十リートル
 一合 大瓦二百瓦

滴量は其測るべき液體の種類により一様あらざるも概して一瓦(一、〇)に相當する滴数は左の如し

- 蒸餾水 十八滴
- 葡萄酒(赤酒) 十八滴
- アルコール 二十四滴
- ホフマン氏液 二十五滴
- 油類 二十滴

而して滴数を記するには通常略して幾mとm字を書す
 匙量も又た量るべき物品の性質により異なれども概して左の如し

「プロセント」といふことを記しよ

- 一茶匙
 - 液體 凡四瓦
 - 食鹽砂糖類 凡二瓦半
 - 散藥類 凡二瓦
- 一食匙
 - 液體 凡十五乃至二十五
 - 散藥類 凡五瓦乃至十瓦

以上の外通常藥品其他の比例を示すに「プロセント」(記號%)ある名稱を用ゆ%とは百分中に幾何と云ふの意にして即ち一%は百分中に一(即ち百倍)二%は百分中に二(即ち五十倍)を含有する事を示すものにして五%石炭酸水百瓦と云へば水九十五瓦に石炭酸五瓦を溶解したるもの百瓦を云ひ即ち二十倍の石炭酸水なる事を示し十%の撒里失兒酸澱粉と云へば九十分の澱粉中に十分の撒里失兒酸を含有せる事を示す他は推し

て知るべし

第百〇六節 患者の監視及び報告

産婆が妊産褥婦及び初生児に看待するや常に之れが臥床に於ける状態を監視して一切の出来事を詳細に記載し之を醫師に示し尙ほ足らざる所は醫師の間に應じて明瞭なる答をなさざるべからず總て臥床に於ける妊産褥婦及び初生児の状態は其障碍の如何により差別あるも産婆は先づ身體各部に於ける變化に注目して之を検査するを必要とす

皮膚、血液成分に異状あるか或は他の障碍により皮膚は其色澤を變ずるが故に皮膚の色に注意するを要す即ち血液に乏しければ蒼白色を呈し多血なるときは赤色を呈す其他黃疸に罹

れる時は黄色を現はし血液循環器及び呼吸器に障碍あるときは四肢の末端口唇等藍紫色所謂チアノーゼを呈すべし其他皮下に水分滲漏するときは浮腫を呈す又皮膚は屢々種々の發疹を來すものにして或は單に斑紋をかすあり結節状を呈し透明ある液を含む水胞膿を含む膿胞を形成し或は隆起せる大なる斑を呈する事あり然るときは之れを丘疹と云ひ表皮剝脱して濕潤するときは潰瘍と稱す而して種々の皮疹は蚤嚙痕と誤り易き事あり之を區別せん欲せば指を以て之を壓迫すべし皮疹は指壓に由りて赤色消退するも蚤嚙痕は赤色の小斑にして中央に一個の咬傷あり指壓に由りて赤色の消ゆる事なし其他皮膚は溫暖ある事あり寒冷ある事あり乾燥せるあり濕潤せるあり或は全身に發汗し或は一部に限局して發汗するあり殊

一側の頭痛なる時は偏頭痛といふ

眼球上竄は危険に頻せる徴なり

に夜間睡眠中に冷汗を流し甚だ不快の感を與ふるものあり之を盗汗と云ふ

頭部及び顔面、頭部は灼熱する事あり或は厥冷する事あり疼痛を訴ふるあり然るときは通常頭痛と稱す此頭痛は全頭部に亘るものあり或は前頭部後頭部又は頭部偏側に限局する事あり又た時としては頭髮の脱落著しき事あり

顔面は或は赤色を呈し或は蒼白色を呈し筋肉痙攣を來し或は顔面半側の麻痺を來す事あり眼は透明なる事あり濁濁する事あり或は赤色蒼白色黄色等に變ずる事あり視力は時として減弱し眼前に光火の閃くを認むる事あり又た視線の斜めあるを斜視と云ひ眼の上方を熟視するにより俗に云ふ白眼を呈する事あり之を眼球上竄と云ひ屢々初生兒の腦病に來る

鼻腔は濕潤するあり乾燥するあり鼻汁は粘液狀なるあり膿様あるあり又た屢々鼻腔より出血す之を衄血と云ふ初生兒は又た鼻のみにて呼吸し口より呼吸する事を知らざるが故に鼻腔閉塞するときは大に呼吸困難を來すべし斯の如き場合は呼吸と共に鼻翼の動くを見る之を鼻翼呼吸と云ふ
口唇は蒼白色なるあり赤色なるあり呼吸困難あるときは「チアノーゼ」を呈す又た濕潤し或は乾燥し屢々龜裂を生じ痂皮を被むる事あり

舌は乾燥する事あり清らかあるあり或は黒色白色の苔を被むり或は潰瘍又は龜裂を生じ出血する事あり齒齦及び口腔粘膜炎亦た同様の變化を來し咽頭も亦た腫起發赤する事あるにより屢々検査するの必要あり

凡て熱性患者の舌は乾燥し舌苔を被むるべし

耳には屢々濕疹を認め又た耳漏を認むる事あり而して熱あるもの又は貧血せるものは耳鳴、聽力減退即ち重聽を訴ふるものごとす

胸部、胸部に於て注意すべきは呼吸状態にして其の呼吸運動は左右同一なるや否やを検し尙ほ呼吸の数を檢して其の呼吸困難の状態を知らざるべからず其の検査法即ち呼吸の測定法に就ては別項詳論する所あるべし呼吸に次で注意すべきは咳嗽及び咯痰なり咳嗽は甚はだ頻々あるあり稀れなるあり咳嗽と共に痰を咯出するありせざるあり其の咳嗽するも痰を出さざるものを乾咳と云ふ、痰検査法は排泄物検査の條下に論述すべし

音聲は清朗あるあり鈍濁するあり或は嘶嘎して時こして全く

啞する事あり

腹部、腹部に就ては其柔軟なるか硬く緊張するか或は陷没するか膨大するか疼痛の有無を檢す但し心窩に疼痛あるは多くは胃病にして下腹部の痛むは生殖器竝に腸の痛み即ち疝痛なりと知るべし

便通は少量あるあり多量あるあり疼痛を伴ふものあり其検査法は排泄物検査の條下に於て論ずべし而して腸より出血する事あり然るときは之を下血と云ふ

尿に就ては其の分量及び性質を檢せざるべからず一晝夜に排出する尿の量は千乃至千五百瓦位なるも時こして非常に減ずる事あり即ち腎臓病、心臟病等にして尿量の非常に多量あるは糖尿病及び尿崩症等なり而して尿の色は通常淡黄色にして

透明あるも或は暗褐色となり或は血液を混じ大に濁濁する事ありて屢々異常性分を混じ其性状を異にする事あり其検査法に就ては別項詳論する處あるべし

四肢、四肢は屢々運動障礙を來す事あり或は知覺運動共に麻痺する事あり偏側の上下肢に運動麻痺を起したるものを半身不隨と云ひ此際筋肉は削瘦し或は腫大する事あり又た兩下肢の運動麻痺するを截癱と稱し脊髓病に來る

以上身體各部に就て注意し少しにても普通人と異なる點を見出さば一々洩さず記載し置き尙ほ體溫脈膊等を併せ檢せざるべからず

産婆は妊産婦を看護するに當て單に病狀を監視するに止まらず其心を慰め其意に逆ふ事なく同時に醫師の命せる或は自

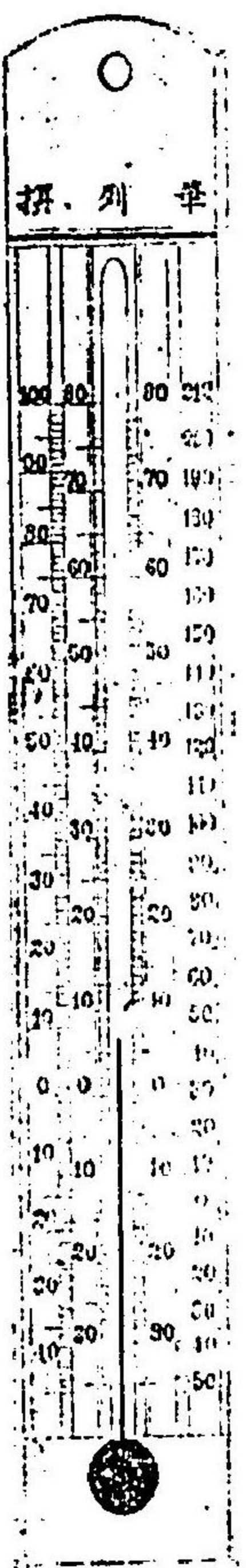
己の習得したる處置即ち治療介輔の任を全ふせざるべからず

第百〇七節 體溫測定法

體溫を測定するを檢溫と云ひ檢溫は醫師及び産婆の診斷上甚だ必要あるものにして之を測定するには常に檢溫器を用ゆ

檢溫器は密閉せる細き硝子管の一端稍々膨大せるものに水銀

第二百五十八圖 三氏の寒暖計(檢溫器)を比較したるものを示す



を容れ其周圍に度目を刻みたるものにして温熱に逢へば水銀膨脹して柱狀に管内に昇り寒冷に逢へば收縮して其水銀柱の下降する装置なり而して檢溫器に三種あり攝氏、華氏、列氏

檢溫器の圖は産婆携帶器具のうちにあリ檢溫器は一に寒暖計とも稱す

是かり通常吾人の使用するは攝氏にして本書中記載する處の温度は皆攝氏を以て示したり
 今三種の檢温器の異なる點を擧ぐれば攝氏に在りては氷點即ち水の氷結する温度を零度ぜろどとさし水の沸騰點を百度と定め列氏は氷點は零度沸騰點を八十度と定め華氏は氷點を三十二度沸騰點を二百十二度と定めたり故に攝氏又は列氏の檢温器にて測りたる温度を華氏の度に改め華氏の檢温器にて測りたる温度を攝氏或は列氏に改めんと思はゞ左の運算を行ふこと必要なり
 攝氏の度を列氏の度に換算くわいさんするには攝氏の度を五にて割り四を乗ずべし即ち左の如し

$$\text{攝氏}(20(\text{度})\div 5)\times 4 = \text{列氏}16(\text{度})$$

攝氏二十度は列氏の十六度に相當す

攝氏の度を華氏の度に改算するには攝氏の度を五にて割り九を乗じ之れに三十二度を加ふべし左の如し

$$\text{攝氏}(20(\text{度})\div 5)\times 9 + 32 = \text{華氏}68(\text{度})$$

即ち攝氏二十度は華氏六十八度に相當す

列氏の度を攝氏の度に改算するには列氏の度を四にて割り五を乗ずべし左の如し

$$\text{列氏}(16(\text{度})\div 4)\times 5 = \text{攝氏}20(\text{度})$$

即ち列氏の十六度は攝氏二十度に相當す

列氏の度を華氏に改算するには列氏の度を四にて割り九を乗じ更に三十二度を加ふべし左の如し

$$\text{列氏}(16(\text{度})\div 4)\times 9 + 32 = \text{華氏}68(\text{度})$$

即ち列氏十六度は華氏の六十八度に相當す
華氏の度を攝氏の度に改算するには華氏の度より三十二度を
引き九にて割り五を乗ずべし左の如し

$$\text{華氏}(68(\text{度})) - 32) \div 9 \times 5 = \text{攝氏}20(\text{度})$$

即ち華氏六十八度は攝氏二十度に相當す

華氏の度を列氏に改算するには華氏の度より三十二度を引き
九にて割り四を乗ずべし左の如し

$$\text{華氏}(68(\text{度})) - 32) \div 9 \times 4 = \text{列氏}16(\text{度})$$

即ち華氏の六十八度は列氏の十六度に相當す

體溫は既に生理等に於て論述したるが如く健康人にありては
攝氏三十六度五分より三十七度二三分にして朝は降り晩は昇
り日差を現はす。雖體溫調節作用の爲めに一度以上の日差を

稽留熱
弛張熱
間歇熱
回歸熱

現はすものにあらず故に若し一度以上の日差を示すときは病
的みの見做すべきものにして甚しきに至りては攝氏四十一度以
上に昇り或は之に反して攝氏三十六度以下に降る事あり是れ
多くは衰弱の甚しきものに来り危険の徴候なり
體溫即ち熱は其昇降する模様により數様に分たれ體溫昇り一
定の度に數日間連續し其日差少なき(一度以内)ときは稽留熱
と稱し日差甚だしくして一度以上數度なるときは弛張熱と
稱し常溫と高熱と相交代するもの之を間歇熱と云ひ高温度
に於て數日間稽留し次で數日間常溫となり再び數日間稽留熱
を現はし次で數日間常溫に復する等相反覆するものを回歸熱
と云ふ
(檢温の方法)檢温するには通常腋窩に於てし又時として口腔

肛門内に於てす腋窩に於て檢するには先づ腋窩の乾濕を檢し發汗等の爲めに濕潤せるときは之を清拭し檢温器の水銀球部を深く腋窩内に挿入し上膊を側胸部に緊接固定せしめ前膊を前上方に屈め摩擦を防ぎ衣服を以て被ひ然る後時計を出し十分間乃至十五分間の後檢温器の水銀柱最上部の示す度目に就て算すべし口腔にては必らず舌下に水銀部を挿入し口唇を閉ざし鼻より呼吸せしめ肛門腔等に於ては檢温器の水銀部に油を塗り三乃至五仙迷だけ徐々に腔内に挿入して檢すべし但し時間は五分乃至十分時にて足れり何となれば口腔肛門腔等にありては腋窩の温よりも通常五分乃至一度高き故水銀は早く上ればなり而て此等の部に於て檢したる温度は其旨明記せざるべからず且つ口腔肛門腔等に於て檢温したるときは後に嚴

重の消毒を行ふべし、檢温は唯だ一回之をなしたるのみにては單に熱の有無を知るに止まり其價值少なきを以て輕き病にありても一日三回重き病人にありては二時間毎に檢温し其昇降に變化を來したるときは醫師に報せざるべからず體温の昇降を一日瞭然りょうぜんたらしむる爲めに之を温度表に記入し同時に呼吸脈膊等も記入するを要す

體温表(温度表)は縦横に細線を引きたる紙にして其縦線の間には檢温の月日及び朝晝夕等を記入すべき欄らんを設け横線には體温度數を示し同時に脈膊呼吸をも記入し得らるゝ如くせられたり今之を記入せんには其測定したる度數に相當する横線上に鉛筆を以て丸點を附し點と點との間を更らに細き直線にて連續せしめて弧線こせんを作り體温と呼吸と脈膊は鉛筆の色を異

にして明らかならしむ即ち體溫は赤色呼吸は黒色脈搏は青色の鉛筆にて書するが如し(別紙體溫表を参照せよ)檢溫器は正確にして平等に昇降するものからざるべからず且つ時々變化を來す事あるを以て屢々標準檢溫器(一名模範檢溫器)と對照して其の正確あるや否やを檢せざるべからず而して可及的留點(一名示極檢溫器)檢溫器を使用すべし留點檢溫器とは一旦昇りたる水銀柱が其昇りたるまゝ留まりて強く振動するにあらざれば再び下降せざるものを云ふ故に若し留點檢溫器にあらざるときは腋窩より檢溫器を取り出す以前に度目を算せざれば腋窩を離るゝと同時に水銀は外氣の冷かなるに觸れ速かに下降すべし

場合により標準檢溫器と對照する事能はざるときは健康體

(自身)の腋窩の體溫を毎日時を定めて五乃至七日間檢溫し其平均溫度を求め若し攝氏三十七度又は僅かに其れ以下あるときは其檢溫器の正確なるを現はすものとす但し留點檢溫器にて檢溫したる後は之を強く振動して水銀柱を下降せしめ置かざれば第二回の檢溫に際し間違を生じ易し

第百〇八節 脈搏の検査法

脈搏は既に生理學に於て述べたるが如く心臟の縮張に由りて發する動脈の搏動を云ふものにして健康の大人に在りては一分時平均六十五乃至七十二至初生兒に在りては一分時百二十なり而して女子は男子より其數多く身體小なるものは大あるものより多し男女共婚嫁期は其數を増し老年に至れば減じ一

日中朝は夕よりも少なく熱發其他心悸の亢進する病は勿論飲食後、運動、精神感動等は其數を増すべし

脈搏を検するには通常腕關節の少しく上方拇指側に於て撓骨動脈上に手指を壓抵して檢す此の部に於ては撓骨動脈が皮下に現るゝを以て検査に便なり其他已むを得ざる場合には頸動脈、足背動脈等に於て檢する事あり

先づ被檢者を平臥せしむるか又は坐し或は椅子に寄りしめ其の精神を安靜ならしめ檢者は被檢者の手と反對側の手の示中環指を撓骨動脈上に壓抵し拇指を其の背側に置き傍ら時計を出して其の脈搏の一分時に於ける數を檢すると共に脈の性質を注意して檢し體温表に記入すべし此際被檢者の手の振動を來さざる様注意せざれば其脈の數性質等に誤りを生じ易し、

脈搏の數及び性質は心臟動作の状態を示すものにして其の遅速は心臟收縮の遲速を示し其の強弱大小は心臟より血管内に流入する血液の多少を示し心臟收縮の不同或は休止は脈搏の不調及び休止を現はす之れを脈の結代と云ふ而して脈搏の微細なるを絲狀脈と云ひ甚はだ微弱にして手に感ぜざるを不感脈と云ふ

第百〇九節 呼吸の検査

平均十八

健康の大人に在りては一分時間十六乃至二十四にして初生兒は三十回位あり而して呼吸器に障礙あるものは甚しく其數を増し或は減じ呼吸困難甚しきものにありては咽喉を鳴らす之を喘鳴と云ひ斯の如きに至れば吸氣の際には心窩、鎖骨上窩等

吸引せられて陥没^{かたじ}す其他健康人に在りても飲食物運動精神感動等に由りて其數を増し睡眠中は減少す呼吸の數は又た意識によりて増減する事を得るが故に呼吸を検査するに當りては被檢者に之れを知らしむる事あく時計に照して一分間に於ける胸廓の運動を検すべし若し胸廓の運動を見難きときは手掌を平坦にし徐々に心窩部に貼じて其運動を検すべし而して一分時間に於ける呼吸數を得ば之を體温脈搏と共に體温表に記入すべし

以上述ぶる脈搏及び呼吸は通常檢温と同時に進行ふべし

第一百節 病室及び病床の選定

妊産褥婦及び初生兒の異常即ち病を發したるとき臥せしむべ

き室及び床は既に正規分娩取扱法の條下に論述したる産室及び産床と大差之れなし、要するに空氣の流通好く寒からず暑からず充分の日光を得られ且つ狹隘からざる様注意し殊に其換氣法^{くわんきほつぽ}に注意すべし何とあれば病室を密閉するときは室内の空氣は人の呼吸に由りて呼出したる炭酸瓦斯の爲めに有害となり患者は頭痛、眩暈を訴へ甚しきに至りては窒息死を來す事あればなり且室内は清潔に保ち患者の排泄物等の爲めに臭氣を發する等の事あらば速かに戸障子^{しじょうし}を開きて新鮮の空氣を流通せしむべし氣候寒き時は室内を暖むるに暖爐又は火鉢を用ゆべしと雖も多數の火鉢を室内に置くときは炭酸瓦斯を發して害をなすべし病室内の溫度は寒暖計を懸けて常に測り攝氏の十五度乃至二十度にあるを良とす故に夏季暑き時は窓の

外に幕を張りて日光の射入を避け尙ほ氷を鉢に盛り室内に置き冷氣を取り或は庭前に水を撒き水を浸したる布片を窓の外に吊り下げなごして冷かからしむるを良し一般に云はゞ日光の室内に射入するは患者の鬱を散じ心を快活ならしむるの益あれ共夏季餘りに暑きときは已を得ず之を覆はざるべからず又た精神に異常あるもの脳病及び眼病患者等の爲めには日光の直射を避け病室内は少しく暗くせざるべからず

臥床は通常蒲團を重ねて下に敷けども蒲團を直接に疊の上に敷くは衛生に適せずさりて日本固有の習慣なれば一朝にして之れを洋風に改むるは容易の事にあらざるあり然れ共産科手術を行ふ者其他産褥熱の如き熱性病者には看護上よりするも衛生上よりするも寢臺を用ひざるべからず、寢臺は木製よ

りも鐵製を選び殊に其脚に車を附けありて何れの場所にも運び又た方向を變じ得るものを良し大人には長さ六尺廣さは三尺高さは二尺五寸位なるもの最も適當にして上面には毛を入れたる蒲團又は藁蒲團を敷き白色の敷布を以て被ひ排泄物等にて汚染の憂あるものには敷布の下に護謨布を挿むを良しす而して上覆は毛布又は輕き蒲團を用ひ患者の上覆との間にも亦た白色の敷布一枚を挿み是れを以て襟に當る部分を包むべし

重症患者殊に腹部に疼痛あるもの衰弱甚しきものにありては天井より紐を下して蒲團を釣るを宜しす或は離被架を以て腹部を圍み其上を蒲團を以て被ふを宜しす

重症患者殊に産褥熱患者の臥床の交換を行はんとするには成

臥床交換

病室及び病床の選定

三六三

るべく身體の動搖を避くるの必要あるが故に患者をして仰臥位にあらしめ産婆は患者の兩手を以て自分の頸を抱か^だしめ兩手を以て患者の背部及び大腿部を支へて之を抱き起し介者をして手早く臥床を交換せしむべし或は介者をして仰臥せる儘患者の頭部及び肩胛部を支へしめ産婆自ら臀部を揚げ其間に他の介者をして手早く交換せしむ

衣服交換

患者の衣服は軽くして暖かに且つ究屈からざるものを選び屢々交換すべし殊に汚染したる時は其都度交換せざるべからず之を交換するには重き病人にありては先づ靜かに患者の上半身を起すか或は側臥せしめ交換すべき衣服を巻きて(側臥せしめたる時は縦に上半身を起したる時は横に)其下に挿入し此の際もこの衣服を手早く抜きて下に巻き込み新らしきもの

褥瘡
産褥熱患者に褥瘡を來すと多し

を半ば着せ次で兩脚及び臀部を持ち揚ぐるか或は反對側に臥せしめ前と同様に交換し此際手早くもこの衣服を抜ざるべし重症者殊に衰弱せる病人にして久しく同一の臥位を取るときは薦骨部、肩胛部、大轉子部等常に壓迫せらるゝ部分は其壓迫の爲めに血液の流入障礙せられ其部の皮膚は赤色となり遂に壞死して腐敗するに至る之を褥瘡^{おそきま}と云ふ斯の如き褥瘡を豫防するには常に臥床に皺襞を造らざる様注意し且つ時々患者に臥位を轉ぜしめアルコールを塗るべし若し既に褥瘡を發したるの疑ひあらば直ちに醫師に報告して治療を乞はざるべからず

枕

枕は日本婦人の木枕を廢して軟き括り枕を用ゆるを良とす殊に重病者に於て然り若し幅廣き西洋風の枕にして羽毛を入れ

たるものを用ゐ得るときは甚だ便利なり而して枕には常に白色の布片を以て上覆をなし時々洗濯を行ふべし

第一百一節 臥床に於て飲食物を與

ふる注意

仰臥のまゝ飲料を與ふるには水滴又は急須又は茶匙を用ひて與へ食物を與ふるには箸よりは匙を用ゆる方便利にして總て安靜を要するものは食事或は藥を與ふるときは雖も起坐せしむべからず素より斯の如き場合に於ては大小便の通利も臥床中にて便器を挿入して受けざるべからず

第一百十二節 用藥法

病の時機を失はず適當の方法を以て藥を使用するは治病上誠に緊要の事あり而して藥は通常病人の枕元に置き他人の藥と間違はざる様注意せざるべからず然れ共毒劇藥は決して病人の傍らに置かざる様心懸くべし藥の用法に二種の區別あり一を内服藥と云ひ一を外服藥と云ふ
藥は醫師の命に従ひ一定時毎に一定量を與へざるべからず若し内服藥外用藥共に之を用ゆるものにおいて能く其藥用箋(レツテル)を熟讀したる後其用法を誤らざる様注意して與ふべし若し之を誤り其の爲めに障害を來せるときは看護者は其罪を免かるゝ事能はざるものことす

第一百十三節 内服藥

抱き起すと害ある
場合あり故に重病
者に就ては凡て醫
師の指押を仰ぐと
肝要なり

内服薬とは飲食物の如く口腔を経て胃に達せしむるものにして水薬、乳劑、油滴劑、等の液状をなせるもの及び丸薬、錠劑の如く固形體をなすもの竝に散薬の如く粉末状をなすものあり之を患者に内服せしむるには左の注意を要す
重病者或は衰弱したる患者にありては患者の枕の下に手を送りて抱き上げ半座の位置をなし或は全く座せしむべし（若し側臥せる患者に水薬を與ふる場合には硝子管を以て吸はしむるもよし）而して患者睡眠中なるときは強いて喚び醒さざるを良しすれども醫師より特に時刻を定められたるもの及び輕症患者に在りては此限りにあらず
患者に薬を與ふるには誠實にして懇篤あるを要す而して初生兒及び精神に異常あるもの等にて服薬を拒み口を開かざるも

のには先づ談話を試み或は鼻を摘むべし然るときは餘義なく口を開くにより此際手早く薬液を口内に送るべし然れ共鼻を摘むも尙ほ堅く齒を喰ひ縛り僅かに齒列の間より呼吸するものには開口器を用ゆるの外なし或は一旦薬を口にすると再び吐き出す事あるときは暫く上下の口唇を押ゆるか或は毎回薬用後に談話をあさしむべし眞に嚥下するにあらずれば言語を發する事能はざるが故に斯くせばしむを得ず飲み下すものなり水薬及び乳劑は多く瓶中に貯ふるものにして往々沈澱物を生じ或は分離して上層と下層と其成分を異にする事あるが故に服薬せしむる際は必らず振盪し薬匙又は藥杯に分ちて與ふべし然れ共人事不省に陥れる患者には水薬を急に口中に注入すべからず誤つて氣管内に入るの恐あればなり而して多くの

薬劑は内服後不快の味を残し或は薬の爲めに齒牙を汚染し或は損害する事あるを以て斯の如き薬液を内服せしめたる後は毎回冷水又は温湯を以て含嗽せしむべし油劑を與ふるには茶珈琲ビールの泡沫等に浮べ服用せしむるを宜とす

滴劑は醫師の命に従ひ正確に其滴數を算し少許の水或は砂糖水に滴下して與へ服用したる後は少許の水或は湯を飲ましむべし滴劑は劇毒薬を配合したるもの多きが故に滴數を誤るときは大なる危険あり又た滴劑には揮發性のもの多ければ滴下後直ちに内服せしむるを可とす滴劑は又た容易に火を引きてはんしょうばくほち焚燒爆發するものあるが故に夜間燈火を近づくべからず

散薬を與ふるには之を藥匙或は藥盃に移し少許の水又は湯を以て攪和して與へ若し其一部はいと盃底に残るときは更に水を加へ

オブラートとは薄き煎餅の如きものにして水にて濕し散薬を包みて嚥下するもの膠漿とは膠にて造れる蓋を具ふる薬を容る、筒なり何れも内服後胃中に於て容易に溶解す

攪和し與ふべし而して散薬は濕潤し易きが故に常に乾燥したる場所に置くを良とす其味甚だ悪しき散薬は甘味少なき菓子さしやくの一片を咀嚼せしめ其尙ほ口中にある間に薬を舌上に移し温湯又は清水にて嚥下せしめ或はオブラートに包むか膠漿に入れ與ふべし

丸薬を與ふるには先づ少許の水にて口中を濕ほさしめ丸薬を舌背の中央に置き温湯又は水にて早く嚥下せしむ通常味悪く散薬或は水薬として内服し難きものを丸薬とすが故に内服の際咀嚼せしむべからず

以上の水劑乳劑油劑滴劑等液體のものは常に日光を避け冷所に置くを可とす

以上の薬劑は川ゆへき時刻を醫師より命ぜらるべしと雖も若

し其命あきときは一定量（普通水藥は一回量三十瓦散藥丸藥は一包つゞ）食前三十分或は食後一時間を隔て、與ふべし若し鐵劑又たクレオソット等の如く胃粘膜を刺戟するものありせば食後直ちに與ふるを良とす

第四百十四節 外用藥

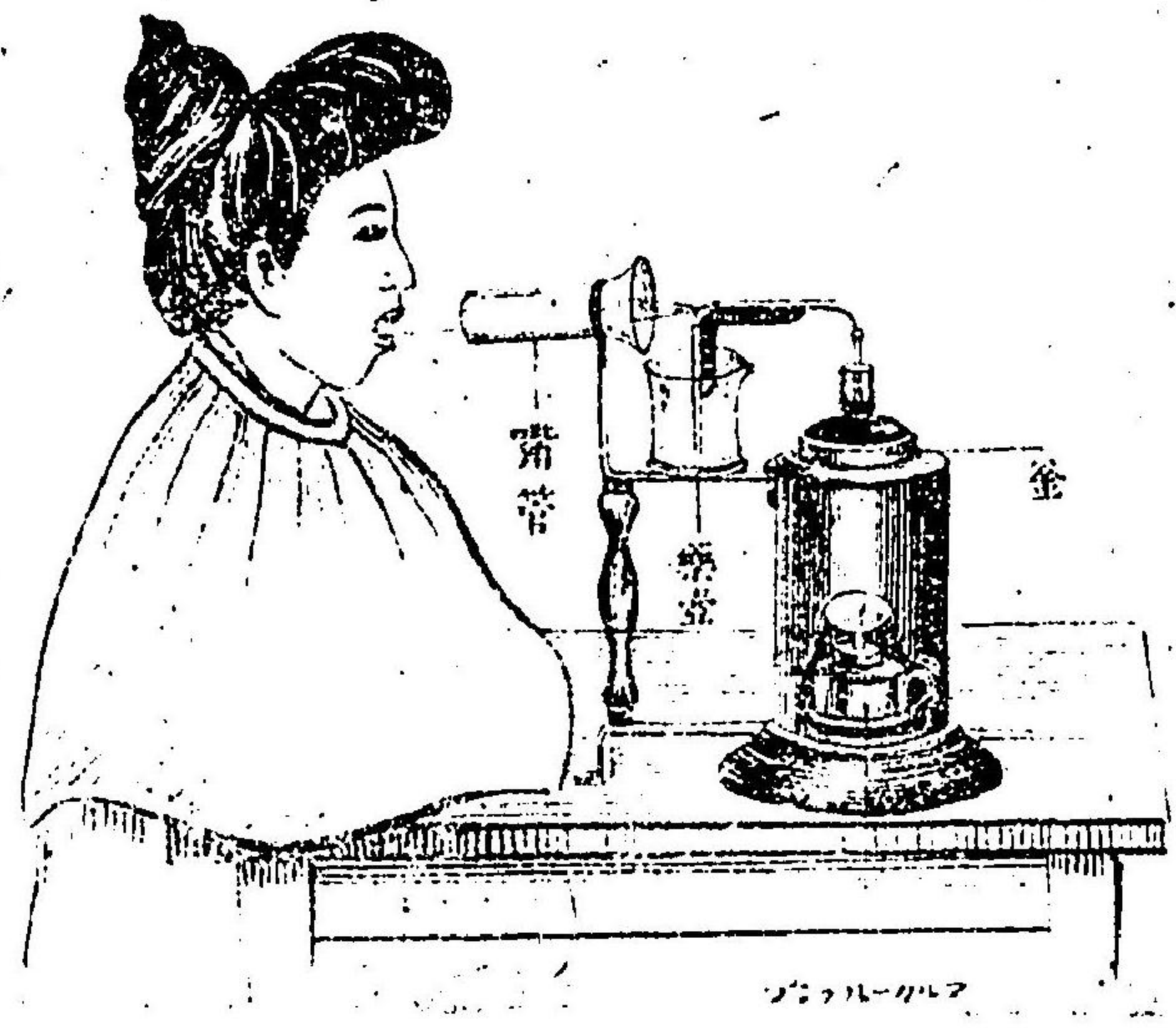
外用藥は口腔及び胃によらずして身體の外部より體內に送達せらるゝものにして内服するときは大害をなすもの多し其用法は藥の性質と目的とに由りて各差異あるのみならず一定の技術を要し若し用法を誤るか手術巧みあらざるときは反つて害あるものなるが故に常に醫師の命により其監督の下に施行せざるべからず以下其必要なるものにつき各別に論述せん

吸入法竝に吸入法

藥液を細霧又は蒸氣となして吸引せしめ呼吸器の諸障害の治療を謀るの法を吸入法と云ふ吸入法を行ふには通常蒸氣吸入器を用ゐる吸入器は湯を煮沸して水蒸氣を發せしむるに當り藥液を吸引し細霧とあして飛散せしむる装置にて釜と藥液を盛るべき藥壺一個蒸氣と藥液の霧とをれるものを通過せしむる管一個竝に火を點すべきアルコールランプより成る

今吸入器を用ひんとするには吸入器の釜の中へ約三分の二の水を盛り（其量多き時は熱湯噴出して火傷を起し或は釜の破裂を來す恐あり）燈火を點じて水を沸騰せしめ藥壺に藥液を盛り其嘴管より發する蒸氣を吸入せしむ此際患者は椅子に寄りしむるか或は坐せしめ若し衰弱せる患者あらば側臥位をこ

第二五百九十九圖



蒸気吸入器及び吸入の模様を示す

らしめ涎掛様の油紙を以て胸部を被ひ衣服の濕潤を防ぎ吸入器の嘴管を患者の口と併行の高さに來らしむべし
吸入法とは揮發性の藥品を瓶に盛るか或は布片脱脂綿等に浸して鼻口に近づけ吸入せしむるを云ふ失神せるものに醋、香

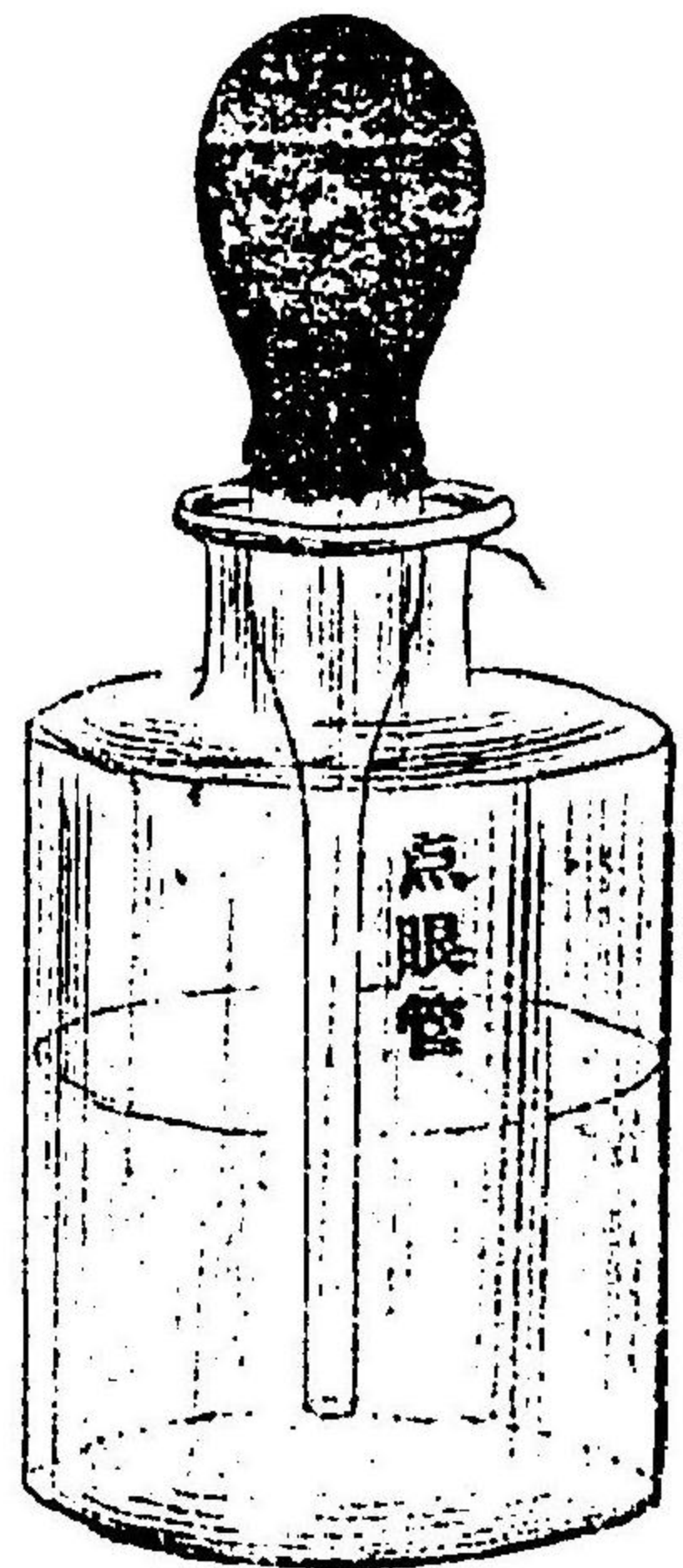
水等を嗅がしむるが如き我は産科的外科的手術に應用する麻醉藥即ち「コロロホル」麻醉は吸入法の一なり

點眼法

點眼とは眼内に藥液を點入するの法にして通常點眼管を用ゆ點眼管は硝子管の

點眼瓶を示す

第二百六十六圖



に入れ然る後其壓搾を去れば藥液は硝子管内に吸引せらる之

一端尖り一端の太き部に護膜乳嘴を備へたるものにして先づ乳嘴を壓搾して尖端を藥液中

を右手に持ち患者を仰かきしめ左手の拇示二本の指にて上下眼
 瞼を開き眼球を上内方に向はしめ右手に持ちたる點眼管の護
 膜乳嘴を再び壓搾して結膜内に藥液を一二滴づゝ點入し患者
 をして眼を閉ざしめ綿花又は綿紗にて藥液の流溢するを拭ふ
 べし總て點眼藥は劇毒藥多きを以て點眼の爲め全身中毒を來
 す事あり之を防ぐには點眼後内眥部を指を以て十五分間位壓
 迫すべし而して點眼の際は點眼管の尖端を以て眼球を傷けざ
 る様注意せざるべからず

點耳法

點耳法とは耳内に藥液を點入するの法にして患者の頭部を側
 方に傾け看護者は其耳翼を取りて少しく後上方に牽引し豫め

皮下注射は特に醫
 師より命せらるゝ
 時の外は産婆看護
 婦の爲すべからざ
 るものなるを勿論
 なり

温めたる藥液を點滴したる後ち脱脂綿を以て軽く外聽道口を
 栓塞し置くべし

皮下注射法

皮下注射を行ふには通常プラワツツ氏の注射器と稱する一五
 を容るべき硝子管と鋼鐵製の空洞針及び把柄を有する吸子と
 第二百六十一圖



皮下注射器を示す

消毒したる後ち注射器の内外を(石炭酸水及び硼酸水にて)
 消毒したるのち注射せんとする藥液を吸引し注射針を固着せ

より成れるものを
 使用す先づ術者の
 手指を消毒し更ら
 に注射すべき皮膚

しめ之を倒^{さか}まに持ち吸子を壓上して管中の空氣を驅逐し消毒せる皮膚の一部を手指にて摘み上げ皺襞を作り其皺襞の底部に向つて斜めに注射針を徐々に穿入し次で吸子を壓して藥液を徐々に注射し終つて手早く針を抜きさり其創口には「5% 沃度ホルムコロジウム」を塗るか或は絆創膏^{ばんそうご}を貼布すべし皮下注射を行ふは通常上肢の外側胸部及び乳腺部大腿の外表面等にして注射したる藥液は皮下結締織より血中に吸収せられ速かに效を奏するものごす

食鹽水注射は産婆が醫師の助手として行ふ場合多し

其他甚しく失血したるごきは醫師は〇、六乃至〇、九%食鹽水を多量に皮下に注射する事あり是には食鹽水注射器と稱する浣水器に度目を刻みたるものに暖かき(攝氏二十五度乃至三十度位)食鹽水千乃至二千瓦を盛り長さ護謨管を附し高さ一

乃至二メートルの部に上げ護謨管の末端に管腔の大ある注射針を附し皮下注射に等しき方法を以て注射するものにして注意すべきは食鹽水の溫度を終始同一からしめ冷却せざらしむる事竝に注入したる食鹽水の吸収を容易からしむる爲め注射する傍より其部の皮膚に輕き摩擦を加ふる事竝に注射の局部は皮膚の弛緩せる部を選ぶ事等にして通常臍腸竝に側胸部に於てす而して注射後は絆創膏を貼り壓迫繃帶を施し其部を身體の各部より少しく高く保ち吸収を容易ならしむ

浣腸法及び注腸法

浣腸及び注腸とは肛門より腸内に液體を注入するの法にして之を施す目的の異なるに従つて種々の區別あり

浣腸法を知らぬものは産婆にあらず

催下洗腸

- (一) 催下洗腸 大便を通利せしむるの目的を以て行ふものにして通常微温湯、石鹼水、蓖麻子油、蓖里設林等を用ゆ
- (二) 止下洗腸 下痢を止むる目的を以て行ふものにして通常澱粉煎、亞麻仁煎汁等に收斂薬を加へたるものを用ゆ
- (三) 鎮痛洗腸 腸の蠕動を鎮め疼痛を去らしむるの目的にして通常麻酔薬を用ゆ
- (四) 刺戟誘導洗腸 腸を刺戟し誘導するの目的にして刺戟薬を用ゆ
- (五) 滋養洗腸 患者が飲食する事能はざる場合に滋養物を送り込むの目的にして通常肉汁、卵黄、乳汁等に少許の食鹽を混じ用ゆ

洗腸及び注腸を行ふには通常洗水器を用ひ其護謨管の末端に

石鹼水微温湯は通常二百乃至五百瓦を入る

注腸

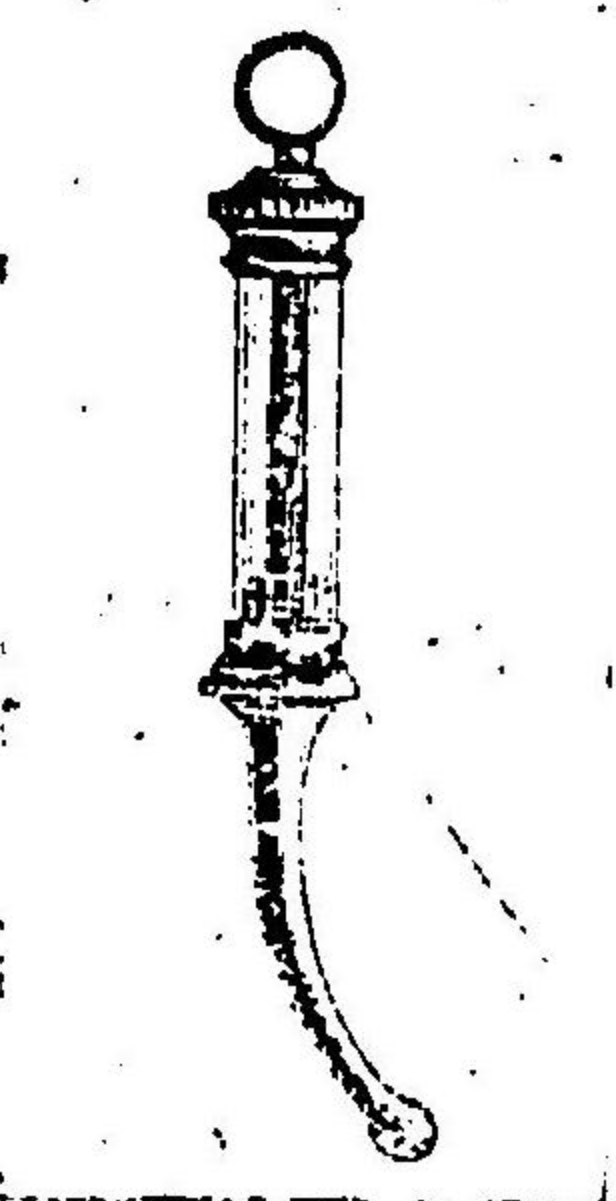
は尖端球形なる洗腸用嘴管を附し洗腸すべき液體を攝氏三十四五度とあし洗水器に容れ高さ二三尺の處に懸け嘴管の尖端には阿列布油を塗り徐々に骨盤誘導線の方向に肛門内に挿入し(約四仙迷)徐々に液體を注入す而して此際患者を臥床縁に横臥せしめ臀下に枕を挿入して少しく高くし臥床には油紙を敷き其汚染を避けざるべからず此の洗腸時注意すべき點は洗腸器の嘴管を挿入中竝に嘴管拔去後と雖も暫く手指を以て肛門を壓して緊閉せしむる事然らざれば液體は直ちに流出して其目的を達する事能はざるべし以上述べたる止下、鎮痛、刺戟等治療の目的を以て藥液を腸内に注入するを注腸と云ひ此目的に對しては初め催下洗腸を行ひ便通を得たる後ちに行ひ注腸後は殊に久しく肛門を緊閉して藥液の漏出を防ぐべし若

グリセリン洗腸器は産婆携帶器具のうちに見るべし

し催下の目的に偲里設林を洗腸せんと欲せば偲里設林洗腸器と稱する水銃スイテイを以て行ふを良とす

灌注法(洗滌法)

灌注法とは液體を腔内に注入して一時こゝに留まらしめ或は多量の液體を注ぎて其の部を洗ふを云ふものにして當該部を清潔にし或は柔軟にし何れも治療の目的にて行ふものあり而して灌注を行ふべき部は口腔、鼻、耳、陰、尿道、肛門其他腫瘍の腔洞創傷等なるも茲には唯だ産婆に必要



ゴム製注腸器を示す

ある諸部に就きてのみ述ぶべし

尿道灌注に用ゆる水銃はグリセリン洗腸器と同じ構造にして少しく小なり

- (一) 鼻腔灌注 護謨製の注入器又は少なる注水器を用ひ鼻孔内に其嘴管を挿入し徐々に藥液を注入す此際液體は多く他側の鼻孔より流出するものなりと雖も多少咽頭内に流入するを以て患者に首を俯うつむかしめ口より呼吸せしめ且つ努責を命じて其流入を防がざるべからず
- (二) 耳孔灌注 鼻腔に同じ徐々に藥液或は微温湯を注入すべしと雖も注意せざれば患者は屢々腦貧血を起し顔面蒼白を呈し頭痛眩暈嘔氣を催し遂に卒倒するに至る事あり
- (三) 尿道灌注 五瓦乃至十瓦を容るべき硝子製の水銃スイテイに醫師の命ずる藥液を吸引し之を倒まにして吸子(皮下注射の際に於けるが如く)を押して空氣を除き尿道内に注入し暫時尿道口を閉鎖して藥液を尿道内に留まらしむ但し此際外陰部及び

注入器は前以て消毒し置かざるべからず

(四) 腔灌注 腔灌注は其目的の異なるに従ひて用ゆる所の薬液を異にするものにして通常の洗水器を約三尺の高さに懸け目的の薬液凡そ千瓦を盛り(攝氏二十五度位とし)婦人を仰臥せしめ膝を屈め兩脚を開き臀下に便器又は受水盤を挿入し先づ外陰部及産婆の手指を消毒し然る後ち左手の示指二指を以て陰裂を開き右手の示指を徐々に會陰に沿ふて腔内に挿入し左手を以て洗水器の嘴管より薬液を噴出せしめつゝ挿入せる指に沿ふて腔内に送り腔壁竝に腔穹窿部に至るまで能く洗ひ且つ屢々挿入せる手指を以て陰唇緊帶を後方に押し腔内の薬液を流出せしむ而して單に消毒の目的には三十倍乃至五十倍石炭酸水百倍リゾール水を用ゐる止血の目的には攝氏五十度の

右左は勝手なり

滅菌水の代りに消毒薬を用ゐる方安全なり

石炭酸水又はリゾール水或は氷冷の同液を用ゐる陣痛催進の目的には攝氏三十八度乃至四十度位の滅菌水(一旦煮沸したる湯を煮沸したる容器に入れたる儘目的の温度に至るまで冷したるもの)を用ゐる一時間乃至二時間毎に反覆灌注す、總て止血或は陣痛催進の目的等には成るべく腔内に多量の液を灌注すべく腔内は餘り手指を以て攪拌せざるを良とす而て分娩直後及び産褥に於て腔灌注を行ふには常に一手を腹壁上より子宮底に貼じ壓迫を加へざれば液體は屢々子宮腔内に殘留して甚しき害をなす事あり其他腔内灌注に際しては空氣を進入せしめざる様注意肝要あり

塗擦法

此の塗擦は一回に
三十分乃至一時間
を要す

皮膚の一部に軟膏或は藥液を擦入し深部に吸収せしむるの法にして液體は筆又は綿球に浸して塗擦し軟膏なるときは其一定量を取り看護者自己の指頭を以て皮膚上に輪狀に擦入し充分藥品の皮中に竄入するに至りて止め其表面にガーゼ又は油紙を貼じ繃帶を施すべし而して此際皮膚及び手指は清潔を要するが故に前以て洗ひ置くを良とす、此の法中殊に必要なるは水銀軟膏塗擦法にして微毒性の妊婦に驅微法として醫師の最も賞用するものなり即ち水銀軟膏三五乃至五五を先づ一側の上膊の内面に擦入し翌日他側の同部に三日目には一側の大腿内面四日目には他側大腿の内面に第五日目は一側の側胸部に第六日目には他側の側胸部に塗擦し七日目に舊位置に戻り斯の如く塗擦する事反覆數十回に及ぶ而て水銀軟膏は其都度

鹽酸加里を火に近づくる時は爆發するの性ありて甚だ危険なり

部位を轉じて塗擦せざれば皮膚の炎症を起すの恐あれ共一局部の消炎法として塗擦する場合は此の限りにあらず又た水銀軟膏塗擦療法中は其中毒により口内炎を發し易きが故に成るべく口中を清潔に保ち且つ二乃至三%の鹽酸加里水を以て毎日數回含嗽を行はしむべし

座藥用法

座藥とは容易に體溫によりて溶解すべき脂肪質中に藥品を混じ圓錐形又は球形の固まりとなしたるものにして屢々肛門尿道等の疾病に用ゐらる又た球形あるものは多くは腔内に挿入する腔球なるものにて座藥と同一性質のものあり婦人科的疾患に用ゐらる、凡て座藥は挿入の際少許の脫脂綿を以て摘ま